

34127

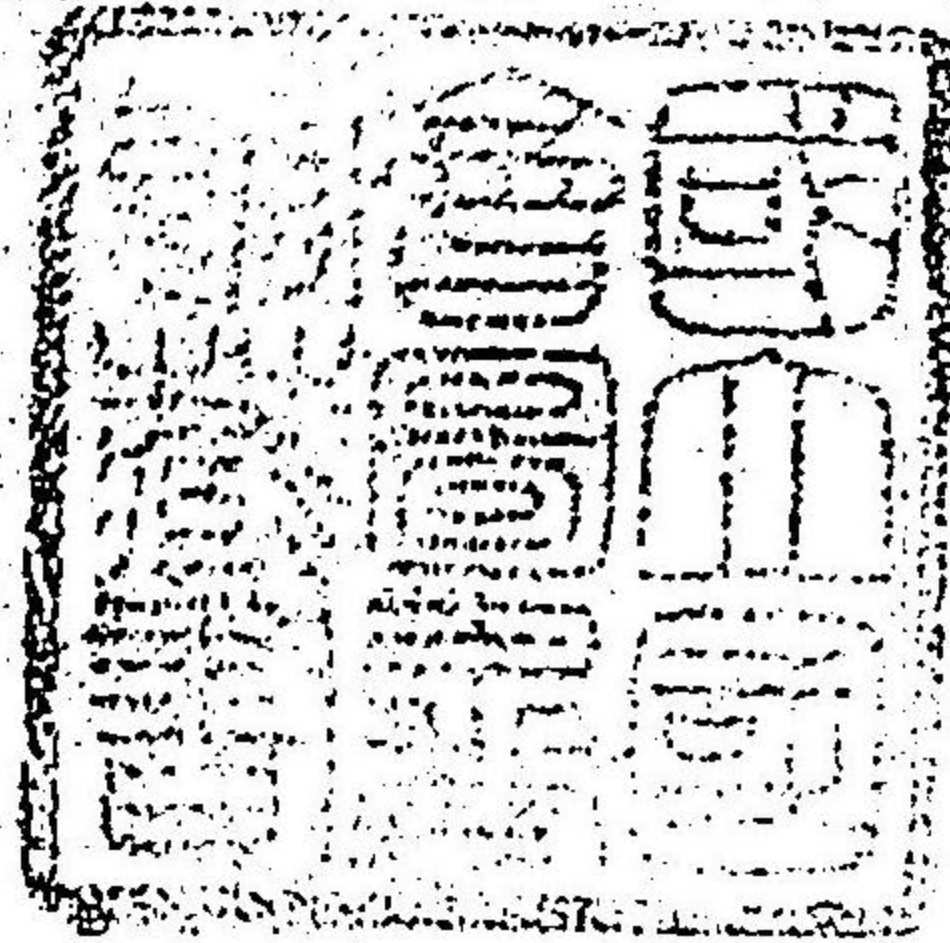
支那三國時代

全

松井廣吉著

東京博文館藏版

222.043
M289x



33068

那支 三國時代凡例

一 演義三國志の類は人の最も愛讀する所にして彼の講
談師なるもの語て孔明の智、關羽、張飛の勇、至れば、聞
くもの皆眉を昂け肩を聳して快と稱せざるなし、蓋し
三國志は多く『英雄記』等、憑據して過半は事實なりと
雖も、往々虚構附會して文飾を施したる所なきは非ず、
特に三國時代の大勢を視るに於ては、到底執るに足ら
ざるものたり、本書は専ら正史に據り、旁ら諸書に出入
し、重ぬる此の時代の大勢を明かにせんを期し、併せ
し智勇辨力を叙せり

一 國家の興るや英才輩出し、氣象旺々として所謂興國の

風なるものあり、三國時代の末期に於て晋朝正に勃興し、頗ぶる人傑に富む、然れども羊祜の如き特は吳と關擊あるものゝ行狀を取れるも、他は皆省畧に從へり

一 三國の形勢を叙するに於て、魏吳蜀の興亡を論ずる所聊か卑見を加へたり、紀傳三章また併せ見て英傑の行事を徴するに足らん乎

一支那の歴世三國時代の史最も備らずして、参考の間往々遺憾なき能はず、特は赤壁の役を叙する處、頗ぶる心を有るたるも、兩陣の兵數陣伍の法等一も徴知すべきを依て止た前史に憑據するの外はあらず、此の類皆然りとす、讀者獨り編者の淺聞陋識のみを罪する勿れ

一 諸葛亮の八門遁甲の陣、木牛流馬の法、書史之を記する

詳かなるものあり、然れども到底之を解する能はず、又實際に用ゐるに能はず、實際に用ゐたるもの亦之なり、故に皆記する所を

一 本書を論ずるに於て参考出入したる書史大略左の如し

- 資治通鑑 後漢書 漢紀 獻帝春秋 九州春秋 三國志 魏書 魏書 魏氏春秋 曹瞞傳
- 魏武故事 典略 漢魏春秋 漢晉春秋 蜀記 遼陽紀 吳書 吳錄 吳歷 江表傳 傳
- 子 山陽公載記 益部耆舊雜記 華陽國志 周史約書 括地誌 按餘考證 金瓶梅外書三國志
- 十八史略 蒙求 文選 和漢年契 魏四史經 日本書紀

支那三國時代目次

目	次
第一 三國時代……………	一頁
第二 形勢の一……………	五
(外戚專權宦官政治より黃巾の賊亂に至る)	五
第三 形勢の二……………	一五
(董卓の篡立より三國の鼎峙に至る)	一五
第四 形勢の三……………	三三
(魏蜀吳の興亡)	三三
第五 古今第一の快戦……………	四八
第六 人種……………	五六

第七 人物氣象……………六三

第八 智勇辨力……………九四

第九 紀傳の一 (曹操紀)……………一一九

第十 紀傳の二 (劉備紀)……………一六三

第十一 紀傳の三 (孫權紀)……………二〇〇

第十二 文學……………二三三

目次

支那三國時代

柏軒 松井廣吉著

第一

三國時代

支那は世界に於て最も古き國なり、古代に於て最も開化したる國なり、特に其の智勇辨力の發達したる、多く世界に其の比を見ず、就中其の最たるを東周末路の春秋戰國時代、及び東漢即ち後漢末路の三國時代とす、是れ皆我が足利氏末路の戰國時代と匹似して、共に世界歴史上の大觀たるものなり

春秋戰國時代は、我が日本紀元前神武天皇御即位前一百年代より紀元四百四十年に至り、西洋に於ては、埃及、猶太、希臘の盛衰より羅馬の立國に至り、西曆紀元前六百年代より三百年代に至り、ソクラテス大賢、アレキサンデル大王、エパミノンダスの雄才等あり、

支那に於ても智勇辯力の士輩出し、學術の光輝燦然として發揚し、中央亞細亞より東方亞細亞の廣原に於ては、正さに人生の奇觀を窮極したる時代なり
 三國時代は春秋戰國時代を距ると殆んど五百年なり、抑も三國といふは魏、吳、蜀なり、故に精確にいへば劉備荊州を領し、三國鼎峙の形始めて成りし建安十四年より起算するを正當とすれども、本書に於ては是より先き二十五年、黃巾の賊徒蜂起せる中平元年よりす、蓋し三國の豪傑は、大抵黃巾の亂に仍て奇勳を立て、漢朝も亦是より亂れて、天下分裂の端を啓きたればあり、乃ち三國時代といふは、東漢靈帝の中平元年に起り、蜀と魏と亡びて、晋の武帝(司馬炎)の即位せる泰始元年(魏咸熙二年)に至る、其の間八十二年なり

我が日本に於ては、成務天皇の五十四年甲子、即ち紀元八百四十四年より、神功皇后の六十五年乙酉、紀元九百二十五年に至り、西曆百八十四年より二百六十五年に至る、日本に於ては熊襲征討、三韓征服等あり、神功皇后の三十九年魏明帝の景初三年、蜀後主の延熙二年、吳大帝の赤烏二年に、使節を魏に遣はし玉へるとあり、翌年魏は使を日本に遣はして報答したり、西洋に於

ては、極盛なりし羅馬帝國漸く衰へ、ペルシヤ王國の建立あり

此の時代に於ては、其の學術の發達遠く春秋戰國の時代に及ばすと雖も、智勇辯力の旺盛なるは迥かに其の上に在り、英雄傑士雲の如く輩出し、一起一仆、竟に天下を三分して智勇相戦ひ、辯力相摩し、奇正變幻の妙を極めしに至ては、實に人目を快にするものあり

特に東漢は世々氣節を尙べるより、人物の風格大に高尚となり、智臣謀將の出處進退甚だ見るべきものあり、其の眼識、批評、辯力、皆以て百代に炳耀するに足る

支那歷朝の史家は、皆蜀を以て正朔とし、魏と吳とを以て篡位とす、蓋し劉備は漢の中山靖王劉勝の後にして、景帝の玄孫なりと自稱し、其の蜀を取るや、實に漢朝を興復するを名とせるが故ならん、然れども魏は所謂支那本部を掩有して其の國廣く、且つ智勇の將士に富み、形勝を占有し、吳と蜀とに至ては僅かに一隅に偏安せるに過ぎず、其の實力固より魏と相角するに足らず、故に本書に於ては魏を以て正朔とす、蓋し蜀を正朔とするは實力を外にして、區々の名分に拘泥せる支那的國粹論に出でたるの

み

此の時代に於ける諸豪は大略左の如し

曹操 劉備 孫堅 孫策 孫權 董卓 袁紹 司馬懿 司馬昭

(右英雄)

諸葛亮 荀彧 郭嘉 龐統 徐庶 周詡 魯肅 呂蒙 陸遜

費禕 賈詡 毛玠 程昱 姜維 鄧艾 鍾會 (右智士)

呂布 夏侯淵 張遼 樂進 于禁 張郃 徐晃 典韋 許褚

關羽 張飛 馬超 趙雲 黃忠 魏延 關澤 黃蓋 周泰

甘寧 徐盛 丁奉 朱桓 顏良 文醜 (右勇士)

支那人由來誇張の癖あり、而して其の文章また崇高雄大に適す、故に彼の史家稗官往々時代を粉飾し人物を粉飾す、其の實に過ぎたるもの少しとせず、然れども滔々風をなし、竟に時人を感化して自然に崇高雄大の人物を型成す、古人いふ「文章は經國の業なり」と嗚呼誠に至言なり

第一 形勢の一

外戚專權宦官政治より黃巾の賊亂に至る

天下分裂の由て來る所を案するに抑も久し、蓋し東漢の衰ふるや、實に外戚專權に次々に宦官政治を以てしたるが故なり、外戚專權と宦官政治とが、痛く天下の民心を離叛せしめたるが故なり

外戚專權のとは支那の歷朝に絶えざる所、我が朝に於ては藤原氏の盛時に於て之を看る、蓋し藤原氏の政權を専らにせるは、其の女を納れて天子の皇后若くは女御とし、其所生の皇子の幼冲なるを奉立して天子とし、以て庶政を關白せるなり、支那に於ける外戚專權の事跡また斯の如し、徳川家康の如きは深く此の弊を慮かり、將軍の妻妾は力めて政治に干與せざる京師の親王、若くは貧乏公卿及び諸侯以下の士の女に求めて、容易に執政及び大諸侯より之を求めず、執政及び大諸侯より妻妾を入れしむるは、是れ外戚專權の因を植ゆるものなればなり、識者深く徳川氏の政譽宜しきを得、

家康の思慮悠遠なるを賞す

然るに支那に於ては、歴代外戚専權の弊を承けながら、之を杜絶する所以を思はざりしは迂を謂ふべし、而して外戚専權の弊、東漢に於て特に其の甚だしきを見る

章和二年景行天皇の十八年なり章帝十一の崩するや、和帝十歳にして即位し、太后竇氏朝に臨みて政を聽けり、太后の兄竇憲、弟竇篤、共に顯要の地位に立つ、初め竇氏入て章帝に寵せらるゝや、時正に馬太后の一族罪せられし時なるを以て、竇后の勢力貴盛を極め、皇太子慶を讒して之を廢し、驛を立て、皇太子とす、和帝是なり、而して憲は當時禁兵を典司せるが故に、第五倫の如きは上疏して章帝を諫めしとあり、帝も亦憲が勢ひを恃んで沁水公主先帝(明帝)の女なりの田を奪はんとせる時、大に逆轉して憲を孤離腐鼠に喩へしとあり、竇后爲めに服を毀て深謝し、事初めて解くを得たり、然るに幼冲の天子立つに及んでは、憲黨勢威を恣にせざらんや、崔駰曾て「漢興てより外戚二十家、族を保ち、身を全ふせるもの僅かに四人のみ」とて、豫め憲か跋扈を戒めたるも省みず、曾て匈奴を伐ち燕然山エンネン山まで至り、偉功を策し歸るや、竟に大將軍に任せられ、威名日に盛

なり、耿璆、任尙等其の爪牙となり、鄧疊、郭璜等其の心腹となり、班固、傅毅其の文章を典り、地方の刺史守令等多くは其の一門より出で、朝廷を擧げて其の黨の如くせしかば、和帝憤怒に耐えず、中常侍鄧衆と謀り、迫て自殺せしめたり、是に於て外戚専權の弊は一時掃蕩せられたれども、更に宦官政治の濫觴を來たしたり、鄧衆は即ち宦官にして、謹敏機智あり、帝を助けて竇を誅するや、大長秋となり、政治皆其の手より出づ

安帝の時に至ては、宦官江京等内外を煽動し、競ふて奢侈を爲す、安帝の崩するや、皇后閻氏朝に臨んで政を専らにせんと欲し、閻顯等と謀つて幼年の皇子北郷侯懿を迎立せんとす、時に宦官孫程、王康等の十九人、權を閻族に奪はれんとを恐れ、濟陰王を迎へ立て、帝位に即かしめ、閻顯を殺し、閻后を離宮に移す、而して十九人皆列侯となる、是れ宦官等外戚と競争して勝利を得たるなり

濟陰王は即ち順帝なり、宦官競ふて恩勢を賣り、其の根幹頗る深さを加ふ、帝の皇后梁氏、梁后の父梁商大將軍たり、商卒するに及び、其の子冀次で大將軍となる、梁

族廷に満ち、勢甚だ熾なり、故に後また外戚と宦官との競争となれり

順帝の崩するや、冲帝二歳にして即位す、梁太后朝に臨み、梁冀事を執る、翌年帝崩す、太后章帝の玄孫續を立つ、之を質帝といふ、帝冀の専横を憎み、朝會の時に呼んで跋扈將軍といふ、冀深く之を惡み、左右に命じ、毒を煮餅に盛りて帝に勸めしむ、帝之を以て崩す、冀乃ち太后と謀り蠶吾侯志を迎へ立つ、時に年十五、桓帝是あり、梁太后依然朝に臨み、梁氏の一族益々滋蔓し、竟に其の女を納れてまた帝の皇后とす、賢良の臣多く斥けられ、而して冀の妻孫壽、瑁城君に封せらるゝに至り、執政二十年、一門前後七侯、三皇后、六貴人、二大將軍あり、公主天子の女に尙するもの三人、其餘の卿將校尹五十七人に及び、凶恣日に熾なり、帝豈不平ならざらんや、宦官者流豈嫉妬せざらんや、竟に帝と宦官單超、徐璜等と血を出して盟ひ、謀を定めて冀の邸を攻む、冀其の妻と自殺し、外戚全く掃蕩せられたり、單超等功を以て五人共に列侯となる、是に於て權勢總て宦官に歸し、勢ひ内外を傾動し、恣に吏員を殺す、既にして黨獄なるもの起り、宦官多く賢良の士を屠盡せしかば、民心大に離叛し、竟に天下瓦解するに至る

蓋し賢良の士人の輩出せると、未だ東漢の如きは鮮し、楊震、李固、杜喬、荀淑、陳寔、荀爽、鍾皓、張陵、崔寔、韓韶、黃瓊、范滂、陳蕃、李膺、劉龍、王暢等は皆一代の賢才なり、又野に於ては徐穉、姜肱、袁閔、韋著、李震、魏桓、郭泰、茅容、孟敏、申屠藩、庾乘、晉文經、黃允、仇香等あり、皆氣節を以て相尙ひ、朝廷に仕へず、諷誦談論以て天下を縦斷す、帝の師甘陵の周福擢でられて尙書となる、同郡の房植また盛名あり、郷人記して曰く「天下規矩房伯武植、因師獲印周仲進福」と、是より二氏の門生互に相誣り、始めて甘陵南北黨人の議あり、又汝南の大守宗資なるもの范滂を功曹とし、南陽の大守城瑨は岑暉を功曹となし、皆心を委して聘任す、二郡の民謠ふて曰く「汝南大守范孟博滂、南陽宗資主書諸、南陽大守岑公孝暉、弘農成瑨但坐嘯」と、時に大學の諸生三萬餘人、郭泰、賈彪其の冠たり、李膺、陳蕃、王暢等と互ひに相重んず、故に大學の中に「天下模楷李元禮膺、不畏疆禦陳仲舉蕃、天下俊秀王叔茂暢」といふに至る、是に於て天下競ふて風動し、公卿以下其の貶評されんことを恐

れて、皆其の門に到らざるなし、岑陞曾て成瑨を勸め、富商張汎を捕へて之を誅せしむ、汎は宦官の勢援を恃めるもの也、宦官乃ち瑨を訴へ、之を獄中に殺す、陞奔りて免る、時に陳蕃大尉たり、李膺司隸投尉たり、河内の張成なるもの宦官と交通す、曾て子をして人を殺さしむ、膺収めて成を殺す、宦官憤懣し、成が弟子牟修をして膺を訴へ、膺等大學生を養ふて朝廷を譏ると上言せしむ、帝聽きて大に怒り、大學生等を逮捕せしめんとす、陳蕃之を卻けて曰く「今捕へんとするものは皆憂世忠公の臣也、假令罪あるも十世之を宥すべし、況んや罪狀明白ならず、漫りに收捕すべけんや」と、帝益々怒り、膺等を黃門北寺の獄に下す、杜密、陳翔、陳寔の徒二百餘人皆連坐せられ、陳蕃また官を免せらる、之を『黨人の獄』と稱す

『黨人の獄』は、天下皆認めて名賢の厄に會ふと爲し、或は之を名譽の如くに思へり、故に度遼將軍皇甫規の如き、西川の豪傑と稱せらるるものは、黨獄に與らざるを耻て自から入獄せんとを請ふに至る、賈彪曰く「吾れ西行せずんば大禍解けず」と、洛陽に入て城門校尉竇武に訴ふ、武上疏して膺等の忠節を稱し、之を許さんとを請ふ、膺

等また宦官の子弟に引及し、辭頗ぶる之に連る、宦官等懼れて竟に帝を勸めて膺等二百餘人を放免せしむ、嗚呼彼の賢才當時に在て空談横議を恣にす、危禍を得る固より其所と雖も、斯る大獄を起し、曖昧の間に結了し、而かも其の始終總て宦官の言説に由る、宦官の強戻と政法の解弛と亦甚だしからずや

此の時に當て李膺等二百餘人皆郷里に歸て終身禁錮されしと雖も、其の名聲は益々高く、天下皆陳蕃、竇武、劉淑を三君と稱し、李膺、杜密、王暢、荀昱、劉祐、魏朗、趙典、朱寓を八俊と稱し、郭泰、范滂、巴肅、宗慈、夏馥、尹勳、蔡衍、羊陟を八顧と稱し、岑陞、張儉、程超、范康、劉表、陳翔、孔昱、檀敷を八及と稱し、度尚、張邈、王孝、劉備、胡毋班、秦周、喬檜、王章を八尉と稱す、而して宦官また黨人の獄を起せり

桓帝の崩するや、竇皇后朝に臨み、竇武策を禁中に定めて河間孝王の曾孫宏を立つ、年甫めて十二、竇帝是なり、建寧元年陳蕃また官に就き、尙書事を參録す、而して李膺、杜密、尹勳等の諸人また悉く朝に列す、宦官曹節、王甫等また竇太后に陥ひ、漸

く信近せらる、竇武、陳蕃之を憎み、太后に白して之を誅せんとす、宦官大に恐れ、相謀りて尙書を脅かして詔書を偽造して武等を捕へ、蕃を獄に投て、之を殺す、武竟に自殺し、太后南宮に移され、宦官また政權を執る、天下愕然たり、宦官また黨人の獄を起し、李膺、杜密、范滂等を羅織して之を獄に下す、州郡の吏之を逮捕するに、皆涙を垂れ、或は共に逃亡せんとを勸むるに至る、黨人の死するもの百餘人、連坐して廢禁せらる、もの六七百人に及ぶ、獨り郭泰免かれたり、慟哭して曰く「詩云、人之云亡、邦國殄瘁、漢室滅矣、但未_レ知_レ瞻_レ烏爰止_三于誰之屋_一爾」と、是より賢才多くは山林に隱遁し、朝廷群小の巢となり、宦官獨り跋扈して民心皆去る、蓋し東漢の世は、名節を以て國の元氣とす、故に朝廷の諫官等侃々直言し、少しく不可なるとわれは直ちに壯言切語す、天子權臣皆放慢なるを得ず、紀綱豈振はざらんや、然るに今賢才皆死滅し、其の免かるものは亦悉く山林に隱遁し、朝廷群小の巢窟となる、何を以て天下を統御すべけんや、初平元年に至ては、竟に黃巾の賊起りて、天下土崩瓦解の端緒を啓けり。

形勢の一

初め鉅鹿に張角なるものあり、不第_{當時士を用ふるに試験法あり之に及第するものは登用し落第するものは不第す}の秀才なり、山中に入て異人に會ひ、仙術を得たりと稱し、自から太平道人と號す、符水を以て病患を治し、頗ふる異民の心を得、後自から大賢良師と號し、弟子五百人を四方に分遣して術を行ひ病を救はしむ、又讖言を造りて「蒼天已死、黃夫當_レ立、歲在_三甲子、天下大吉」と流傳し、符に甲子の兩字を書して愚民を惑感す、斯の如きと十餘年、青、幽、冀、荆、楊、袁、豫の諸州に於て特に人望あり、張角以爲らく、人心は得難し、而して今斯の如し、大事を成すの好機ありと、中平元年甲子竟に兵を起し、自から天公將軍と號し、弟張梁を地公將軍とし、張寶を人公將軍とし、人衆皆黃絹を以て標識と爲さしむ、故に黃巾の賊と稱す、四方響應し、京師震動す、逆臣皆以爲らく、黨人の獄に由て人情憤怨するの致す所なりと、依て俄かに黨人を赦し、又盧植、皇甫嵩、朱雋等をして賊を討たしむ、勝たず、偶々騎都尉曹操兵を率ゐて抵る、依て合擊して大に賊兵を破る、次で劉備、公孫瓚等また民兵を募りて來り會し、盧植を助けて張角と戰ひ、之を圍む、將に城を陷むれんとするとき、宦官等植を誣ひて罪に抵し、皇甫嵩

に詔して角を討たしむ、嵩大に張梁と戦ふて之を斬る、是より先き張角病んで卒す、依て其の棺を發きて屍を戮し、首を京師に傳ふ

黄巾の餘黨更に趙弘を魁とし、十餘萬の衆を以て宛城に據る、朱儁之を攻む、賊降を請ふ、諸將或は之を許さんどす、儁曰く「兵の固と形同ふして勢異なるあり、昔は秦項の際には民に定主なかりしが故に、賞を附して以て來降を勸む、今海内一統して、獨り黄巾逆を起す、其の降を納るゝも以て善を勸むるに足らず、却て敵を縱にし寇を長ずるのみ、良計に非ざる也」と、因て急に攻めて之を破る、賊竟に四散す

是に於て三國時代の豪傑は稍々其の頭を擡げたり、蓋し黄巾の賊亂に功を立てしものは曹操、劉備、關羽、張飛等なり、是より先き十年、熹平三年甲寅には、吳郡の司馬孫堅、會稽の妖賊許生を討て之を斬る、劉備は當時布衣なりしが、公孫瓚と同時く會て盧植に師事せるとあるを以て、關羽、張飛等と陣に抵り、功を以て安喜尉に除せらる

黄巾の賊已に平ぐと雖も、紀綱是より弛し、地方の豪族、朝命を奉せざるもの多し、

中平四年には、涼州の韓遂兵を起して漢陽を圍み、大守傅燮を殺す、董卓朝權を築するに及んでは、群雄諸方に颯起し、殆んど戰國時代の如くなるに至る

第三 形勢の二

董卓の篡逆より三國の鼎時に至る

中平六年靈帝崩し、皇太子辨即位す、年十四、何太后朝に臨み政を聽く、大將軍何進何太后の兄の政權を執る、是れ亦外戚政治なり、而して宦官との競争を起す

蓋し宦官は閹豎のみ、後宮に奉事して后妃の間にも周旋するが故に、其の慾情を杜絶するため、皆其の罪丸を絶たれて、資性一に婦人の如くなるものなり、後宮に潜伏し、袞龍の袖下に隠れて陰謀嫉妬是れ事とし、以て政權を剽むも固より其の所ならんのみ、外戚に至ては、稍々英氣あり、而して大將軍若くは他の顯位を得て爪牙極めて多し、

固より宦官輩と比す可らず、然れども畢竟婦人を以て政權を買ふもの、實際何等の實力があらん、何を況んや當時は宦官外戚等京師に在て奢侈と陰謀とのみに心を奪はれ、地方の事は總て顧みざりしぞや、何を況んや紀綱解弛し、地方に豪族割據し、各々私兵を擁護して其の實力遙かに朝臣の上に有りしかや、蓋し當時の形勢は、猶ほ我が朝藤原氏の專權時代の如きのみ、藤氏の一門、外戚となつて政權を争ひ、美女を天子に納れて以て政權を買ひ、各々官爵を所有するも、驕侈佚樂、徒らに虚譽を貪ばるに過ぎず、大將たる者劍を抜くとすら知らざるものもあり、紀綱解弛し、地方の武人等土地を兼併し、漸く力を蓄へ威を積みて以て自立を謀る、故に武人一喝すれば藤氏の一門皆閉息し、義朝、清盛の輩をして廊廟の上に跋扈せしめ、竟に政權を平氏に奪はれ、武門政治の端を啓けり、東漢の末路また之に異ならず、何進大將軍たりといふと雖も、其の實力は未だ地方に在りし董卓等に及ばず、故に中軍校尉袁紹獻策し、何進に勸めて宦官を誅せんとするや、進決すると能はず、紹等また四方の猛將を召し、並びに兵を率ひて京師に向はしめ、以て何太后を脅して宦官を誅せしめんとす、主簿陳琳諫め

て曰く「將軍今皇威を總べ、兵要を握る、宦者を誅するが如きは洪爐を鼓して毛髮を燎くが如きのみ、速かに立斷すべし、却て利器を委釋して更に外助を求めば、功必ず成らず、權力竟に外に移らん」と、進從はず、典軍校尉曹操また笑て曰く「宦官の禍は古今の有るべき所、世主止た權寵を借して此に至らしめざれば可なり、今其の罪を治めんとせば一獄吏にして足る、何を仰々しく外兵を召すを要せんや、且つ盡く之を誅せんとせば、事必らず發露せん、進夫れ敗れん哉」と、進竟に董卓を召し、兵を率ひて京師に入らしむ、尙書鄭泰、盧植等諫むれども進皆用ひず、卓未だ至らざるに宦官等皆恐れ、謀て詔を矯め、進を召し、兵を伏せて之を殺す、袁紹變を聞か、兵を率ひて宮中に入り、諸宦官を捕へて少長となく皆之を屠る、中常侍張讓宦官等困迫し、帝及び陳留王協を擁して宮を出で、讓等河に投つて死す、是に於て外戚宦官と共に滅盡す、是より以後宦官なきに非ず、外戚なきに非ず、然れども英傑輩出し、知勇精力を以て相争ふ時代に於ては、婦人の如き宦官外戚は止た閉息するの外なきのみ、有れども尙ほ無きが如き也

天子は宮を出で、奔竄し、外戚宦官と共に滅盡す。此の時に當て何ぞまた堂々たる漢家の帝室なるものあらんや、乃ち之あるも、亦朽腐の空器のみ、倨傲なる一董卓數萬の兵を率ひ至れば、朝權悉く之に歸せると何ぞ甚だ恠むに足らんや

董卓の京師に入るや、奔竄せる天子を北芒阪下に迎へたり、之と共に語るは了すべからず、更に陳留王と語るに要領を得、卓喜ひて王を賢なりと爲し、帝を廢して弘農王と爲し、陳留王を立て、帝とす、之を獻帝といふ、卓また何太后を捕へて之を絞殺す、嗚呼董卓天子を廢立すると朽木も管ならず、太后を殺すと武を捨るが如し、其の暴戻驚くべしと雖も、漢廷の衰微、紀綱の解體も亦甚だしからずや

袁紹、曹操の如きは、當時鐵中の鋒々たるもの也、皆初めより大志を懷きて、人の下風に立つを欲せざりしもの也、特に紹は一門恩を樹つると四世、其の門生故吏天下に滿ち、頗る豪傑の心を得たるが故に、先づ山東に走り、其の弟術は南陽に走れり、曹操も卓之を驍騎校尉に任せしかども就かず、姓名を變じ、東に歸りて陳留に至り、家財を散して兵五千人を糾合し、師を發して以て卓を討んとす

初平元年山東の州郡兵を起し、袁紹を推して盟主と爲し、以て董卓を討つ、紹自から車騎將軍と號し、河内大守王匡と河内に屯し、曹操は酸棗に屯し、袁術は魯陽に屯し、長沙太守孫堅また兵を擧げ、術に合して魯陽に屯す、術後南陽に據る、衆各々數萬、豪傑多く之に應ず、卓恐れて都を長安に移し、洛陽の宮廟を燒き、諸帝の陵を覆き、天子を擁して長安に移らしむ、時に紹等皆卓の強を畏れて敢て進まず、操曰く「大衆已に合す、諸君何ぞ躊躇するや、今卓宮室を焚き、天子を劫かして都を移し、海内震動す、是れ一戰して天下を定むるの機あり」と、自から進んで滎陽に至り、卓が將徐榮と戰ふて大に破れ、竟に遁れて酸棗に還り、後河内に屯す、二年袁紹、韓馥等議して大司馬劉虞を帝とせんとす、虞叱して之を斥く、孫堅進んで陽人に屯し、董卓と戰ふて之を破り、進んで洛陽に入り、陵廟を掃除し、傳國の玉璽天子傳位の玉璽を城南甄宮の井中より拾ひ、軍を引て魯陽に還る、是より諸將一致せず、各々諸方に割據す、荊州の刺史劉表は南郡の名士蒯越、蒯良の謀を用ゐて南江陵に據り、北襄陽を守りて荊州の八郡を定め、袁紹は辦力の士辛評、荀彧等をして冀州の牧韓馥に説かしめ、馥を逐

て冀州を占領し、袁術は壽春に據りて江東を掩有し、孫堅其の下風に立つ、術孫堅をして劉表を討たしむ、表黃祖を遣して逆へ戦はしめ、堅を射て之を殺す、堅の子孫策乃ち父に繼ぎて江東を經營す

董卓を討ずるの諸軍解體し、諸方に割據するの端を發せるに、河南の尹朱儁は初め卓に従ひ、洛陽を守りしが、僭かに山東の諸將と謀を通じ、東中牟に屯し、兵を發して卓を討つ、徐州刺史陶謙兵を發して之を助く、三年正月卓大に怒り校尉李傕、郭汜、張濟等を遣して儁を中牟に破らしめ、竟に潁川を取る

此の時に方りて卓横虐至らざる所なく、城中の婦女を収めて兵士に與へ婢妾となし、宮人公主を姦淫し、自から太師と爲り、尙父と號す、宗族内外并に朝廷に列し、其の妾の子襁褓にあるものも皆侯に封せられ、卓が孫女白未だ笄せざるに涇陽君に封せらるゝに至る、卓また郿塢城を築く、高さ長安城と等し、官庫の財幣を蓄へ、穀を積んで三十年の儲を爲す、其の權威一に天子に異ならず、百姓嗷々として憤怨し、道路目を側つ、司徒王允外は卓に媚從し、内密かに王室のために謀り、百方卓を誅せんといふ、

卓の將呂布驍勇絶倫なり、常に卓の左右を護衛す、卓之を信愛して密て父子と爲る、曾て少しく卓の意を失へるに、卓激怒して戟を布に擲つ、布拳を以て之を避く、是に由て心私かに卓を怨む、布また卓の侍妾に通ず、事の發覺を恐れて安んせず、王允乃ち布に結びて内應を爲し、以て卓を殺さんとす、三年四月帝疾癒へ、未央殿に會宴するを機として卓を召し、兵を北掖門に伏せて之を刺す、卓車より墮て大に呂布を呼ぶ、布曰く「賊を誅するの詔あり」と、直ちに戟を以て卓を殺し、竟に其の三族を誅夷す、吏民皆萬歳を稱す、卓の尸を市に曝し、大炷を臍中に置く、光の曙に達すると數日なりといふ、後卓が郿塢の庫中を収む、其の金三三萬斤、銀八九萬斤、珠玉錦綺、奇玩雜物皆山の如し

董卓は其れ平清盛の如きか、漢室は宦官政治と外戚專權とに仍て地方豪族の勢を樹て黨を結ぶを顧みず、故に董卓兵を提げて洛に入れば、朝權忽ち其の手に歸す、是れ豈清盛藤氏を驅逐して威福を恣にしたるに類せずや、特に卓が驕傲甚だ清盛に肖たり、王允の陰謀幸ひに成り、凶豎を一撃に殛じ得たりと雖も、固より何等の實力あるに非

ず、呂布の如きまた匹夫の勇のみ、王允政權を執るといふも畢竟空器を有するのみ、故に卓が部將李確、郭汜兵を擁して長安に入るや、王允及び其の一味の輩は皆斬殺せられ、呂布の如きは奔竄して關を出で、而して陪臣李郭の徒一朝にして廟廟に踳踳するの醜態を現出するに至れり。

此の年曹操は黃巾の餘黨を破りて袁州刺史を領し、精兵三十餘萬を得、麾下に智勇の士多し

陶謙諸州の守と謀り、朱備を推して太師とし李、郭を討じて天子を迎へんとす、李確等賈詡の謀に従ひ、備を徵して太僕に任ず、故に事皆成らず

四年曹操、袁術と封丘に戦ふ、術破れて壽春に走り、自から揚州を領す、曹操また陶謙を徐州に撃て之を破り、男女數萬人を泗水に殺し、また睢陵、夏丘を攻めて悉く之を屠る、雞犬も亦盡き、墟邑行人なし、蓋し操其の父の仇を報するなり、此の年公孫讚は又劉虞を攻めて之を殺して盡く幽州の地を有す

興平元年劉備、陶謙を救ふ、謙上表して備を豫州刺史と爲す、曹操また謙を攻め備を破る、時に陳留太守張邈なるもの呂布を迎へて操と戦ふ、袁州の郡縣皆布に應じ、止だ甄城、范、東阿の三城動かず、操遠て布と戦ふ、既にして陶謙卒し、劉備をして徐州を領せしむ

是に於て天下七裂八截して、諸雄互ひに地方に割據せり、今其の大略を視るは左の如し

公孫度は遼東に割據せり其の子康、袁熙に殺され、尙に傳はりし

公孫瓚は幽州に據る瓚後に袁紹に滅せられしが幽州は尙の手に歸し竟に曹操に併せらる

袁紹は鄴に治し、南單于等を降伏せしむ

曹操は袁州の一部を有す

呂布は陳留を有し、曹操と袁州を分割せり

袁術は壽春に據り、江東を掩有す

孫策は袁術の下風に立てるも、後には江東を徇へて其の地方を經略せり袁術亡ふるに及びて全く江東を

所有せり

張魯は漢中に割據せり後に曹操に降りし。劉備は漢中を取る。

劉璋は益州に據る其の地後に劉備に歸す。

劉表は荊州に據る荊州後に曹操に歸せしが赤壁役の後に劉吳之を分領するに至る。

劉備は僅かに徐州の一部を有するのみ後に徐州を呂布に奪われ一介の土地をも有せざるに至れり。

此の時に方て袁氏の國最も大なり、特に公孫度、公孫瓚亡ぶるに及びては、袁紹の有する所は黄河以北の地一體なりし也、紹曾て曹操と語り、他日天下事あらば自ら河北に據るべしといへり、果して其の言の如し、袁術はまた揚子江の北岸より江南の地方を掩有す、袁氏兄弟は江、揚子、河、黄を界して、天下を挟み有せりと謂ふべし、興平二年李確、郭汜權を争ふて相攻む、確帝を擁して營中に幸せしめ、竟に宮殿官府を燒く、楊奉、董承等乘輿を送て東歸せしむ、乘輿委棄されて棘繯の間にあり、楊奉、韓暹等竟に車駕を奉じて洛陽に至る、宮室皆燹に燒盡せるを以て、百官荆棘を披きて牆壁の間に依るといふ、時に曹操許にあり、天子を迎へんと欲す、荀彧之を勸めて速かに斷せしむ、操乃ち曹洪を遣して西じ、天子を迎へしむ、入るとを得ず、議郎董

昭あるもの操の書を作て楊奉に結ぶ、時に董承私かに韓暹が放恣なるを憂ふ、因て共に潛かに操を召す、操乃ち兵を率ゐて洛陽に入り、司隸校尉を領し、尙書の事を録す、時に建安元年七月なり、次で操董昭を引て計を問ふ、昭曰く「今や諸將の意區々として定まらず、夫れ非常の事を行へば非常の功あり、宜しく都を許に移すべし」と、操曰く「是れ我が本志なり」と、乃ち車駕を奉じて許に移り、宗廟社稷を許に立て、自から大將軍となり、武平侯に封せらる、是より政權舉げて曹操に歸し、天子空位を守るのみ、夫れ曹操は雄略の士なり、而して智勇辯力多く之に従ひ、形勝に據り、天子を挟みて四方に徇ふ、勢ひ順にして形正し、其の大業を成せるは論なきのみ、今更に諸豪傑の興廢を略述せん

袁術は建安二年壽春に於て帝號を稱じ、袁州の刺史金術を殺し、又將張勳等をして、韓暹、楊奉等と共に歩騎七萬を率ひて呂布を攻めしむ、布陳珪の謀を用ゐ、暹、奉等と合じ、大に勳を破る、九月術また曹操と戰ふて敗北す、周瑜、魯肅等皆術が事を成すに足らざるを看破し、官を棄て江を渡り孫策に従ふ、策竟に自立し、太史慈

を擒にし、術を攻む、四年夏術北走し、帝號を袁譚エンタンの子子に傳へんとして、下邳を過ぐ、曹操乃ち劉備をして術を邀へ撃しむ、術破れてまた壽春に歸り、連戰連敗を慚ぢ、また奢侈淫佚を極めて自立し能はざるを憤ふり、吐血して死せり

袁紹は門閥高く、土地廣く、志高ふりて動もすれば曹操を凌ぐの風あり、建安二年書を操に與ふ、操其の辭の傲慢なるを怒りて之を討たんとすれども力敵せず、荀彧が謀を用ひて侍中鍾繇シユウヤウに關中を督せしめ、以て紹に備ふ、繇智謀あり、巧みに紹を遇して爭端を啓かしめず、既にして紹益々驕り、許を攻めんとす、祖茂ソモ授謀むれども勝かず、郭圖クワトが言を納れて許を攻めしむ、建安四年八月曹操兵を黎陽レイヤウに進め、九月許に還り、兵を分て官渡を守らしむ、十一月張繡テウシウ衆を率ひて操に降る、操また衛覬エイキをして關中を服従せしむ、紹援を劉表に求む、表應せず、五年紹兵を黎陽に進め、其の將顏良を遣して劉延を白馬に攻めしむ、曹操北延を援ふて良を斬り、白馬の圍を解き、民を徙して西せしむ、紹黄河を渡りて之を追ひ、延津の南に至る、操輜重を陳ねて敵に陷はしめ、依て乘じて反撃す、紹が軍大敗し、文醜斬られ、一軍氣を

奪はる、紹乃ち陽武ヨウブに軍す、操營を分ち壁を堅ふして之に對す、既にして糧乏しきを以て許に歸らんとす、荀彧報して曰く「紹今衆を悉して官渡に聚まる、是れ天下の大機なり、彼れ情見はれ勢窮まらば必らず變わらん、是れ奇を用ふるの時なり、失ふ可らず」と、操乃ち益々壘を堅ふして持し、輕兵を放ち、襲ふて烏巢ウサウの屯を破り、悉く紹の糧穀を焚く、紹八百騎と河を渡りて逃る、是より慚憤して病を發し、七年五月を以て死す、紹の三子譚タン、熙キ、尚シヤウといふ、審配シンハイ紹の遺命を稱して尚を立て、譚怒て黎陽に屯し、尚を撃んとす、是より二人相戦ふ、譚は青州を領し、熙は幽州及び遼東を領す、八年劉表兄弟を諫めて相和せしむ、二人聽かず、譚竟に救を操に請ふ、操之を許す、九年四月操進んで鄴トウを攻む、七月尚還て拒戦し、敗れて幽州に走る、操竟に鄴に入り、冀州を併す、十年操南皮を攻めて譚を斬る、時に幽州の將吏刺史袁熙を逐ふて操に降る、熙、尚共に烏桓ウワンに奔る、是に於て紹が領地悉く操の有に歸す

呂布は陳留にあり、建安元年袁術劉備を攻めて徐州を争ふや、備張飛を留めて下邳

を守らしめ、自から將として術を拒く、布乃ち下邳を襲ふて之を取る、備竟に布に降る、是に於て布また備を豫州刺史と爲し、自から徐州牧と稱す、既にして備兵を合して萬餘人を得たり、布之を憎み、自から兵を出して備を攻む、備敗走して曹操に依る、操厚く之を待し、表して豫州牧と爲し、東沛に屯し、散兵を收めて以て布を圖らしむ、二年布袁術の兵と戦ふて之を破る、既にして布術と通じ、高順、張遼を遣はし、備を攻めて沛城を取らしむ、備單身逃走す、荀攸操に勸めて布を撃たしむ、操依て下邳を圍み、沂泗を引て城に灌ぐと月餘、布益々困迫し、操に降る、操之を斬る、時に建安三年九月なり

孫堅は建安元年に會稽を取て太守となり、三年討逆將軍に任せられ、吳侯に封せらる、周瑜、魯肅、太史慈等智勇の將多く之に歸す、竟に袁術に背きて江東に自立す、四年盧江の太守劉勳を襲ふて之を取り、因て豫章を殉ふ、策既に江東を略有し、將々に四方を經略せんとす、會々先きに殺す所の吳郡の守許貢奴が客、策の出獵を窺ひ、伏を設けて之を射る、策頰を射られて創甚だし、乃ち弟權を呼んで曰く「江東

の衆を擧て機を兩陳の間に決し、天下に衝を争ふとは卿我れに如かず、賢を擧げ能に任じ、各々其の心を盡して以て江東を保つとは我れ卿に如かず」と、依て權をして代て其の嗣たらしめて卒す十六年時に建安五年なり、權討虜將軍に任せられ、會稽の太守を領す、魯肅權に勸めて曰く「漢室復興す可らず、曹操俄かに除さがたし、將軍のために謀るに止だ江東を保守して以て天下の隙を窺ふべきのみ、若し北方に向て勦除を力め、劉表を討て長江の極まる所を掌握し、據て之を有たば、是れ王業なり」と、操後に權の質子を徵す、權従はず、後に劉表卒し、操荊州を領するに及び、魯肅劉備に説きて共に荊州を取らんと欲し、備を鄂縣の樊口に迎ふ、操大軍を以て權を攻むるに及び、赤壁の役あり

劉備は呂布の滅ぶるに及んで左將軍に任せられ、頗ぶる曹操に畏憚されしが、董承天子の密詔を受くるに及び、謀て操を誅せんと欲し、徐州刺史車胄を殺し、鬪羽をして下邳を守らしめ、自から小沛に還り、兵を擧げて操を撃つ、郡縣之に従ふもの多し、竟に袁紹と連和す、建安五年操董承を殺し、兵を發して備を撃つ、進んで下

邳を抜き、鬪羽を擒にす、備冀州に走りて紹に依る、羽肯て操に従はず、後竟に備に歸す、六年備汝南にあり、操に攻められ、走て劉表に頼る、當時備一寸の土地を有せず、僅かに表より新野の小城を借て暫らく生息するのみ、十二年操北烏桓を伐つ、備表に勤めて許を襲はしむ、表用ふると能はず、此の年備諸葛亮を隆中に見、引きて軍師とす、人或は備に勤めて荊州を取らしむ、備従はず、十三年表死す、其の子琦外に在り、次子琮嗣立つ、操新野に至るに及んで琮一州を擧げて之に降る、備驚ろきて將さに江陵を保たんとす、江陵には軍馬多し、操備の之に據るを畏れ、精兵を發して之を急襲し、當陽の長坂に及ぶ、備數十騎と走る、會々魯肅來るに會ひ、共に鄂縣の樊口に至り、更に孫權と合して操を赤壁に破る、是に於て曹操は袁紹及び其の子譚、熙、尙を亡ぼして黄河以北の地を併有し、又呂布を破り、劉備を逐ひ、劉琮を降して黄河楊子江間の諸州より、荊州を併呑し、支那の中央部を其の根據とせり、當時天下操の麾下に屬せざるもの止た漢中の張魯後に操に降す及び益州の劉璋と江東の孫權とのみ、操の勢ひ太だ熾なりといふべし

且つ建安十三年には操は三公の官を罷めて自から丞相となれり、此の時に在て漢の天子豈木偶と異ならんや、天下殆んど曹氏に歸せるなり

然るに赤壁の一戦に於て、端なく三國鼎峙の勢を作せしは奇變の極といふべし、建安十三年十月操已に荊州を併せ、勢に乗つて江を下り、孫權を伐つ、其の兵八十萬、聲言して百萬と號す、軍容甚だ熾んに、其の志既に江東を呑み、氣宇天下を小なりとす、然るに權の將周瑜奇策を以て大に操を破りしかば、操は華容道より歩して逃走し、劉備、周瑜と水陸並び進みて操を追ふ、操の兵亡ぶるもの大半、竟に引きて北に還れり、劉備は劉琦を表して荊州刺史とし、兵を率ひて南武陵、長沙、桂陽、零陵の四郡を徇ふ、翌十四年備荊州牧とあり、十九年益州を攻めて之を取る、二十年孫權荊州を奪ふ、是に於て備と權と荊州を二分し、湘水を以て界とし、長沙、桂陽以東は權に屬し、南郡、零陵、武陵より以西は備に屬し、竟に講和して共に操に當る、此の年操漢中を取り、張郃、夏侯淵をして之を守らしむ、二十二年備兵を發して漢中に入り、廿四年操と戦ふて之を破り、竟に漢中を取て七月漢中王と稱し、成都に治す

是に於て孫權は江東及び荆州の半（後に關羽を亡ぼしを領して建業に治し、劉備は益州、漢中（此の兩地即ち巴蜀なり）及び荆州の半を領して以て曹操に對峙す、三國鼎立の實形始めて成る。

曹操は建安十八年五月自立して魏公となり、七月始めて宗廟社稷を建てしが、翌年三月には位を諸侯王の上に進めて魏王となり、十一月伏皇后及び二皇子を弑し、其三女を納れて皇后とし、廿三年十月には、其の子曹丕を以て王太子とせり、二十五年三月操洛陽に至て薨す、曹丕竟に帝位に即き、十月皇帝と稱し、操を追尊して武皇帝と曰ひ、漢の獻帝を廢して山陽公とし改元して黄初といふ、是に於て漢亡ぶ、漢亡ぶる翌年劉備皇帝の位に即き、章武と改元し、三國を蜀と號す、後に七年孫權また皇帝の臣に即き、黄龍と改元し、父堅を追尊して武烈皇帝とし、兄策を長沙桓王と爲し、國を吳と號す、茲に於て魏、蜀、吳三國鼎峙の名實兩つながら成る、黄巾の賊起てより、漢亡び魏立つに及ぶまで三十七年にして、即ち我が紀元八百八十年、西曆二百二十一年に當る

第四 形勢の下

魏、蜀、吳の興亡

魏の曹丕（ソビ）に漢を亡して皇帝の位に即き、黄初と改元するや、翌年劉備亦皇帝の位に即きしが、黄初四年六十三才にして死し、其の子劉禪（ヤクセン）嗣立てり、吳の孫權は黄初三年を以て吳王と稱し、年號を黄武と稱し、後八年、即ち魏の明帝の太初三年に皇帝の位に即けり、今其の大略を見るに便せんため左の年表を作る

魏の文帝元年は我が紀元八百八十年、西曆二百二十一年にして、黄巾の賊起てより正に三十六年なり

魏		蜀		吳	
年號	帝及記事	年號	帝及記事	年號	帝及記事
黄初	[文帝]				

五	四	三	二	正始 〔齊王〕	三	明帝崩	二	遼東を取る	景初	四	陳群卒す	三	二	青龍
蜀を伐つ			管寧卒						陳矯司徒となる			洛陽宮を造る司馬懿太尉に任ず	司馬懿をして亮を拒かしむ	
七	六	五	四	三	二	延熙	十五	十四	十三	十二	十一			
	費禕を大將軍とす		蔣琬活に屯す		蔣琬を大司馬とす	前后的妹を皇后とす	張皇后死す		蔣琬を大將軍とし費禕を尙書令とす	魏を伐つ諸葛亮卒				
七	六	五	四	三	二	赤鳥	六	五	四	三	二			
陸遜丞相となる			魏を伐て敗る			呂壹誅せらる				魏を伐つ				

六	五	四	三	二	大初 〔明帝〕	七	六	五	四	三	二	章武 〔昭烈〕呉を伐つ	年號 帝及記事
劉曄を太鴻臚とす	司馬懿鹵城に敗る		聽訟觀を立つ	張郃街亭に蜀兵を破る		文帝崩	呉を伐つ					建興 〔劉禪〕劉備死	魏と絶て蜀と和す
十	九	八	七	六	五	四	三	二	一			二	孫權
	魏を伐つ		諸葛誕鄧颺等免す	魏を伐て敗る	亮漢中に出づ克たす		諸葛亮南征す					魏と絶て蜀と和す	
嘉禾	三	二	黃龍	七	六	五	四	三	二	一		孫權	
	武陵の蠻夷を伐つ		〔孫權〕帝位に即ぐ建業に移る			魏を伐て敗る	願雍を丞相とす						

六	蔣琬及び董允卒す	八	陸遜卒す
七	高句麗を伐つ	九	太初宮を作る
八	太后を遷す	十	
九		十一	
嘉平	司馬懿謀て曹爽を殺し丞 相となる	十二	姜維魏を伐つ
二		十三	太子和を廢し亮を太子とす
三	日本使節至る司馬懿死	十四	大元
四	吳を伐つて勝たす	十五	建興〔孫亮〕孫權死す
五		十六	諸葛恪を誅す
正元	〔高貴郷公〕司馬師齊王を廢 して公を立つ	十七	五風
二	司馬師卒す昭嗣ぐ	十八	二
甘露	司馬昭袁晃を服す	十九	太平
			呂岱死

二	二十	二	永安	〔孫休〕孫琳亮を廢して休 を立つ琳誅せらる
三	景耀	二	二	
四	二	三	三	
二	四	四	四	
三	五	五	五	
四	炎興	六	六	
咸熙	鄧艾鍾會殺さる劉禪を安 樂公とす	元興	〔孫皓〕休死し其の甥 皓帝位に即く	
二	司馬昭死す、子炎立つ即 ち晉泰始元年	甘露	武昌に移る	
泰始二	〔晉武帝〕	寶鼎	建業に移る	
三	夷を太子とす	二		
四	王祥卒す	三		

五	羊祜を荊州軍事都督とす	建衡	陸凱卒す
六		二	陸抗をして軍事を督せしむ
七	劉禪卒す	三	皓華里に遊ぶ
八	王濬を益州刺史とし吳を伐つの計を爲さしむ	鳳凰	歩闡晉に降るまた華里に遊ぶ
九		二	
十	曹芳(前魏主)卒す	三	陸抗卒す
咸寧	曹芳(陳留王)卒す	天冊	
二	羊祜を征南大將軍とす	天璽	
三		天紀	
四	羊祜卒す	二	
五	大舉して吳を征す	三	
太康	吳主孫皓出で降る	四	吳亡び皓降る

右魏は四十六年にして亡び、蜀は四十三年にして亡び、吳は孫權吳王と稱せしより五十九年、皇帝と稱せしより五十二年にして亡ぶ

魏の文帝の即位せしは我が紀元八百八十年西曆二百二十年 即ち神功皇后の二十年(庚子)にして、其の亡びるは我が紀元九百二十五年西曆二百六十五年 即ち神功皇后の六十五年(乙酉)なり、

蜀の昭烈の即位せしは我が紀元八百八十一年西曆二百二十一年 即ち神功皇后の廿一年(辛丑)にして、其の亡びしは紀元九百二十三年西曆二百六十二年 即ち神功皇后の六十二年(癸未)なり、

吳の孫權帝位に即きしは我が紀元八百八十九年西曆二百二十九年 即ち神功皇后の二十九年(己酉)にして、其の亡びしは紀元九百四十年西曆二百八十年 即ち應神天皇の十一年(庚子)なり

今三國の形勢を視るに、魏の最も形勝を占めて土地廣く穀食豊かに、智勇の士極めて多く、吳は大江の險を扼して奇傑慷慨の士に富み、蜀は西方に徧して半ば魏、吳の間に介まり、智勇の士甚だ多からず、而して其の國最も狭少なり

抑も支那は最も多くの人種を有する國なり、而して其の開化は黄河の兩岸に始まりて後に楊子江の南北に及び、河邊と江邊とにて、風土と人物と非常の差あり、蓋し河邊

は曠野萬里、氣候乾燥にして樹木少く、旱天多く、江邊は奇峯險巒重疊し、風光極め
て奇絶にして、樹木多く降雨亦多し、而して河邊の人は驍勇にして騎戰に長し、江邊
の士は矯捷にして舟師に熟す、特に此の江河の中間は所謂支那の本部にして、漢人種
の居る所、智勇文雅、最も優等の種族たり

魏は黄河の兩岸一帯を掩有して更に楊子江に迫らんとするの地を併有せり、即ち支
那本部は皆其の有する所たり、故に韓、魏の智謀、燕、齊、趙の強勇、秦の過半は皆
茲に集まれり

吳は楚の地にして所謂荆蠻の民なり、楊子江を境として魏に對し、又江北なる荆州の
一部を有して蜀と相接す

蜀は四川を本部として漢中を併せ、荆州の一部を領せり、即ち昔の秦の一部なり荆州は一部は楚にてありき

蜀は其の國山間に僻在して魏と吳に境壤を接すると甚だ多し、是れ其の早く魏に亡ば
されし所以ならん、吳は夫江の險を有するのみならず、魏と境を接すると極めて少く、

自から守るには頗ふる便宜の地なり、是れ其の最も後に亡びたる所以ならずや
蓋し吳は自から守るに宜しくして攻むるに便ならず、蜀は魏を擣くの便ありしと雖も、
而かも亦自から守るの便多からず、而して其の力魏に較せず、最も早く亡ばざれしも
其の所ならんのみ

諸葛孔明曾て曰く「孫權が江を越ゆると能はざるは、猶ほ魏の江を渡ると能はざるが
如し」と、楊子江は實に天險の至、曹丕浩嘆して「天の南北を限る所以」といへるが如
し、特に三國分立の地形を見るに、吳の境を魏に接するや甚だ短し、是れ亦吳自から
守るに便にして、又魏を攻むるに不便なりし所以ならん

夫れ天下に立つに三要あり、第一は富強を得、一世の智勇を開拓し、兵力を積みて能
く謀ひ能く戰ふなり、第二は大義名分により、義を唱へて事皆之に由て以て斷つ、成
敗利鈍の如きは必らずしも之を問はず、所謂人事を盡して而して天命を待つもの是な
り、第三は地の利に據て險要を扼し、治を圖り境を平かにして自から保有するなり、
此の三要併せ得たるものは以て天下を統一して六合を併吞すべし、秦は曾て第三の地

利主義を用ゐ、又第一の富強主義を用ゐて以て天下を獲、東漢の光武は主として第二の名分主義に由れり、今之を三國に視るに、魏は富強主義に由る、曹操の如きは初め名分主義をも利用せんと欲し、漢帝を挾みて天下に臨まんとしたるも、漢末氣節を尙ぶの風は、寧ろ操の專横を怒れるものありしかば、却て専ら富強主義を用ゐたるか如し、蜀は則ち巴蜀の險を有すと雖も、國を獲る日淺く、龐士元死し徐直去り、關雲長、張翼德等死するに及んでは、人才大に減じ、止だ一孔明ありて其の奇才當時に絶倫なりと雖も、また之に次ぐの才なし、費禕、蔣琬は共に謹厚自重の士、姜維矯々の才ありと雖も壯志鬱勃、氣を使ふて形勢に暗し、況んや劉禪の如き闇劣笑ふべきもの上はありて、衰慝動もすれば入り易きや、故に孔明一び瞑せば蜀は到底保つ可らざるなり、孔明また之を知れる乎、故らに名分主義に由て「漢賊兩立せず」といひ、全力を擧て魏を伐てり、蓋し劉備は漢室の枝流なりと自稱し、靈帝の如きは備を呼ぶに劉皇叔を以てするに至り、魏漢を簒するに及び、漢室に續くと稱して竟に帝位に上れり、故に其の兵を用ふるや、また必らず漢室の興復を以て名とし、以て人心を取攬せんと

せり、名分主義の最も明著なるものと謂ふべし、吳は乃ち古吳楚の地に據り、長江を扼して自から保ち、英才を延き治道を圖りて天下を三分す、蓋し地利主義を取れるなり、嗚呼三國各々其の主義を異にし、智勇を以て名分と争ひ、地利と争ふ、一代の大觀たらざらんや、然りと雖も名分は到底智勇に壓倒せられざるを得ず、而して地の利もまた人和に如かず、人和一び失せば地の利ありと雖も保つ可らざるなり、蜀の魏に亡ぼされ、吳内亂衰ふるに及んで長江の險も亦保つと能はざりしは皆必至の勢ひのみ、但だ智勇ありと雖も名分正しからずんば乃ちまた全ふしかたし、晋魏を簒して専ら智勇主義を用ふと雖も、其の名分既に失す、深く人心を得ずして殆んど我が足利氏の如く、五胡の亂に終りし所以ならずや、然らば則ち名分また重んぜざる可らざるなり、嗚呼是れ人心の正、竟に泯滅すべからざる所以乎、

更らに三國起伏の大體を視ん、劉備關羽の敗滅を憤ふりて吳を伐ち、豎子陸遜をして名を成らしめしは智計足らざればなり、諸葛亮其の死後を承け、上には關關幼冲の主を威

き、新附未懐の國を御し、一身軍國の事に任せて君臣皆之に依頼し、法嚴なるも民恨ま
ず、軍敗るも士怨まず、而かも魏の強大なるに向て常に主動の地位に立ち、屢々之を
攻撃し、「漢賊兩立せず」といひ、成敗利鈍は豫め視る所に非ずといひ、正々堂々として
魏を伐つ、其の人物の高明なる、精神の神逸なる、實に想像に餘あり、特に智勇備はれる
魏の力を以て、雄傑絶倫なる司馬懿を以て、一步も蜀に加ふると能はず、止た切々焉と
して孔明の師を拒げるに過ぎず、孔明の奇才當時に冠絶したると知るべきに非ずや
然りと雖も孔明決して魏を搖かすと能はざるあり、譬へば魏と蜀（孔明在りし時の）と
は豚と猫との如し、猫敏にして常に豚を攻むるも、決して豚を屈す可らず、却て氣疲
れ力窮して自から倒るゝに終る、孔明師を用ふると數次、蜀の力疲れ氣竭さしは論を
俟たず、司馬懿英雄大才を以て、孔明の死に乗じて一舉巴蜀を屠らざりしは何ぞや、
孔明の良治尙は未だ俄かに圖り易からざればなり、然るに蜀は費掉、蔣琬の謹厚を以
て力めて保守主義を取り、創痕を療するに力めたりと雖も、幾くならずして姜維兵を
掌るに及び、血氣に乗せてまた屢々兵を出す、其の志壯ならざるに非ずと雖も、孔明

すら功を奏せざりしもの、假令百姜維ありと雖も將た奈何せんや、徒らに益々力を耗
するのみ、之に加ふるに狎邪の小人朝に立て事をを用る、内政殆んど陵遲す、是れ氣力
疲弊して筋骨殆んど解くるなり、之を倒滅する朽木を摧くと何ぞ擇ばん、故に魏の兵
一び臨めば、其の勢破竹の如く、劉禪面縛して降を軍門に乞ひ、千古未曾有の醜態を
現せり、曾て兵を魏にかへしに比すれば、何ぞ勇法の甚しく相異なるや

魏は中州の要に據り、天下を二分して其の二を保ち、智勇辨力の士雲の如し、文帝曹文武
の材幹頗ぶる乃父曹操に肖、明帝曹また一個の英主にして魏の勢益々熾なり、然りと雖
も其の嗣齊王曹芳庸劣にして幼少、權竟に司馬氏に歸せり、蓋し此の時に方りては魏家創
業の功臣漸く死滅し、帝室の連枝また英物なく、曹爽謀られて司馬懿に殺さるゝに及ん
では、智勇辨力を逞ふせる新進の英才は、大抵司馬氏の門下に出づ、而して懿の雄鷲殆ん
ど曹操に譲らず、魏は既に漢室と其の軌を同ふして、曾た僅かに空名虛位を有するのみ、
蓋し度るに、魏は甚だ我が源家に類せり、文帝酷薄にして頗ふる猜忌、ために其の兄
弟を讖して自から枝葉を刈り、弟曹植をして七步の吟を爲して千古の悲叫を發せしむ

るに至る、是れ豈頼朝が範頼義経を殺したると同トからずや、但だ文帝明帝は曹操の
 儉素にして華奢を憎めると頼朝に似たるに反し、驕奢を喜びて屢々無用の土木を興し、
 遊宴歡樂に金財を徒消せり、是れ頗る頼家、實朝に肖たらずや、而して司馬懿父子
 の權詐譎謀遙かに北條時政父子の上に出づ、其の坐ながらにして天下を収めたる、彼
 此共に一軌に出でしも固より恠むに足らず

司馬懿殆んど魏を篡せりと雖も、未だ曾て破綻を顯はさず、魏の蜀吳に對する力は益
 々強きを加へり、懿の才器非常なりしと想ふべし

懿死するに及び、其の子師、昭代で政權を執り、聲望才器父に譲らず、其の勢力彌々
 増し、魏帝を廢立すると殆んど奕棋の如し、蓋し魏の智勇主義を執れるや、主に智勇
 なくして臣下智勇あれば則ち臣下に篡せらる、は其の所なり、故に魏帝のために名分
 を唱ふると稱し、兵を擧げて司馬氏に抗せるは止だ諸葛誕あるのみ、司馬昭は竟に鍾
 會、鄧艾をして一舉に蜀を降せしめ、赫々の功に乗じて忽ち魏帝を廢し、公然皇帝の位
 に即き國を晉と稱せり、蓋し其の實を顯はしたるのみ、明帝死後、特に嘉平元年蜀の延

年吳の赤以後は、其の名魏の時代といふと雖も、其の實は乃ち晉の時代のみ

「朝辭白帝彩雲間、千里江陵一日還」蜀已に手中に歸せば勢を挟み、大江の流に架して
 直ちに吳を襲ふべし、星轉電邁せば荆州倒懸せん、武昌一鼓して取るべきなり、然る
 而して司馬氏之を爲さざりしものは、吳尙は英才多くして能く邊疆の防備を怠らざれ
 はなり、吳國を立つると最も久しく其の力未だ俄かに侮る可らざれば也

司馬氏既に魏蜀を兼併して晋朝を立つるや、英才實に雲の如く、而して其の版圖の大
 遙かに曹操に優さる、然るに顧みて吳を視れば、また周瑜、魯肅、陸遜の如き奇傑な
 く、庸主上に在て姦臣權を専らにし、内治漸く解體せんとす、特に晉と土疆を接する
 と甚だ長く、また晋日魏に對するが如くならず、況んや陸抗既に死せし後は、用兵の
 才ある將士なく、孫皓また荒淫暴虐にして、民心殆んど全く去れるかや、由來晉の蓋
 強廣大に抗する能はざるに、今や其の主の賢否、將帥の有無、民心の離合、また同日
 の談に非ず、晋の吳を滅するや夫れ巨巖を以て鷄卵を壓するが如けんのみ、吳地の利
 を有するも人和を失すると茲に至ては、滅亡せずして何れかせん

其の志を遂げんと欲し、先づ魯肅を遣はして其の形勢を視せしむ、會々當陽長坂に於て
 肅備と邂逅し、備に勸めて呉に投せしむ、而して肅は此の時に於て諸葛亮と謀を合せ、
 權備聯合して以て操に當らんと決せしが如し、蓋し操の志は備を窮追し、江陵より千
 里の遙路を以て、東漢の末路を以て、其の志を遂げんと欲し、先づ魯肅を遣はして其の形勢を視せしむ、
 會々當陽長坂に於て肅備と邂逅し、備に勸めて呉に投せしむ、而して肅は此の時に於て諸葛亮と謀を合せ、
 權備聯合して以て操に當らんと決せしが如し、蓋し操の志は備を窮追し、江陵より千

第五 古今第一の快戦

赤壁の役

赤壁の役は天下第一の快戦なり、支那の智勇辯力は、注し、三國時代に、

て、三國時代の智勇辯力は、殆んど赤壁の役に集まれり、智勇辯力相角し、奇正の變、縦
 横の略、窮極せざるなし、一方には雄才の曹操既に袁氏を滅して河北を平け、劉琮を
 下して新たに荊州を下し、破竹の勢ひに乗じて大兵流れに乗じて下り、一方には英略
 の劉備、雋偉しゆんゑいの孫權聯合し、諸葛亮、魯肅、周瑜の智術を用ゐ、關羽、趙雲、張飛、
 黃蓋、甘寧の猛將各々其の勇を效し、快辯能く縦横の略を斷じ、深謀奇籌能く敵情を
 測り、一戦して三國鼎峙の形勢を造る、一代の精華盡く茲に集まらざるなし、斯の如
 きの快戦豈古今に其の比あらんや、蓋し振古壯絶快絶の大觀なり
 建安十三年曹操は荊州刺史劉表の喪に乗じ、新勝の勢ひを以て之に臨み、劉琮を降し
 て荊州を併呑し、劉備を窮追して江陵より流れに乗じ東下せんとす、時に備僅かに一
 團の兵を有するのみ、一介の土地をも有せず、是れより先き孫權も荊州を窺ひ、兼て
 備と聯合せんと欲し、先づ魯肅を遣はして其の形勢を視せしむ、會々當陽長坂に於て
 肅備と邂逅し、備に勸めて呉に投せしむ、而して肅は此の時に於て諸葛亮と謀を合せ、
 權備聯合して以て操に當らんと決せしが如し、蓋し操の志は備を窮追し、江陵より千

里流れに乗じて呉を席捲するに在りたればなり、呉苟くも降らんか、是れ天下を擧げて盡く操の手に歸するなり、肅の形勢に審かにして謀略ある、笑んぞ之を默視すべけんや、況んや卿塵を出るとき、既に天下三分の計を定めたる諸葛亮かや

劉備の肅等と俱に逃れて夏口に至るや、亮備に謂て曰く「事急なり、請ふ命を奉じて救ひを孫將軍孫權に求めん」時に權は兵を擁して柴桑にあり、初めは備と聯合して操に當らんとせしも、荊州新たに降り、備大敗するに及び、頗ぶる意外の感を爲して心動て安んぜず、殆んど成敗を觀望して未だ決する所あらずしが如し、是に於て亮先づ肅に至り、獨り進んで權に見へて説て曰く「海内大に亂れ、將軍兵を起して江東を據有す、劉豫州劉備も亦衆を漢南に収め、曹操と天下を争ふ、今操大難を芟夷して諸方略々平き、新に荊州を破りて威四海に震ひ、英雄殆んど武を用ゐるに所なし、故に豫州遁逃して茲に至る、將軍宜しく力を量て之を處せよ、若し能く吳越の衆を以て中國と抗衡せば、早く操と絶つべし、若し當ると能はずんば、何ぞ兵を案じ甲を束ねて北面して操に降らざる、今將軍外は服従の名に托して内に猶豫の計を懷く、事急にして斷

せずん禍不日にして至らん」權曰く「苟くも卿が言の如くんば、劉豫州何ぞ速かに操に仕へざるや」亮從容として曰く「田橫は齊の壯士のみ、尙は義を守て辱められず、況んや劉豫州は王室の胄、英略世を蓋ふ、衆士の慕仰するもの水の海に歸するか如し、若し事成らずんば是れ天命のみ、笑んぞ能く操が下風に立たんや」權勃然として曰く「我れ全吳の地、十萬の衆を擧げて而して制を人に受くると能はず、我が計決せり、劉豫州に非ずんば以て曹操に當るものなし、然れども豫州今新たに敗るゝの後、笑んぞ能く操に抗せんや」亮曰く「豫州敗北せりと雖も、今戰士の還れるもの及び關羽が水軍精甲萬人あり、劉琦が江夏の兵士を合すればまた萬人に下らず、操衆と雖も遠く來て疲困す、聞く豫州を追て一日一夜三百里を走ると、是れ所謂強弩の末、魯縞だも穿つと能はざるもの也、故に兵法之を思んで必らず上將軍を驟すといふ、且つ北方の兵水戰に習はず、又荊州の民操に降れるも、止だ兵勢に迫られしのみ、心服せしには非ず、今將軍誠に能く猛將に命つて兵數萬を統べ、豫州と計を合せ力を併せば、操が軍を摧かんと必せり、操破るれば必らず北に還らん、斯の如くんば則ち荆吳の勢ひ盛く、鼎

足の形成らん、成敗の機今日に在り」と、權大に悦ぶ、亮が辯力の痛快なる、吞吐の妙を極め、優に天下の機勢を縦斷す、雄辯の至なり、神なり

時に操は權に一書を與へて其の膽を奪はんとせり、曰く「近者天子の勅を奉トて罪を伐ち、旌旗南に指し、劉琮手を束ね、荆襄の民風を望んで歸順す、今水軍は十萬、陸兵と合せて百萬、上將千員を統べて將軍と江夏に會獵せん」と、權之を群下に示すに、皆色を失はざるなく、張昭の如き文官は、勸めて操を迎へしめんとし、諸將また多く之に同す、而して肅獨り言はず、權起て衣を更ゆるるとき、肅宇下に追ふて拜す、權其の意を知り、肅の手を執て曰く「卿何をか言はんとする」肅答て曰く「向々に衆議を察するに、専ら將軍を誤まらんとす、與に大事を圖るに足らず、今肅以爲らく、肅が如きものは以て操を迎ふべし、將軍の如きは不可なりと、何をぞや、今肅操を迎へば、操肅を以て郷黨に還付し、其の名位を品すべし、猶ほ下曹從事となりて犢車に乗ト吏卒を從ふを失はず、士林に交遊して官を累ねば、未だ州郡を失はざらん、將軍若し操を迎へば、自から何れの所に歸せんとするや、願くは早く大計を定めよ」權嗟して曰

く「衆人の議皆我が意に背く、獨り卿大計を廓開す、正に我が意に叶ふ、是れ天の卿を以て我れに賜ふ所以なり」と、時に周瑜使を受けて鄱陽に至る、肅勸めて瑜を召還し、以て大事を決せしむ、瑜至るに及び、權また群下を集めて議す、張昭、顧雍等皆曰く「曹操豺狼と雖も名を漢の丞相に託し、天子を挾みて四方を征し、動作一に朝廷を以て辭とす、今日之を拒ぐは事に於て不順なり、且つ我が恃んで操を拒ぐべきものは長江なり、今操荆州を得て其の地を奄有し、劉表か會て治むる所の水軍蒙衝鬪艦を以て江に浮べ、流れに沿ふて陸上の步騎と俱に下る、是れ長江の險已に我れと之を共にするなり、而して勢力衆寡又論す可らず、速かに之を迎ふるに如かず」瑜然として之を駁して曰く「然らず、操名を漢室に託するも實は漢の賊なり、將軍神武雄才を以て兼て父兄の烈に頼り、江東に割據し、地方數千里、兵精しく糧足り、英雄皆業を樂む、當さに天下に横行して漢家のために殘を除き穢を去るべし、況んや操自から來て死を送るおや、而かも之を迎ふべけんや、瑜請ふ敢て將軍のために之を籌らん、今假令北土已に平安に、操内憂なきも、能く來て我と曠日彌久、疆場を争ひ得る乎、又

能く我れと勝敗を船楫に校し得る乎、今北土未だ安からず、加ふるに馬超、韓遂等尙は關西に在て操が後患たり、且つ北兵鞍馬を捨て、舟楫に仗り、吳越と衝を争ふ、水戰は固と中國の所長に非ず、況んや今正に盛寒、馬に藁草なきや、中國の士卒を驅て遠く江湖の間を涉り、水土に習はず、必らず疾疫を生せん、此の數四のものは用兵の大患なり、而して操皆之を冒かし行ふ、將軍の操を擒にする止だ今日に在り、瑜請ふ精兵三萬人を得て進んで夏口に抵り、將軍のために必らず操を破らん」權曰く「老賊曹操漢を廢して自立せんとし、止だ二袁袁術呂布、劉表及び我れを忌む、今諸雄已に滅び、止だ我れ尙は存す、我れ老賊と勢ひ兩立せず、公瑾瑜の言ふ所正に我が意に合へり」と、踊躍して刀を抜き、前の机案を兩斷して曰く「諸將吏復た操賊を迎ふべしといふものあらば、此の案と同じくせん」と、是に於て群情始めて決す抑も操を逆へ撃つるの策は、魯肅先きに之を定め、權に言て之を決せり、而して更に瑜を召し、再び群下と議せるは何ぞや、以て群心を一決せんとするのみ、蓋し操の勢ひ方さに江東の人心を震悚するものあるべし、張昭、顧雍の輩また皆降をいふ、況んや

其の他おや、權假令勇斷するも、未だ明かに群情を定むるには足らじ、瑜は則ち孫策の遺臣にして、年齒尙は壯なるも器度威重儕輩を抜き、最も形勢を審かにして智謀に富み、兼て辯舌に長せり、權仍て之を用ひて利害を較論せしめ、益々斷を示して以て衆心を一にせるのみ、肅と瑜との好計雄辯、權の勇斷果決、皆稱すべきに非ずや此の日會罷むや、瑜密かに權に見えて曰く「諸人皆操が水陸軍八十萬といふを恐懼し、また其の虚實を料らず、今實を以て之を校するに、彼れ率ゆる所の中國の衆十五六萬人に過ぎず、且つ兵已に久しく疲る、表が衆を得しも亦七八萬より多からず、而かも兵皆狐疑を抱く、夫れ疲病の卒を以て狐疑の衆を御す、多しと雖も何を畏るゝに足らんや、精兵五萬あらば之を敗るに餘あり、將軍請ふ愛ふる勿れ」權瑜が背を撫して曰く「公瑾、卿が言能く我が意に適す、子布張昭の輩各々妻子を顧みて私心を挟み、深く我が望む所を失ふ、獨り卿と子敬魯肅と我れと同じきのみ、是れ天の卿等二人を以て我れを賛くるなり、今五萬の兵俄かに合しがたしと雖も、已に三萬人を擇び、精糧兵具備さに辯す、卿子敬、程公程普と前發せよ、我れ當に續いて人衆を發し、多

く資糧を載て卿が後援を爲すべし」と、依て瑜を拜して軍事を都督せしめ、程普を以て副とし、魯肅をして方略を賛せしむ、時に備樊口即ち夏口に在り、瑜が船を望見して往て見、問ふて曰く「今操を拒ぐは計の宜を得たるなり、但だ知らず兵數幾許や」瑜曰く「三萬人なり」備曰く「惜むらくは少しく足らざるを」と瑜晒て曰く「是れ自ら用ふるに足れり、止だ瑜が能く敵を破るを見よ」と、依て備と力を併せて操の軍と赤壁武昌府樊口の南岸なりに遇ふ、時に操の軍已に疾病あり、初め一ひ交戦するや、操の軍敗れて江北に次す、瑜等南岸にあり、瑜の部將黃蓋曰く「今敵衆くして我れ寡し、與に持久す可らず、然れども操が軍方々に戦艦を連ねて首尾相接す、焼て走らすべきあり」と、先づ輕利の鬪艦數十艘を取り、燥荻枯柴そうてきを載せ、注ぐに魚膏を以てし、帷幕を以て之を包み、又書を操に贈て詐つて降を乞ふ、操始めは疑ひ、後大に悦ぶ、蓋依て豫め走舸を備へて大船を繋ぎ、東南の風急あるを待て相引さて發せしめ、中江にして帆を舉げ、蓋自から火を執て諸士に令し、兵衆をして大に呼はしめて曰く「降る」と、操の將士營を出で、立て觀る、蓋が艦隊操の軍を去る二里、諸船を放て一齊に火を發す、風

勢猛烈にして炎焰天に漲て迸散し、船飛ぶと星の如く箭の如く、飛埃絶爛、操の軍船を燒く、操の船艦首尾相接して俄かに走ると能はず、盡く火に燒かれ、火炎延て岸上の營砦に及ぶ、操が軍狼狽して拒ぐと能はず、瑜等輕銳を率ゐ、大に鼓譟して進み、劉備の兵また沛然として殺奔す、操が軍竟に大に敗れ、操僅かに身を以て免かる、人馬燒溺するもの算なく、亡ぶるもの大半、操歩して華容道より北走す、瑜備と水陸並び進みて南郡に至る、是に於て荆州操に叛きて盡く權を備とに降り、備竟に荆州牧を領す、次て巴蜀を取り、三國鼎峙の勢成れり

初め操の江陵を下るや、軍容壯大、氣宇既に八紘を呑めり、故に夜明月を望み、舷頭槩を横へて高嘯して曰く

對酒當歌	人生幾何	譬如朝露	去日無多
慨當以慷	憂思難忘	何以解憂	惟有杜康
青青子衿	悠悠我心	呦呦鹿鳴	食野之萍
我有嘉賓	鼓瑟吹笙	皎々如月	何時可輟

愛從中來

不可斷絕

越陌度阡

枉用相存

契濶談盡

心念舊恩

月明星稀

烏鵲南飛

遶樹三匝

無枝可依

山不厭高

水不厭深

周公吐哺

天下歸心

然り而して周郎の一擧に大敗し、其の兵の過半を失ふて辛ふじて北に還る、其の敗衄亦醜ならずや、而して周瑜の膽勇奇籌悦ぶべし

當時諸雄傑の年歳を接するに恰かも左の如し

曹操 五十四才

劉備 四十八才

孫權 二十七才

諸葛亮 二十八才

周瑜 三十三才

魯肅 三十七才

操五十餘の老雄を以て、端なくも少壯の周郎に功名を成さしむ、周郎の奇功實に絶倫なり

是より赤壁の名甚だ高く、周郎の名と共に千秋に朽ちず、蓋し此の一大快戦千古人口に膾炙するが故のみ

第六 人種

骨格の雄偉

此の時代の人種は、其の長大なると固より今人の比に非ず、現に我が日本武尊の如きは、御年十六のとき、身長八尺なりといひ、仲哀天皇は容貌雄にして美、御身の丈け十尺即ち一丈なりといへり、三國時代の呂布の如き亦身長一丈に及ぶ、是れ殆んて性物の如きなり、蓋し彼の國と我が國との尺度同じからず、史家の筆亦少々お負けあらんと雖も、兎に角其の長大なりしと、今人の意想外なるや論なし

今特に其の重なるものを擧げん

呂布は身長二丈、腰の太さ十圍にして眉目清秀なり

越吉(西菴王の軍師)は身長一丈、青眼黃鬚、重さ百斤の鐵槌を揮ふ
典章は身長一丈餘、手腕の筋肉太く、雙眼逆裂して鏡の如く、惡鬼羅刹に彷彿たり、常に八十斤の鐵の戟二本を兩手に揮ふ、

關羽身長九尺五寸、髯の長さ一尺八寸、面は熏棗の如く、唇抹朱の如く、丹鳳の眼、臥羅の眉、威表堂々たり、重さ八十二斤の偃月刀「冷鏡居」名くるをを用ふ、華雄身長九尺餘、面は血を注きたる如く、虎體狼腰にして豹頭猿臂なり、何曼は一名截天夜叉と稱せらる、身長九尺餘、眼星に似て髯長く、色黒く、常に鐵棒を揮ふ

魏延は身長九尺あり、面は熏棗の如く、目は朗星の如し

鄂煥も身長九尺餘、面恰かも惡鬼の怒れるが如し

郝昭も身長九尺ありしといふ

王雙は身長九尺、眼黄にして面黒く、腰は熊の如く、背は虎に似たり、能く六十斤の刀を揮ひ、兩石鐵胎の弓を曳く

文淑(又文鸯と稱す)十八才にして身長八尺に及ぶ、曾て鐵鞭を揮て敵の人馬を打倒す、向ふ所皆披靡す

凌統は年廿一才の時已に身長八尺に及べり

程昱は身長八尺三寸あり

董卓身長八尺、腰の太さ十圍、肌肉肥重にして潤面方口あり、其の腹は焼ける時、火宵より曉に至て消へず

劉表身長八尺、容貌甚だ雄偉なり

諸葛亮は身長八尺、面冠玉の如く、眉に江山の秀を集めて、儀表神仙の如し

張飛身長八尺、豹頭環顔、燕頰虎鬚にして、聲は雷の如く、勢ひ奔馬に似たり

趙雲は身長八尺、濃眉大眼、潤面重頤、相貌堂々として、極めて威風あり

許褚身長八尺、雙手に兩頭の牛の尾を曳き、百歩はとも引戻すの怪力あり

董襲身長八尺、武力人に超たり

文醜身長八尺、面蟹の如く、色極めて黒し

文聘身長八尺、面貌雄偉なり

馬騰は身長八尺、面鼻甚だ雄偉なり

龐徳身長八尺、面黒く髯黄に、眼逆裂して雷の如く、殆んど惡鬼羅刹の相貌あり

龐徳身長八尺、面黒く髯黄に、眼逆裂して雷の如く、殆んど惡鬼羅刹の相貌あり

彭義身長八尺餘、形表雄偉なり

孫邵身の丈八尺あり

陳化身身長七尺九寸、氣幹剛毅にして威容あり

劉備は身長七尺五寸あり、手を垂るれば膝を過ぎ、善く顧みて耳を見るべし、寡言にして喜怒哀色に顯はれず

太史慈は身長七尺五寸、髯美にして臂は猿の如し

曹操は身長七尺、細眼長髯にして雄氣面に溢る

鄧艾は身長七尺あり、潤面大耳、方頤大口、言語蹇澁にして鄧吃と稱せらる

陳武は年十七のとき身長七尺七寸、面黄にして眼中朱の如く、形容極めて古怪なり

胡車兒は五百斤の重きを負ふて一日に七百里を走る

紀靈は重さ五十斤の三尖大刀を揮ふ

武安國は重さ五十斤の鐵槌に五尺餘の柄をすげたるを提げて敵中に縦横す

袁紹は寛雅にして喜怒哀色に顯はれず、貌相魁偉にして行歩に威ありといふ

孫堅は黄額潤面にして熊腰虎態なり

司馬師は圓面大耳、方口厚唇にして左眼の下に大瘤あり、瘤上に毛を生ず、形貌怪古なり

孫權は方頤大口、碧眼紫髯あり

周瑜は面美玉の如く、唇抹朱の如く、姿勢瀟洒として儀表秀麗なり

蔣欽は面黒くして髯黄なり

周泰は形相豹の如く、目朗かにして眉濃かなり

第七 人物氣象

西洋人は巧利を重んじて氣節を省みず、紳士品格を尙ぶといふと雖も、未だ東洋人の如くならず、東洋人は氣節を貴び神韻を重んじ、巧利の如きは却て其の卑じ所たり、

故に西洋は物質的開化に長じ、東洋は精神的文明に長ず。

彼の出處進退を漫にせず、應對談笑の間、一舉手一投足を苟くもせず、一辭一言を漫りにせず、氣を以て相磨し相克するが如きは、是れ東洋人特擅の所、所謂不立文字なる禪學の類の特に東洋に行はれし所以なり。

支那人は頗ぶる巧利の念に富み、其の氣節の一點に於ては遙かに我が日本人の下にあらず、然れども國大なるが故に人物の氣象は却つて洪大悠容の所あり、特に三國時代に於ては、東漢氣節を尙ふの遺風を承けて、巧利を卑みて進退を重んじ、神韻縹緲たる人物多し、故に晋天下を一統するに及んでは、清談高言を以て物外に超脱するもの輩出し、彼の竹林の七賢なるもの、如きも、既に三國時代の末に出でたり。

蓋し支那人物の精華は三國時代に集まれり、其の出處進退の高明なる、襟度の洒落なる、一諾死生を許して相從へる、傑士の肝膽相照せる、氣節を負ふて厚俸大祿を白眼視せる、或は高邁なる識度を以て天下の形勢を揣摩し、家國の興亡を縱斷せるが如き、其の人物氣象の雄偉なるは皆以て千秋に照耀するに足れり。

くに及んで亮方さに盡瘁す。備其の驚むるを得。依て人を昇げて曰
 く「漢室傾頽して姦臣命を竊み、主上蒙塵す。我れ徳を度り力を量らずして敢て大義
 を天下に伸んとす。而して智術淺短、竟に困踣茲に至る。然れども志尚は未だ已まず。
 君思ふに計將さに安くに出でんとす。」亮答へて曰く「董卓の驕暴已來、豪傑並び起
 り、州に跨り郡を運ぬるもの擧て數ふ可らず。曹操袁紹に比すれば名微にして業寡し
 と雖も、而かも竟に能く紹に克て弱を以て強とせるは、曾て天時のみに非ず、抑もま
 た人謀なり。今操已に百萬の衆を擁し、天子を挟みて以て諸侯に令す。是れ誠に鋒を
 争ふ可らず。孫權江東に據有して已に三世を歴、國險にして民附き、賢能之が用を爲
 す。是れ以て援と爲すべくして圖る可らざるあり。荆州は北漢河に據り、利南海を盡
 し、東吳會に連り、西巴蜀に通ず。是れ武を用ふるの國、而して其の主守ると能はず。
 是れ殆んど天の將軍を養くる所以なり。將軍意あらん乎。益州は險塞にして沃野千里、
 天府の土、高麗是に由て以て帝業を成せり。劉璋闇弱にして張魯北にあり、民殷々に
 國富みて而して存恤すること知らず。智能の士皆明君を得んとを思ふ。將軍は帝室の

胄にして信義四海に著はれ、英雄を總攬し、賢を思ふと渴するが如し。若し荆益を跨
 有し、其の巖阻を保ち、西諸戎を和し南夷越を撫し、外は好を孫權に結び、内は政理
 を修め、天下變わらば則ち一上將に命じて荆州の兵を率ゐ、以て宛洛に向はしめ、將
 軍自から益州の衆を率ゐて以て秦川に出では、百姓孰れが箠食壺漿して將軍を迎へざ
 らんや。誠に斯の如くんば霸業成るべく、漢室興すべし」と。坐談の間早く天下三分
 の計を定めて草廬を出で、以て劉備を助く

亮の備を贊くるや、備と情好日に密なり、關羽、張飛悦ばす。備之れを解て曰く「我
 が孔明あるは猶ほ魚の水あるが如し」と。二人乃ち止む。亮も亦備の知己に感激し、
 全力を傾けて之に事ふ。其の忠悃誠實なる、仙品を出て鞠躬如たる一朴實の賢臣とな
 り、一身を以て蜀を支へ、自から奉ずると公明儉薄なり、曾て劉禪に表疏して曰く「成
 都に桑八百株、薄田十五頃を有し、子弟の衣食自から餘饒あり、臣に至ては外任に在
 て別の調度なく、身に隨ふ衣食悉く官に仰ぐ。別に生を治めて以て尺寸を長せず。若
 し臣死するの日、内をして餘帛あり、外に贏財ありて以て陛下に負かじむるか如きと

なけん」死するに及んで其のいふ所の如し、語に曰く、「英雄回首便神仙」亮初は、
 逸といひて仙骨あり、壯心奇籌天下三分の略を縦断せりと雖も、後には純良順忠の能臣
 となる、贈のべし、「神仙回首便良忠」と、其の死するや魏も亦之を廟祀するに至り、
 支那人世々之を神祀するも寔に徒爾ならざるなり

周瑜も亦快男兒なり、其の意氣の高邁なる、實に悦ぶべきものあり、初め曹操以爲ら
 く、瑜は遊説して動かすべきのみと、密かに揚州に下り、九江の蔣幹を遣はして瑜に
 説かしむ、幹儀容あり、才辯を以て稱せられ、江淮の間に獨歩して與に對を爲すもの
 なし、是に於て布衣葛巾自から私行に託して瑜を訪ふ、瑜出でて之れを迎ひ、立なが
 ら幹に謂て曰く「子翼幹の字の良苦、遠く江湖を涉て曹氏の説客たる乎」幹曰く「我れ足
 下と同州里、中間別隔す、故に來て久闊を舒するのみ」瑜曰く「我れ曠曠に及はざる
 も弦を聞き音を賞し、雅曲を知るに足れり」と、陋つて幹を延き、爲めに酒食を設け
 て之を還し、曰く「會々我れ密事あり、奮ち出でて館に就け、事畢らば別に自から
 相請はん」後三日にして瑜更に幹を招き、共に陣營の中を周觀し、行くと倉庫軍資器

仗を視、畢て還て宴飲し、示すに侍者服飾珍玩を以てし、因て從容として曰く「大丈夫
 夫世に處し、知己の主に遇ふて外は君臣の義に托し、内は骨肉の恩を結び、言行はれ
 計従はれ、禍福之を共にす、假令蘇張更に生れ、酈叟復た出るも尚ほ其の背を撫して
 辯を折かんのみ」幹止だ笑て竟にいふ所なし、還て操に白して曰く「瑜雅量高致、言
 辭の間する所にあらず」

氣節を負ふて洒落自から喜び、財利を卑みて金錢を視ると土芥の如きは、當時士大夫の
 風あり、管寧小時華歆と友たり、一日歆と共に圃を耕す、地中に金あるを見、寧は鋤
 を揮つて顧みず、瓦石と異なるとなし、歆は乃ち捉て之を擲つ、時人皆之を以て二人
 の優劣を評定すといふ

禰衡は儒士なり、好んで放言快罵す、曾て曹操に面するるとき、操が甚だ禮せざるを怒
 り、天を仰いで長嘆して曰く「覆轍の間嗚呼何ぞ人なきや」操曰く「我が部下に英才
 雲の如し、何ぞ人なしといはん」衡曰く「願くは其の才の詳かあるを聞かだ」操曰く
 「荀彧、荀攸、郭嘉、程昱は智深く計多し、蕭何、陳平と雖も遠く過ると能はず、張

遊、許褚、李典、樂進は勇威及ぶものなし、岑彭馬武と雖も何ぞ之に過んや、呂虔、滿寵は従事たり、于禁、徐晃は先鋒たり、夏侯惇は天下の奇才、曹仁は當代の廟將たり、人なしといふべき乎」衡嗤つて曰く「公の言違へり、荀彧は疾を問ひ喪を吊せしむべし、荀攸は墓墳の守介とすべし、程昱は關門の吏とすべし、郭嘉は文を卿し詩を吟せしむべし、張遼は鼓を拍ち金を鳴らしむべし、許褚は牛馬の牧夫とすべく、樂進は饋を捧げしむべし、李典は書を携へて使せしむべきのみ、呂虔は刃を磨し劍を鍛へしむべきのみ、滿寵は酒を啜り糟を啖ふのみ、徐晃は狗猪を屠り、于禁は板を負ふて墻を塗らしむべきのみ、夏侯惇は肥滿將軍と稱すれば足り、曹仁は錢を食るといへば足れり、餘子は碌々たる徒輩、衣桁のみ、飯囊のみ、肉袋のみ、酒槽のみ」と、諸將皆怒り、或は劍を抜て斬らんとす、操笑て制止するのみ、既にして朝會に衡をして鼓を拍らしむ、衡敵衣温袍して至る、或は之を叱するものあり、衡乃ち衣を捨て裸となり、神色悠々たり、操之を叱す、衡曰く「君上を欺罔するの無禮に比すれば如何ぞや。我れは父母より棄けし全身を露はすのみ、是れ潔人に非ずや」操曰く「卿自から潔人と

いふ、然らば濁人安くにある」衡曰く「卿は賢愚を判する能はず、是れ眼濁るなり、詩書を讀まず、是れ口濁るなり、忠言を聽かず、是れ耳濁るなり、古今に通せず、是れ身濁るなり、諸侯を容るゝと能はず、是れ腹濁るなり、常に叛逆の行あり、是れ心濁るなり、我れは天下の名士而して卿以て鼓吏とす、是れ陽貨の孔聖を狀はんとせるが如きのみ」操また笑て止む、蓋し衡は慢心の一匹夫と雖も、其の名頗ぶる天下に聞ゆ、故に操敢て殺さざるのみ、然りと雖も衡梟雄なる操の如きを恐れず、裸となつて之を滿罵す、其の氣魄はまた多とせざる可んや

魯肅の家始め甚だ富めり、肅か時之を散じて士に結ぶ、周瑜曾て數百人と至り、肅を候して資糧を求む、時に肅の家に三倉あり、各々米三千斛を藏む、肅乃ち一倉を指して瑜に與ふ、瑜甚だ之を奇重す、後郷黨の壯者を集めて曰く「今や中國亂離し、江東民富み兵強し、共に至て時變を觀ん」皆之に従ふ、肅依て細弱なる者を前にし、強壯なる者を後にし、男女三百餘人と發す、州官の追騎至るに及び、肅徐行して兵を勸し顧みて天に呼んで曰く「卿等は大體を解せん、今天下亂れて功あるも賞

せられず、退はざるも亦願あけん、何ぞ相逼り逐ふと斯の如きや」又自から楯を樹て、弓を引て之を射る、矢皆洞申す、追騎肅の言を佳とし、且つ制すると詭はざるを察して相率て去る

肅後に孫權を勸めて劉備と聯合せしめ、謀を定めて赤壁の一戦に大に曹操を破り、軍終て先づ還る、權大に諸將を請ふて共に肅を迎ふ、肅將に閣に入て拜せんとす、權起て之を禮し、因て謂て曰く「我れ鞍を持し馬より下て相迎ふ、以て卿を顯はすに足るや未だしや」肅進んで曰く「未だし」諸將愕然たり、肅既に座に就き、徐かに鞭を舉て言て曰く「願くは將軍威徳四海に加はり、九州を總括して帝業を成し、而して後安車以て肅を徴さば、始めて當るに顯とすべさのみ」權掌を撫して大に笑ふ

孫權會て呂蒙に勸めて學ばしむ、蒙軍務多事なるを以て之を辭す、權曰く「豈卿が博士たるを望まんや、止た當るに涉獵して往事を見るべきのみ、卿多事といふと雖も我れに孰與そや、我れ頗る書史を讀み、大に益する所あり、卿宜しく『孫子』『船略』『左傳』『國語』を讀むべし」蒙依て始めて學ぶ、初め魯肅心に蒙を輕んず、陸口に抵ると

き、蒙を問ふて談論し、大に驚きて曰く「卿今才學また吳下の阿蒙に非ず」蒙曰く「士別ると三日、便ち營々に刮目して相待つべし、兄何ぞ事を視るの晚きや」と、依て肅に問ふて曰く「兄重任を受けて關羽と隣將たり、何の計か以て不虞に備へん」肅造次は答へて曰く「時に臨んで宜に従はん」蒙曰く「今東西一家たりと雖も、而かも關羽は熊虎あり、安んぞ豫め計を立てざらんや」と、肅がために五策を書す、肅益々之を器重し、席を起て其の背を拊て曰く「呂子明、我れ卿の才略茲に至るとを知らざりし」と、竟に蒙が母を拜し交を結んで去る

魏の中散大夫嵇康は竹林七賢の一人あり、文辭莊麗、老莊を好みて任俠を喜ぶ、陳留の阮籍、籍の兄の子咸、河内の山濤、河南の向秀、琅琊の王戎、沛人劉伶と特に友とし善く、皆虛無を崇尚し、禮法を輕蔑し、酒を縱にして昏酣し、世事を遺落し、好んで竹林に遊ぶ、依て時人之を『竹林の七賢』と稱す、康備才あつて曠逸群ならず、高亮性に任せて名譽を修めず、寬簡にして大量あり、之と交はるもの未だ曾て喜怒の色を見ず、自から以爲らく、神仙は之を自然に慕く、積學の致す所に非ず、鹽羨理を得て

以て性命を盡すとは、善く求めて得べきなりと、超然として獨達し、竟に世外に飄逸す。時に鍾會才能を以て司馬昭司馬昭の子に用ゐられ、肥馬に乗り輕裘を着、賓從雲の如し、康が名を聞て之を訪ふ、康笑踞して鍛し、會至るも禮せず、會悦はすして去らんとす、康問て曰く「何の聞く所ありて來り、何の見る所ありて去る」會曰く「聞く所ありて來り、見る所ありて去る」と、深く之を銜む、司馬昭収めて康を殺す、康刑に臨み、自若として琴を撥て之を鼓し、既にして歎じて曰く「雅音竝に於て絶ぬ」と、竟に斬らる、籍才藻艶逸にして侷儻放蕩なり、司馬懿父子之を重用せんとすれども從はず、歩兵校尉の廚下に美酒多く、營人善く酒を醸造すと聞き、請ふて校尉となり、酒を縱にして時事を顧みず、曾て廣武クワフに登り漢楚の古戰場を觀、歎して曰く「時に英才なし、豎子をして名を成さしめし乎」初め蘇門山に登て逸士に會じ、與に太古無爲の道を語る、其の母卒する時、籍方さに人と基を圍ひ、對者止めんとす、籍抑へて共に賭を決し、酒を飲むと二斗、聲を擧て一號し、血を吐くと數升、毀瘡骨立す、喪中にも酒を飲むと平日に異ならず、伶また最も酒を嗜み、曾て鹿車に乗り、一壺酒を携へ、人をして鋤を荷ふて隨はしむ、曰く「我れ死せば直ちに鋤を以て地を掘り、以て我れを埋めよ」と、當時の士大夫皆以て賢ありとし、争ふて之に慕倣すといふ

諸葛亮の死後、蔣琬丞相となり、軍國の事を總統す、時に新たに元帥を興ふて遠近危悚す、琬群僚の右に居て威容なく、又喜色なく、神色舉止毫も平生と異ならず、是に由て衆皆漸く服す

司馬昭既に蜀を滅し、咸熙二年吳の甘露元年死し、子炎嗣立ち、魏を篡して皇帝の位に即き、泰始と改元し、國を晋と號す、炎吳を亡はすの志あり、泰始五年吳の建衡元年羊祜を以て荊州の軍事を都督せしむ、祜器度あり、遠近を綏懷じて甚だ江漢の民心を得、吳人のために大信を開布し、降者去らんとすれば皆之を許し、戍卒を減じて以て田を墾すると八百餘頃、其の初めて至るとき軍に百日の糧なかりしも、季年に及んでは十年の積あり、其の軍にあるや常に輕裘緩帶して身に甲を着ず、鈴闌の下、侍衛十數人に過さず、力めて徳信を以て吳人を懐く、交戦毎に日時を刻して相戦ひ、未だ曾て襲撃せず、將士或は詭計を進めんとするものあれば、醇酒を飲んで言ふ能はざらしむ、曾て軍を提

げて吳の境に據り、穀を刈て糧と爲す。皆侵す所を計算して絹を送て之を償ふ。衆を江河に會して遊獵する毎に、必らず晋の境に止まり、若し禽獸吳人に傷けられ走つて晋兵に獲らるゝものは、皆之を送還す。故に吳の邊境皆悦服すといふ。時に吳の將陸抗境を對して祐と相持す、また風骨高邁にして器識あり、常に祐と使命相通じ、會て祐に贈るに樽酒を以てす、祐之を飲んで疑はず、抗疾ひに及んで祐に藥を求む、祐良藥を擇んで之を贈る、抗乃ち服す、人多く疑ふて之を諫む、抗曰く「羊叔子祐の字、豈人を既するものならんや」

魏の傅嘏器局人に過ぎ、穎明にして能く人を知る。時に何晏才辯を以て貴戚の間に顯はれ、鄧騭變通を好んで徒黨を合せ、聲名を閭閻に賣る、而して夏侯玄貴臣の子を以て重名あり、之が宗主たり、嘏弱冠と雖も夙に名を知らるゝを以て、玄等來て交を求む、嘏受けず、嘏の友人荀彧清議あり、怪んで嘏に謂て曰く「夏侯泰初は一時の傑、心を慮して子に交はる、合へば則ち好成らん、合はずんば則ち怨まれん」嘏曰く「泰初玄の字の量よりも大に、能く虚聲を好んで實才なし、何平叔晏は言遠くして情近

く、辯を好んで誠なし、所謂利口邦家を覆へすの人なり、鄧玄茂風は外名利を要して内關鎗なく、同を貴び異を憎む、我れを以て此の三人を觀るに皆敗徳なり、之に遠かる本猶は禍の及はんとを恐る、況んや之を近くるかや」三人後果して誅せらる、嘏また鍾會を戒めて曰く「子志大にして量狭し、勳業或は成し難からん、戒めざる可んや」魏の曹爽漢中に寇するや、蜀主禪費禕に命じて之を救はしむ、禕將さに行かんとす、來敏詣て別を告げ、共に圍寨せんとを求む、時に羽檄交々至り、人馬擐甲す、而して禕梓に對して倦色なし、敏曰く「聊か以て足下を試むるのみ、足下誠に能く敵を辨せん」

費禕誦悟人に遇ぐ、尙書令となつて文書を省讀し、目を擧げ意を究むれば竟に忘れず、常に朝晡を以て事を賜き、其の間賓客を接納し、飲食博戯、人の歡を盡す、而して事に廢闕なし、董允代て尙書令たるに及び、始めは禕は傲はんとす、旬日の中に愆滯多し、允依て敷じて曰く「人才相遠きと斯の如し、我が及ぶ所に非ず」

司馬徽清雅にして人を知るの鑒あり、龐統弱冠にして往て徽を見る、徽桑を採て樹上

に坐す、統樹下に在て共に語り、日中より黄昏に至る、徹甚だ之を異とし、曰く「統は當さに南州士人の冠冕たるべし」

諸葛亮屢々師を出す、蔣琬長史となり、常に兵食を足して以て相供給す、亮毎にいはく「公琰琬の志忠雅、當さに我れと王業を贊くべきもの也」

楊戲固より簡略あり、蔣琬大司馬とあるに及び、共に談論するに、戲時に答へず、或る人琬に謂て曰く「戲は公を慢れり」琬曰く「人心の同からざる各々面の如し、面従して背腹するは聖賢の卑し所、戲我が是を贊せんことは則ち其の本心に非ず、我が言に反せんとせば則ち我が非を顯はさん、故に黙々たるのみ」楊戲曾て琬を毀りて曰く「事を爲すに慣々たり、誠に前人に及ばず」主者之を推治せんと請ふ、琬曰く「我れ誠に前人に及ばず、推すべきなし」主者慣々の状を問ふ、琬曰く「苟くも其れ如かず、則ち事理らず、事理らざれば則ち慣々たり」後に敏事に坐せられて獄に下さるゝに及び、

乘尚は其の殺されんとを懼る、然れども琬杳然として介せず、敏免かるゝとを得たりと云ふ

已に氣節を尚び任俠を喜ぶ、義烈の傳ふべきものあるや言を俟たず

關羽は赴々たる一悍夫のみ、而かも支那人今に至て之を廟祭し、或は帝と稱するに至るは何ぞや、嗚呼其の義烈深く人心に徹するか故ならざらんや、初め劉備、關羽、張飛と相結んで兄弟となり、羽、飛皆誠を以て備に臣事す、備曹操に破られて走て袁紹に依るや、羽備の家族を護して下邳にあり、操之を抜き、張遼をして羽に説て降らしむ、羽三約を表して以て其の志を明かす、操之を許し、羽を封じて壽亭侯とす、羽快々として敢て受けず、操笑て更に漢壽亭侯に封ず、羽乃ち受く、時に備の夫人甘氏、糜氏亦操に獲らる、操其の臣主の別を亂さんと欲し、羽をして二夫人と室を共にせしむ、羽避けて爛を棄て立ち、待て天明に至る、操また恩賜甚だ厚し、百方其の歡心を収めて以て臣従せしめんとす、羽皆受けて之を藏む、操其の心久しく留まるの意なきを察し、遂に謂て曰く「卿試みに情を以て之を問へ」遂依て羽を訪ふて之を問ふ、羽歎して曰く「我れ曹公の我れを待する極めて厚きを知る、然れども曾て劉將軍の厚恩を受け、誓て共に死生せんと思す、是れ豈背くべけんや、我れ竟に留まらず」遂還て之

を操に白さんとし、實を告げば操の羽を殺さんと恐る、告げずんば君に事ふるの道に非すと、依て歎つて曰く「曹公は君父あり、初は兄弟のみ、兄弟のために君父に背く可んや」竟に之を白す、操曰く「君に事へて本を忘れず、羽は實に天下の義士あり、度るに何れの時にか去らん」遼曰く「羽公の恩を受く、必らず効を立て報ひて而して後に去らん」と、操袁紹と官渡に相持し、紹の將顏良來て白馬を圍むに會ふ、良は北方の勇將なり、羽請ふて遼と共に先鋒となり、良が塵蓋を望見し、馬に鞭つて良を萬衆の中に刺し、其の首を斬て還る、既にして備逃れて紹に依ると聞き、盡く操の與ふる所を封つ、拜書告辭して備に奔る、操の左右皆之を追はんと欲す、操曰く「彼れ各々其の主のためには、追ふと勿れ」

張飛猛烈にして頗ふる躁急なり、而かも能く士大夫を禮することを知り、最も義は懐く、備の劉璋を攻むる時、飛兵を領して行く、郡縣を平げ、璋が巴郡太守嚴顏を擒にす、飛顔を叱して曰く「我が大軍至る、何を早く降らすして拒戦せる」顏曰く「卿等無狀我が州を侵奪す、我が州止た斷頭將軍あつて降將軍あらず」飛激怒し、左右を呵して、

率去て之を斬らしむ、顏自若として曰く「頭を斬らば便ち斬れ、何ぞ甚だ怒るや」飛之を壯なりとして、自から縛を解きて禮し、請ふて賓客と爲す

趙雲初め公孫瓚に従ふ、後劉備に見え、依々として相捨てざるの心あり、後竟に之に従ふ、曾て備の敗れ、兵衆四散するや、人あり「雲已に北に去る」といふ、備手戟を以て之を擲て曰く「子龍雲の我れを捨て、走らす」暫くして雲果して至る、江南平々に及び、雲をして桂陽の太守を領し、趙範に代らしむ、範が兄の妻樊氏、夫に後れて寡居し、國色あり、範以て雲に嫁せんとす、雲辭して曰く「我れ卿と同姓なり、卿が兄は猶ほ我が兄の如し、寡嫂嫁るべけんや」後に備勸めて之を納れしむ、雲曰く「美人愛す可らざるに非すと雖も義滅すべからず、且つ範の降る迫られて然るのみ、其の心未だ測る可らず、天下の美人何ぞ獨り樊氏のみならんや」と、後に範果して逃走す、而して雲織介の念なし、益州已に定まるに及び、議して城外の園地桑田を諸將に分賜せんとす、雲諫めて曰く「臣等天下の統一するを待て各々桑梓に歸耕すべきのみ、益州の人民初めより兵革に罹る、田宅を還與して業を復せしむべし、乃ち君臣の慶な

り「備之に従ふ」

孫策曲阿を圍みて劉繇を攻めし時、繇の將太史慈と神亭に會ふて相格闘す、後に策自から將として慈を甬里に攻めて之を擒にし、縛を解き手を捉て曰く「寧ろ神亭の時を記せんや、今日の事は當さに卿と之を共にすべし、卿は義烈、天下の士なり、但だ既する所未だ其の所得ざりしのみ、我れは卿が知己、意の如くならざるを憂ふる勿れ」

と、之を門下に署す、繇卒して楊州の士衆未だ附く所あらざるに及び、策命じて慈を遣はし、之を撫安せしむ、左右皆曰く「慈必らず還らず」策曰く「子義慈の字、我れを捨て、誰れにか従ふべき」慈果して期の如くにして還る

程普吳に於て年齒長するを以て諸將に重んぜられ、數々周瑜を凌辱す、瑜争はず、節を折て之に下る、普後に自から敬服して之を親重す、人に告げて曰く「周公瑾瑜の字と交はれば醇醪を飲むが如く、覺へず自から醉ふ」

呂布は猛悍の匹夫のみ、而かも稍々義侠の處あり、其の小沛を抜くや、劉備の妻妾を保護し、自から劍を糜芳に與へて曰く「卿暫く保護せよ、若し狼籍の徒あらば之を持

て斬て徇へよ」

張超雍丘に在りし時、曹操之を圍むと急あり、超曰く「止た臧洪シヤウコウ當さに來て我れを救ふべし」衆曰く「今操方々に袁紹と睦しく、洪は紹に用らる、必らず敗を好んで禍を招くとをせず」超曰く「子源洪の字は天下の義士なり、竟に本に背かず」洪果して徒跣號泣して紹に従ひ、兵を請ふて超を救はんとす、紹聽かず、雍丘竟に潰え超自殺す、洪由て紹を怨みて共に通せず、紹兵を以て圍む、年を歴れとも下らず、陳琳をして書を以て降を諭さしむ、洪復書して曰く「僕主人の傾蓋を蒙つて竟に大州を竊す、自から謂らく、大事を究竟して共に王室を尊んども、豈期せんや郡將厄に違ふて師を請へて拒まれ、洪が故君をして竟に淪沈に至らしめんとは、是れ悲を忍んで戈を揮ひ、涙を收めて絶を告る所以なり、行け行璋琳の字、足下利を境外に徼めよ、臧洪は命を君親に投せんと、子は余死して名滅せんと謂はんも、僕亦子を生て聞ゆるとなしと笑はん」と、紹兵を増して急に攻め、城を破て洪を擒にし、謂て曰く「今日服せんや未だしや」洪地に據て目を瞑らして曰く「諸袁漢に事ふると四世五公、今王室式微すれども扶翼の意

なく、多く忠良を殺して以て姦威を立つ、惜らくは洪が力劣て天下のために仇を報ゆると能はざるを、何ぞ肯て服をいはんや」紹怒て之を斬る、陳容時に紹が坐にあり、紹に謂て曰く「將軍大事を擧げて天下のために暴を除かんとし、而して先づ忠義の士を殺す、豈天意人心に適はんや」紹漸ちて容を牽出さしめて曰く「汝は臧洪が儔に非ず、空しくまた然らんや」容顧みて曰く「仁義豈常あらん、之を踏めば則ち君子、背けば則ち小人たり、寧ろ臧洪と日を同ふして死するも、將軍と日を同ふして生さず」と、竟に亦殺さる、坐客皆嘆息し、竊かに相謂て曰く「如何ぞ一日にして二烈士を殺せるや」

袁熙出奔す、其の將焦觸キョウツク自から幽州刺史と號し、操に降らんとす、韓珩カンコウ曰く「我れ袁公父子の恩を受ると深し、今破亡すれども智救ふと能はず、勇死すると能はず、義に於て闕く、曹氏に北面するが如きは爲し能はざる所なり」一座皆色を失ふ、觸曰く「大事を擧ぐるものは當に大義を立つべし、事の成否何ぞ一人を待たん、珩が志を終へしめて君に事ふるをなすべし」と、乃ち之を捨て、相率ゐて操に降る

審配シンバイは袁紹の將なり、曹操鄴を拔く時、配擒にせらる、操降を勸むれども罵て従はず、曰く「我れ生ては袁氏の臣たり、死しては當に袁氏の鬼たらん、議詔の賊たる可らず」と、刑に臨んで敵士を叱して曰く「我が君、袁尚を北に在り、南首して死す可らず」と、竟に北向して斬らる

操既に袁譚を獲、其の首を梟し、令して曰く「之を哭するものは腰斬せん」會々一人あり、來て大に哭す、吏卒捕へて操に白す、操之を鞠問するに元の青州別駕王修なり、修始め譚を諫めて逐はれ、是に至て來り哭せる也、依て問ふて曰く「三賊を誅夷さるゝを憚らざる手」修答て曰く「生て事ふる所に忠ならず、死して哭せざるは豈義ならんや、死を畏るゝがために義に背くは我がせざる所なり、願くは袁公を葬らしめよ、我れ斬らるゝと雖も恨なし」操嘆トて曰く「北方に此の義人あり、袁氏善く之を用ひは、我れ豈茲に至るを得んや」依て修を禮して中郎將とし、袁尚等を亡すの計を問ふ、修答へず、操益々嘆トて曰く「眞の義士なり」

阻授頗ふる智計あり、袁紹用ふると能はず、却て之を獄に投ず、紹敗るゝに及び、操

なく、多く忠良を殺して以て姦威を立つ、惜らくは洪が力劣て天下のために仇を報ゆると能はざるを、何ぞ肯て服をいはんや」紹怒て之を斬る、陳容時に紹が坐にあり、紹に謂て曰く「將軍大事を擧げて天下のために暴を除かんとし、而して先づ忠義の士を殺す、豈天意人心に適はんや」紹慚ぢて容を牽出さしめて曰く「汝は臧洪が儔に非ず、空しくまた然らんや」容顧みて曰く「仁義豈常あらん、之を踏めば則ち君子、背けば則ち小人たり、寧ろ臧洪と日を同ふして死するも、將軍と日を同ふして生さず」と、竟に亦殺さる、坐客皆嘆息し、竊かに相謂て曰く「如何ぞ一日にして二烈士を殺せるや」

袁熙出奔す、其の將焦觸キウシュク自から幽州刺史と號し、操に降らんとす、韓珩カンキョウ曰く「我れ袁公父子の恩を受ると深し、今破亡すれども智救ふと能はず、勇死すると能はず、義に於て闕く、曹氏に北面するが如きは爲し能はざる所なり」一座皆色を失ふ、觸曰く「大事を擧ぐるものは當さに大義を立つべし、事の成否何ぞ一人を待たん、珩が志を終へしめて君に事ふるをなすべし」と、乃ち之を捨て、相率ひて操に降る。

審配シンバイは袁紹の將なり、曹操鄴を抜く時、配擒にせらる、操降を勸むれども罵て従はず、曰く「我れ生ては袁氏の臣たり、死しては當さに袁氏の鬼たらん、讒諂の賊たる可らず」と、刑に臨んで馘士を叱して曰く「我が君袁尚を北に在り、南首して死す可らず」と、竟に北向して斬らる。

操既に袁譚を獲、其の首を梟し、令して曰く「之を哭するものは腰斬せん」會々一人あり、來て大に哭す、吏卒捕へて操に白す、操之を鞠問するに元の青州別駕王修なり、修始め譚を諫めて逐はれ、是に至て來り哭せる也、依て問ふて曰く「三賊を誅夷さるゝを憚らざる乎」修答て曰く「生て事ふる所に忠ならず、死して哭せざるは豈義ならんや、死を畏るゝがために義に背くは我がせざる所なり、願くは袁公を葬らしめよ、我れ斬らるゝと雖も恨なし」操嘆トて曰く「北方に此の義人あり、袁氏善く之を用ひは、我れ豈茲に至るを得んや」依て修を禮して中郎將とし、袁尚等を亡すの計を問ふ、修答へず、操益々嘆トて曰く「眞の義士なり」

阻授頗ぶる智計あり、袁紹用ふると能はず、却て之を獄に投ず、紹敗るゝに及び、操

の兵授を収めて至る、操見て降を勸む、授肯せずして曰く、「一家皆袁氏の恩を受く、今に及んで背く可けんや、公我れと舊誦を思はば、願くは速かに我を刎ねよ」操曰く「我れ卿を用るは天下圖るに足らざるのみ」と、依て之を陣中に饗す、翌日授逃れ走らんとす、操竟に之を斬らしむ、授死して顔色自若たり、操其の志を憐れみ、黄河の邊に葬むる

劉備益州を攻め、劉璋が將張任を擒にして降を勸む、任曰く「忠臣の義二君に仕ふ可らず」備曰く「卿は天の時を知らざるのみ」と、其の縛を解かしむ、任曰く「今日許さるゝも明日必らず叛かん、請ふ速かに斬れ」と、依て大に備を罵る、諸葛亮曰く「義士あり、名を成さしむべし」と、竟に斬て厚く之を葬らしむ

樊城の戦ひに于禁、龐徳來て曹仁を救ひ、關羽と戦ふ、羽水に乗つて大に之を破り、禁、徳皆擒にせられ、禁降る、徳獨り屈せず、罵て曰く「曹公百萬の衆あり、汝が主劉備と雖も後必らず擒とあらん、我が膝何ぞ汝が輩に屈せんや」と、竟に斬らる、操聞きて流涕して曰く「圖らざりし禁我れに背きて而して徳が義烈茲に至らんとは」後

に禁の魏に歸るや、曹丕之をして操の廟に謁せしめ、壁上に徳死戦して禁降るの圖を掲ぐ、禁依て慚恚して死すといふ

司馬昭魏の政權を専らにするや、諸葛誕兵を起して之を討て克たず、麾下の兵多く擒にせられ、相呼んで曰く「願くは諸葛公と共に死せん」昭命て「降者は許さん」といはしむ、士皆降らず、數百人悉く斬らる、昭感嘆して厚く其の屍を葬らしむ

諸葛亮の魏を伐つや、士卒をして百日毎に歸休せしむ、既にして魏の兵俄かに至る、楊儀曰く「勢ひ急也、暫らく歸休すへきものを留めて戦はしめん」亮曰く「軍を出し民を勞す、皆信義に由る、假令勝つと雖も信義失ふ可らざるなり」士卒悉く感激し、踴躍して自ら戦はんと乞ふ、蓋し法令を嚴にして軍紀を保つは、良將の最も意を致す所、故に亮曾て涙を揮て馬謖を斬れり、皆義の至りなり、呂蒙また關羽の後を襲ふて荆州を取るや、軍法極め嚴なり、蒙と同郷の一本、官の簪笠を着て雨中を歩す、蒙曰く「此事と雖も令に背けり、義斬らざるを得ず」と、涙を垂れて之を刑せしむ

曹丕大兵を擧げて吳に向ふや、徐盛令を承けて之を江邊に拒ぎ、令を出して戰を禁ず、

孫韶從はず、獨り出で戦はんと欲す、盛命じて韶を斬らしめんとす、孫權自から來りて之を救ふ、盛權に謂て曰く「主公臣を以て都督とす、韶今軍令に背く、軍令は臣の立つる所に非ず、又主公の私設に非ず、實に國家の典刑あり、親疎の故を以て二にす可らず」權曰く「韶は我が亡兄の愛兒なり、強ひて請ふ死罪を許せ」と、辛ふして之を免れしむ

李通が妻の伯父法を犯す、朝陵長趙儼收治して之を大辟に致す、通か妻子號泣して以て其の命を乞ふ、通曰く「方さに曹公操と戮力す、義私を以て公を廢せず」と、儼か法を執て阿らざるを嘉みして、共に親交を爲す、後操袁紹と相争ふや、紹使を遣はして通を征南將軍に拜し、劉表も亦陰かに之を招く、通皆之を拒む、通が親戚部曲流涕して曰く「今孤危獨守して大援を失ふ、立るに亡ふべし、如かす紹に従はんには」通劔を接じて叱して曰く「曹公明哲必らず天下を定めん、紹強盛と雖も任使方なし、竟に虜と爲らんのみ、我れ死すと雖も貳せず」紹が使を斬て印綬を送る

于禁曾て曹操の命を承て昌豨を攻む、豨は禁の舊友なるを以て禁に詣て降る、諸將皆

豨を送て操に致さんとす、禁曰く「諸君公の常令を知らずや、圍で後に降る者は許さず、夫れ法を奉り令を行ふは上に事ふるの節なり、豨舊友と雖も、禁節を失ふべけんや」自から豨と訣辭し、涕を揮て之を斬る

徐翕、毛暉袁州に叛し、後亡命して臧覇に投ず、曹操劉備をして覇に語り、二人の首を送らしむ、覇備に謂て曰く「覇か能く自から立つ所以は斯の如きことを爲さざればなり、覇曹公か生全の恩を受く、敢て命に違はず、然れども王覇の君、義を以て告ぐべし、願くは將軍之が辭を爲せ」備乃ち覇の言を以て操に告ぐ、操感歎して覇に謂て曰く「是れ古人の事、而して卿能く之を行ふ、我が願なり」と、依て二人を許して郡守とす

朱靈袁術の命を承けて公孫瓚を攻む、靈の家皆城中にあり、瓚靈の母弟を城上に置き、靈を呼ひ誘はしむ、靈望んで涕泣して曰く「丈夫、一ひ身を以て人に許す、豈家を顧みんや」力戰して之を抜く

上たるもの舊怨を捨て、坦懐虚心にして以て下を待つ、下たるもの又競ふて智勇辯力

を効し、其の力を以て相推譲し、勉強して以て其の私憤を捨つ、また公義の至ならずや

蜀の長水校尉廖立自から謂らく、才名營々に諸葛亮の副たるべしと、曾て職位の閑散なるを以て快々として怨勝止まず、亮之を廢して民とし、汝山に遷す、亮死するに及び、立涕泣して曰く「我れ竟に左衽とならん」

吳の凌統初め甘寧が其の父を殺せるを怨み、必らず之に報るんと欲し、曾て呂蒙の營に於て會飲せる時、酒酣なるに及び、統刀を把て起て鏢ふ、寧起て曰く「寧も雙戟鏢を善くす」と、蒙曰く「寧巧と雖も未だ蒙に如んや」と、依て刀を把り楯を持て二人の間に立ち、以て各々全ふせしむ、後に戰ふとき統敵に獲られんとす、寧之を救ふ、統泣て之を謝し、爾後刎頸の交を爲すといふ

甘寧が厨下の兒曾て過失あり、走て呂蒙に投す、蒙寧が之を殺さんことを恐れて故らに還さず、後に寧禮を齎して蒙の母を拜す、與に堂に升るに臨みて厨下の兒を出して寧に還す、寧蒙に殺さるることを憂ふ、既にして寧船に還り、厨下の兒を岸頭の桑樹に縛

し、自から弓を執て之を射殺し、舟子に命じて舳纜を増し、自から衣を解て船中に臥す、蒙聞て大に怒り、鼓を鳴らし兵を會して寧を攻んとす、寧之を聞くも故らに臥して起たず、蒙の母徒跣して走出で、蒙を諫めて曰く「主公汝を待つ骨肉の如く、屬するに大事を以てす、何を私怨を以て主公の勇將を殺すべけん、萬一寧死せば、縱令主公問はざるも、汝臣下として非法なり」蒙固より至孝、母の言を聞て豁然たり、自から寧の船に至り、笑て呼んで曰く「興覇寧の字の老母卿を待て會食せん」とす、速かに上り來れ、寧涕泣歔歔して曰く「我れ卿に背くと大なり」と、共に還て母を見、歔歔して日を終ふ

李典、張遼、樂進等合泐を圍む、孫權大兵を以て來り圍む、遼操の命を以て出戰はんとす、三人固より相睦からざるを以て遼其の従はざるを恐る、典慨然として曰く「今大事に當り、私憾を以て公義を忘るべけんや」と、衆を遼に與へて權を破る、事○成○す○は○豪○傑○に○あり○、○英○雄○の○大○業○を○立○つ○る○、○必○ら○ず○豪○傑○の○力○を○集○め○て○智○勇○辯○力○に○待○た○ざる○を○得○す○、○度○量○海○の○如○く○、○人○の○長○を○容○れ○て○多○々○其○の○能○を○盡○さ○し○め○、○誠○意○下○を○憐○み

て其の死心を得るが如き、皆大事を成し大業を建つる所以ならずや、我が頼光に四天王あり、徳川家康にも四天王あり、漢高と光武とに三傑あり、是を以て斯の如し、三國時代の英雄また最も其の下を愛して或は及ばざると恐る、曹操、司馬懿父子の如き、特に其の最たるものなり

曹操軍を率ひて襄城に抵り清水を過るとき、馬上に慟哭して曰く「去年典章我れを救ふて此の處に戦没せり、今思ふて斷腸に耐へざるのみ」と、竟に牛馬を宰して之を祭り、次に曹昂を祭り、又戦死の將士以下及び曾て騎れる所の馬絶影馬の名をも併せ祭る、將士皆感激せざるなし

操また袁譚を攻むるとき、河邊の百姓を徴發して氷を摧き舟を曳かしむ、百姓恐れ皆山中に奔竄す、操怒て令を下し、盡く之を捕斬せしむ、百姓驚怖し、竟に自から來て罪を乞ふ、操曰く「軍令一び下てまた柱ぐ可らず、然れども汝等を屠るに忍びず、去て深く山間に潜伏すべし」と、命じて盡く之を去らしむ

諸葛亮曾て司馬師に勸め、文舒をして江陵に迫り、仲恭をして武昌に向ひ、以て吳の

上流を羈せしむ、師從はす、王昶等をして道を分て吳を擊たしむ、昶等吳の將諸葛恪と徐塘に戦ふて大敗して還る、議者皆昶等を貶せんとす、師聽かずして曰く「是れ我が公休諸葛亮の字に聴かざるの過なり、諸將何の罪かあらん」後に雍州刺史陳泰并州を救ふて胡を討せんとを求む、未だ集まらざるに雁門新たに興り、遠役を以て驚反す、師又曰く「是れ我が過なり、陳雍州が罪に非ず」と、之を以て人皆悦服すといふ

初め姜維屢々蜀の軍に抗す、諸葛亮竟に維を降し、因て謂て曰く「我が兵法一に之を卿に授けん、卿能く努力せよ」と、擢んで奉義將軍に任す、當陽亭侯に封す、維時に年二十七、亮書を蔣琬に與て曰く「姜維は梁州の上士なり、思慮精密にして膽義あり、頗る兵意を解せり、盡く軍書を教へて當るに主上に觀謁せしむべし」

龐統は鳳雛と稱せられ、諸葛亮と並び稱せらる、劉備始めは甚だ之を重んぜず、以て未陽の令と爲す、統縣に在て治めず、竟に官を免す、魯肅書を備に贈て曰く「龐士元統のは百里の才に非ず、治中別駕の任に居らしめば、始めて當るに驥足を展ぶべきのみ」亮も亦之をいふ、備故に統を見て共に語り、大に器として曰く「我れ殆んど驥ら

んどす」と、竟に擢んで、治中と爲し、親任すると亮に亞ぐ
 曹操の荊州を降すや、先づ蒯越を召して曰く「我れ荊州を得るを悦ばず、止た卿を得
 るを悦ぶ」と、之を江陵太守とし、樊城侯に封じ、また王粲、傅巽等の英才を用ゐて
 關内侯に封す

劉備カンサイ統亭に敗れて退く時、黃權江在に在り、道絶て還ることを得ず、其の衆を率ゐて魏
 に降る、備の群下權の妻子を收めんと請ふ、備曰く「我れ權に負く、權我れに負かず」
 と、之を待すると初めの如し

第八 智勇辯力

智○勇○辯○力○は○三○國○時○代○の○精○華○な○り○、英雄崛起して各々一方に割據し、相攻伐力争し、互
 ひに盛衰興亡す、其の間智勇辯力を用ゐて縦横奇正の變を窮む、蓋し自然の勢ひなり、

彼の春秋戰國時代に視るも、五胡の時代に視るも、又我が戰國時代に視るも、皆然ら
 ざるとなし、特に三國時代は智勇辯力の最も旺盛なりし時なり、三國時代をして、支
 那歴史上の一大壯觀たらしむるは、實に智勇辯力なり

今や歐亞の列國相對時し、幸ひに兵革を見ずと雖も、而かも人種の競争、商業の競争、
 軍備の競争は更に春秋戰國時代に異ならず、又三國時代に異ならず、而して列國に智
 勇辯力を揮つて縦横の奇策を盡し、天下の形勢を左右して奇正の變を極むるものなき
 は何ぞや、世下つて傑士乏しき乎、抑も又時運未だ會せざる乎、嗚呼時運未だ會せざ
 る乎。

孫堅の黃祖を攻むるや、祖江に據て陣し、盛んに矢を發せしむ、堅乃ち詐つて數十艘
 の兵船を出して戦ふが如くす、祖の兵一齊に射、矢下ると雨の如し、斯の如きと三日、
 堅箭十萬餘を得たり、翌日堅大に呼んで曰く「進め」と、電撃して大に祖の軍を破る
 曹操白馬を救ふとき、文醜と戦ふて勝たず、令して陣を阜上に移し、更に令して憩は
 しむ、既にして醜の軍掩ひ至り、操の兵驚駭して退かんとす、荀攸曰く「餌を敵に投

じ、乗じて粉碎すべし」操笑て伎を自視す、伎をたははす、醜が軍抵るに及んで果して輜重を争ひ奪ふ、操急に令して曰く「撃て」と、依て急に馳突して大に醜の軍を敗り、醜を斬る

操馬超、韓遂と戦ふや、忠等力盡きて和を請ふ、賈詡曰く「之を處すると如何」操先づ詡に計を問ふ、詡曰く「兵は詐を厭はずといはずや、先づ和を許して而して後間諜を放ち、忠と遂とを離叛せしめは、一鼓して殲すべきのみ」操手を拍て曰く「天下の高見必らず相合ふ、卿が計は我が心腹の機なり」と、其の圖る所の如くす

初め賈詡張繡を助けて操と戦ふ、操袁紹後を襲ふと聞きて急に軍を返し、豫しめ敵騎の追撃に加ふ、繡劉表の兵を合せて之を追ふ、詡諫止すれども聞かず、果して敗れて歸る、詡又勸めて再び之を追はしむ、繡等依て復た返撃して操の軍を敗る、後に詡に問ふて曰く「前には追ふ可らずといひ、後には追ふべしといふ、而して其の言皆中れるは何ぞや」曰く「將軍能く兵を用ふと雖も未だ操に及ばず、操は追兵の至るを察して豫しめ之に備ふ、然れども一び追兵を敗るや、また戒意なし、而して兵士また疲倦す、之を撃たば豈勝を得ざらんや」

諸葛亮魏を伐て街亭ガイテイに破るゝとき、城中の兵少くして守る可らず、而して魏の大兵俄かに追ひ至る、亮令して旗を伏せ兵を藏め、大に城門を開かしめ、自から高樓に上て琴を彈す、魏軍至て伏あるを疑ひ、逡巡して進まず、既にして軍を返す、亮依て免るゝを得たり

亮次で魏を伐ち、陳倉城を攻む、守將郝昭カウシウ病急なるに乗じ、部下の兵士をして密かに城中に入らしめ、内外より挾撃して一舉に之を取り、更に魏延、姜維をして急に散關を取り、冑を解くと勿らしむ、二人馳せ至て關を奪ふ、魏將張郃カウセ掩至れども及ばず、直ちに軍を返す、二人追撃して之を敗る、皆亮の揣摩する所の如し

司馬懿の亮に敗らるゝや、蜀の將廖化リョウカ馳せて之を林中に追ふ、懿金甲を東路に捨て、西路より走る、化故に追ふて東路に入る、懿依て幸ふじて免かる

劉備の曹操と争ふや、勢ひ退くべくして而して退かず、部下敢て諫むるものなく、矢下ると雨の如し、法正乃ち往て備の前に當る、備曰く「孝直正の箭を避けよ」正曰く

「明公親から矢石に當る、況んや小人かや」是に於て備曰く「孝直、我れと汝と俱に去らん」と、竟に退く

魏主曹叡吳を伐つ、諸將各々建策す、叡曰く「先帝曾て東合淝に城き、南襄陽を固め、西祁山を守つて敵に當る、我れ亦之に倣ふて三路より兵を進むべし」と、既に巢湖に至て吳の軍に對す、滿寵曰く「今我が兵遠く來る、敵必らず戰明日に在りとせん、今夜不意に之を襲ふべきなり」と、依て急に擊て諸葛瑾を破る、陸遜之を聞て曰く「魏兵三方より來るは我が兵を分たしめんとするなり、主公に請ふて魏兵の後を絶ち、糧道を杜ぎて我れ前より之を擊たん」と、使を遣はして書を孫權に奉つらしむ、會々其の使魏の兵に捕へらる、叡其の書を見て曰く「陸遜の計甚だ妙なり、我れ之を知るとを得たるは幸ひなり」と、急に其の後に備へしむ、時に遜甚だ戒意なきが如し、諸葛瑾危ふんで之を訪ふ、至れば乃ち遜士卒に命じて豆を植へしめ、自から轅門に於て諸將と碁を圍む、瑾入て曰く「魏軍勢威甚だ大也、之を拒ぐと如何」遜答て曰く「我れも亦久しく之を思ふ、今魏の大兵江流に乗じて直ちに吳楚を呑んとす、共に角せば徒らに兵を損せん、依て表して挟み撃たんとせるも、使者敵兵に獲られて計暴露す、如かず軍を退けんには」と、急に軍を合して襄陽を攻む、叡曰く「遜は謀策に富む、容易に鋒を交ゆ可らず」堅く守て出でず、數日にして報する者あり、吳の兵悉く退くと、叡驚嘆して曰く「遜の兵を用ゆると孫吳の如し、東南未だ俄かに平ぐ可からず」

曹爽の權を専らにするとき、司馬懿病を稱して出でず、爽李勝をして懿を訪ふて病を視せしむ、懿二子師、昭を顧みて曰く「是れ曹爽我が病を窺はしむるのみ、我れ依て計を爲さん」と、俄に亂髪して牀上に臥し、聲して人語を解せざるが如くし、侍婢をして湯藥を進めしめ、呑んで垂滴襟を濡ふす、勝曰く「太傅懿時大水の管窺起れりといふは眞なり」懿噎噎して曰く「我れ老衰して病重し、幸ひに曹將軍に傳語せよ、請ふ二兒を以て將軍に托せん」是に於て爽戒心なく、益々跋扈す、懿竟に急に謀を以て之を殺す、曹操初め司馬懿を評して曰く「鷹視して狼顧す、漫に用ふ可らず」と、懿後竟に魏を傾け、其の孫炎篡して帝位に即く

夫れ封建の綱は要地を扼して以て宗族親臣に據らしむるを要す、徳川氏が三家を置き、

海内要害の地には諸第の親臣を分封して以て勢を制せしめしが如きは、皆其の宜を得たるものなり、而して魏は曾て此の段の深慮なかりしが如し、故に曹叅曾て上書して曰く「州郡の牧守皆千里に跨有し、軍武の任を兼ね、或は國を比すると數人、或は兄弟並ひ據る、而して宗室は空虚の地に王として不使の民に王たり、曾て一人も其の間に圓りて與に相維制するとなじ、強弱枝萬一の處に備ふる所以に非ざるなり、語にいふ、百虫の蟲、死に至て僵れず、其の之を扶くる多きを以てなり、此の言小と雖も以て大に譬ふべし」と、魏用るす、故に司馬氏權を執れば魏帝は木偶の如く、社稷一反掌の間に司馬氏に篡はる

司馬師將さは吳を伐たんとし、諸葛誕、王昶、胡遵、毋丘儉等皆策を進む、師之を傅緞に問ふ、緞曰く「吳の寇を爲すと六十年、未だ志を得易からず、止た地を擇で險に居らば以て其の肥壤を奪はん、是れ一也、兵民表に出ては寇抄犯さず、是れ二也、近路を招懷せば降附日に至らん、是れ三也、羅落遠く設けば間構來らず、是れ四也、敵其の守りを退けは羅落必らず海からん、細作立ち易し、是れ五也、坐ながら積穀を食

まは士運輸せず、是れ六也、晝隙時に間し、討襲速かに決せん、是れ七也、凡そ此の七事は軍事の急務なり、據らずんば敵便を恣にせん、據らば則ち利國に歸せん、察せざる可らざる也」師従はず、軍果して利あらず

姜維の狄道を攻むるや、魏將鄧艾、陳泰力を合せて之を拒ぐ、泰潛行して夜狄道に至り、東南の高山に據る、維故に勝たずして去る、司馬昭曰く「陳泰沈勇にして能く斷つ、將に陥らんとするの城を救ふて而して兵を益さんと求めず、大將たるもの斯の如くならざる可んや」

姜維狄道より還て鍾提シヨウテイに止まる、時に魏人皆以爲らく、彼れ力竭きて復た出ると能はざらんと、鄧艾曰く「彼れは勢に乗じて我は虛、是れ一なり、彼れは上下軍に習ひ、我れは將替り兵新たなり、是れ二也、彼れは船、我れは陸、是れ三也、彼れは専ら攻め、我れは分て守る、是れ四也、彼れは食に羌穀に由て祁山キサンの熟麥を促す、五也、且つ維懸計あり、來らんと必せり」維果して祁山に出づ、艾依て戰ふて大に之を敗る、袁紹曹操と相持し、人をしで助を荆州の劉表に求めしむ、表之を許して而して至らず、

亦操に與せず。以て形勢を觀望す、カンヌイ韓嵩表に勸めて曰く、「今兩雄相持す、天下の重きと將軍にあり、若し爲すことあらんと欲せば則ち起て其の弊に乗じて可なり、若し然らずんば將らに宜く従ふべき所を擇ふべし、曹操能く兵を用ひ、賢俊多く之に歸す、州を擧げて之に附くに如かず、操必らず將軍を徳とし重んじ、長く共に福祚を受けん、是れ萬全の策也」然れども表狐疑して斷せず

操の陽安都尉李通急に戶調を歛じ、朗陵長趙儼書を荀彧に與へて曰く、「今陽安百姓困窮し、隣城並に叛て傾蕩し易し、乃ち一方安危の機なり、國家宜しく慰撫すべし、然るに急に綿絹を歛めは何を以て善を勸めん」或乃ち操に白して盡く綿絹を民に還す曹不魏の文帝賈詡に問ふて曰く、「我れ天下を統一せんとす、吳蜀孰れか先に亡ばさん」詡曰く、「吳蜀葢爾たる小國と雖も、山に依り水を阻つ、劉備雄才ありて諸葛亮善く國を治ひ、孫權虚實を識り陸遜兵勢を見、險に據り要を守り、舟を江湖に泛ぶ、皆俄かに謀りがたし、用兵の道は先づ勝て後に戰ひ、敵を量て將を論ず、故に擧に遺策なし、私に將臣を料るに備、權が對なし、天威を以て之に臨むと雖も未だ萬全の勢を見ず」

魏主曹叡會て陳矯に問ふ、「司馬懿忠貞、社稷の臣と謂ふべき乎」矯曰く、「朝廷の望也、社稷は未だ之を知らず」

曹叡魏の明帝太尉司馬懿をして遼東を討たしむ、因て懿に謂て曰く、公孫淵遼東にて叛せり將に何の計にか出でん」對て曰く、「豫め城を捨て、走るは上計あり、遼東に據て大軍を拒ぐは其の次なり、坐ながら襄平を守らば擒とならん」叡曰く、「三者何れにか出でん」懿曰く、「彼我を審量し、乃ち豫め割さ棄つる所あり、而かも是れ淵が及ぶ所に非ず、必らず先づ遼東に拒て後に襄平を守らん」と、懿至るに及び、淵窘急して糧盡き、衛演を遣はして日を尅して任に赴かんと云ふ、懿演に謂て曰く、「軍事の大要五あり、能く戰ふべくは戰ふべし、戰ふ能はずんば守るべし、守る能はずんば走るべし、餘の二事は止た降と死とのみ、汝敢て面縛せずんば心を決して死に就け」と、竟に攻めて淵を斬る

魏田を擴めて楊豫の間に穀を積んとす、鄧艾曰く、「昔太祖曹操黃巾を破り、因て屯田を爲して穀を許都に積み、以て四方を制す、今三隅已に定つて事淮海にあり、大軍出征

毎に兵を運すること過半、費す所巨億、陳蔡の間上下田良し、淮北に二萬人を屯じ、淮南に三萬人を屯じ、十に二分は之を休め、常に四萬人をして且つ田し且つ守らしむべし、衆費を除くこと六七年にして三千萬斛を淮上に積むべし、是れ十萬の衆五年の食なり、是を以て吳に加へば勝たざるとなけん」司馬懿之を善しとし、溝渠を廣め、東南事有る毎に軍衆を發し舟を浮べて下り、江淮に達す、資食餘あつて水害なし、司馬昭大舉して蜀を伐んとす、朝臣多く不可とす、獨り鍾會之を勸む、昭衆を諭して曰く「吳の地は廣大にして下濕なり、之を攻むれば功を爲すと最も難し、如かず先つ巴蜀を定めんには、三年の後江流に乗じて水陸並進せん、是れ銳を滅し虞を取るの勢あり、今姜維を沓中に躡して東顧すること得ざらしめ、直ちに驛谷を指して其の空虚を搆き、以て漢中を襲はば、劉禪の關を以て邊城外に破れ、士女内に震はん、其の亡ぶると知るべし」と、果して其の言の如し

魏の蜀を伐つや、吳人襄陽の張悌に謂て曰く「司馬氏執政以後、大難屢起る、今又力を勞して遠征す、敗亡暇あらず、何を以てか能く勝たん」悌曰く「然らば、曹操功中

夏を蓋ふと難も、民其の威を畏れて其の德に懐かず、丕、敵之を承けて刑繁く租重し、司馬懿父子其煩苛なるを除きて平易なるを存し、之が謀主と爲て而して其の疾苦を救ふ、其の根本固し、今蜀は閹官政を専らにして、國に政令なし、魏必らず勝たん、嗟呼司馬氏の志を得るは吳の大憂なり」

王濬知謀あり、時に晋帝司馬炎密かに羊祜と謀て吳を滅するの志あり、祜依て濬を薦めて益州刺史とし、水軍を治め大に舟艦を作る、時に造艦の木屑江を蔽ふて流る、吳の建平太守吳彦流木屑を取て以て吳主に白して曰く「晋必らず吳を攻むるの計あらん、宜しく建平の兵を増して以て其の要衝を塞ぐべし」吳主從はず、彦乃ち鐵鎖を作て江路を横斷す

吳の荆州牧陸抗疾急あると上疏して曰く「西陵の建平は國の藩表なり、既に上流に處て敵を二境に受く、若し敵舟を浮べて流れに順ひ星奔電邁せば、援を他郡に恃んで以て倒懸を救ふべきに非ず、是れ社稷安危の機也、臣が父遜昔西郡に在りし時曾ていふ、西陵は國の西門、守り易きも亦失ひ易し、若し守らざるとあらば曾だ一郡を失ふ

に止らず、荆州我が有に非ざらんと、臣死するの後は、乞ふ西方を注意せよ」
 羊祜晋帝に勤むるに呉を取るの策を以てす、朝臣多く以て不可として之を阻止す、祜歎
 して曰く「天下意の如くならざる十常に入九に居る」後に入朝して晋帝に面し、以て呉
 を伐んとを勸む、帝之を善しとす、會々祜病あり、帝仍て張華を遣して策を問はしむ、
 祜曰く「孫皓暴虐已に甚だし、今戦はずして克つべし、若し皓不幸にして死し、呉
 人更に賢主を立てば、百萬の衆あり、雖も長江未だ窺ふ可らず、將に後患を爲さん
 とす」帝また祜をして臥しながら諸將を都督せしめんとす、祜曰く「臣行かざるも呉
 取るべし、但だ呉既に平々の後、當るは聖慮を勞すべきのみ」
 王濬益州より晋帝に上疏して曰く「孫皓荒淫暴虐あり、宜しく速かに征伐すべし、
 若し一旦皓死して更に賢主を立てば則ち疆敵なり、臣船を作ると七年、漸く朽敗せん
 とす、臣年七十、死日なし、三者一ひ乖かば吳國力がたし、願くは事機を失すると
 勿れ」杜預まで上表し曰く「凡そ事當るに利害を以て相校すべし、今呉を伐つの利十
 は七八あり、而して其の害一二功無さに止まるのみ」ど、晋帝欲て兵二十萬を起し、東

西道を分て呉に入り、孫皓を降して呉を滅し、初めて天下を一統す
 呂布徐州牧たらんとし、陳登をして曹操に由て請奏せしむ、登還るに及び布怒て戦と
 抜き兒を斫て曰く「卿が父陳我れを勸めて孟徳操と和し、婚を公路術に絶たしむ、今
 我が求むる所は獲ずして而して卿が父子並に顯重なり、卿等果して我れを賣れる乎」
 登自若として徐ろに對へて曰く「登曹公に見えて言ふ、將軍呂布を養ふは虎を養ふ
 が如し、當るに其の肉に飽しむべし、飽かされば則ち人を噛むと曹公いはく、卿が言
 非なり、譬へば鷹を養ふが如し、餓れば則ち用を爲し、飽けば則ち颺り去ると其の言
 斯の如し」布の意乃ち解く
 趙咨曾て孫權の命を奉て魏に至る、丕問て曰く「吳王は何等の主ぞや」咨曰く「聰
 明仁智勇略の士なり」丕其の故を問ふ、咨曰く「魯肅を凡品より納れしは是れ聰なり、
 呂蒙を行陣より抜きしは是れ明あり、于禁を獲て害せざりしは是れ仁也、荆州を取る
 に兵刃に血らざりしは是れ智なり、三州に據て天下に虎視するは是れ雄なり、身を陸
 下丕に屈するは是れ略也」丕曰く「吳主頗る學を知る乎」咨曰く「吳主江に浮ぶ

萬艘、帶甲百萬、賢に任じ能を用ひ、志經略に存す、餘閑あつて書史を博覽し奇異を籍采すと雖も、書生の章を尋ね句を摘むに効はざるのみ」丕曰く「吳をば征すべきや否や」杏曰く「大國に征伐の兵あれば小國に備禦の固あり」丕曰く「吳に太夫の如きもの幾人かある」杏曰く「聰明特達なる者八九十人、臣が如きは車載斗量勝て數ふ可らず」

蜀會て鄧芝を遣して好を吳に修めしむ、時に孫權未だ全く吳と絶たざるを以て芝を見ず、芝自から表して見えんことを請ふて曰く「臣今來ることは吳のためにせんとす、管た蜀のためのみに非ざるなり」孫權依て之を延見して曰く「我れ蜀と和親せんことを願ふと雖も、蜀主劉幼弱、國小に勢迫りて魏に乗せられ、自から保全せざらんことを恐るゝのみ」芝曰く「吳蜀二國は四州の地、大王は命世の英にして諸葛亮も亦一時の豪傑なり、蜀に重險の固あり、吳に三江の阻あり、此の二長を合して共に唇齒たれば、進んでは天下を兼併すべく、退いては鼎足して立つべし、大王若し質を魏に委せば、魏必らず上は大王の入朝を望み下は太子の内侍を求めん、若し命に従はずんば辭を奉

じて我を伐たん、蜀も亦流に順つて機を見て進ん、斯の如くんは江南の地は復た大王の有に非ざるなり」權依て竟に魏と絶て蜀と和す

呂布始め丁原に従ふ、董卓その勇を愛して之を従はしめんとし、李肅をして往て布に説かしむ、肅説て曰く「卿は擎天架海の才あり、四海皆之を知る、富貴功名を得んと物を囊中に探るが如けん、何ぞ區々として久しく人の下風に立たんや」依て布に勸めて卓に屬せしむ、布竟に原を殺して卓に従ふ

辯力縦横、大勢を斷じ機變を制す、乃ち又評議痛快、往々骨を刺すの概なくんはあらず

黃祖會て英士を稱衡に問ふ、衡曰く「大兒は孔文舉、小兒は楊德祖、此の二人のみ」祖問ふ「我が輩は如何」衡曰く「卿は社中の神なり、祭祀さるゝも微功なし」祖怒て竟に之を殺す

曹操一日劉備の荊州を得たるを聞きて愕然たり、程昱曰く「公敵の重圍に陥り、矢石に中るも驚かず、今乃ち然るは何ぞや」操曰く「劉備は人中の龍なり、未だ水を得ざ

かしに、今荆州を得て龍の大海に入れるが如し、我れ駭く所以なり」
 司馬懿退きて宛城にあり、諸葛亮來りて魏を伐つと聞き、頗る愛色あり、二子昭關
 て曰く「天子必らず父君を起して寇を平げしめん」懿歎トて曰く「何を料らん我が家
 また麒麟兒を出さんとは」魏主果して懿を起し、出で、亮を拒がしむ
 司馬懿太后の詔と稱して曹爽を誅するとき、桓範出で、爽に諫る、懿曰「智囊（範を稱する也）
 往けり」蔣濟曰く「驚馬棧豆を懸ふ、用ふると能はざらん」と、範爽に勸めて魏主を
 奉じて許昌に至り、四方の兵を發せしむ、爽用ふると能はず、皆濟の言の如し
 管輅曾て何晏、鄧颺等を評して必らず亡びんといふ、輅の舅其の言の太だ切直なるを
 責む、輅笑て曰く「死人と語る、何を畏る、所あらんや」舅以て狂と爲す、既にして
 何、鄧等皆敗る、舅曰く「何を以て之を豫知せる」輅曰く「鄧が行歩、筋は骨を束ね
 ず、膂は肉を制せず、起立傾倚して手足なきが如し、是を鬼躡と爲す、何が視候、魂
 は宅を守らず、血は色を華せず、精爽煙浮して容槁木の如し、是を鬼幽と爲す、二者
 皆遷殞の象に非ず、必敗する所以なり」

諸葛恪始め盛名あり、陸遜之を戒めて曰く「我が前に在るものは我れ必らず之を奉じ
 て同く升り、我が下に在る者は則ち扶けて之に接はる、今卿氣其の上を凌ぎ、意其の
 下を蔑にす、徳を安んずるの基に非ず」後恪大傅となり、果して凶慢を以て誅せらる
 王衍は羊祜の甥なり、曾て祜に詣て事を論ず、辭甚だ清辯なり、祜之を然りとせず、
 衍衣を拂ふて去る、祜顧みて賓客に謂て曰く「王甫（字）の當さに盛名を以て大位に居る
 べし、然れども俗を敗り化を傷ふは必らず此の人ならん」
 司馬炎兵を起して吳を伐つを決す、山濤退て言て曰く「聖人に非ざるよりは、外寧け
 れば必らず内憂あり、吳を存して外懼とするは寧ろ良算ならずや」蓋し敵國外患なけ
 れば國危きをいふなり、炎果して吳を滅するに及び、多く吳の美人を納れて是より政
 刑に荒む
 勇力に至ては、更に太だ見るべきものあり
 孫堅黃巾の賊を攻め、自から先登して賊砦に入り、二十餘人を斬り、賊將趙弘の體を
 掘し、槊を卷て之を刺し、馬を奪ふて之に騎し、縱横奮戦す

孫策また勇力あり、曾て馬上に千糜を生擒し、樊能追至るを顧み、大喝して曰く「奴輩何爲るぞ」聲霹靂の如し、能驚怖して馬より落つ、策之を斬り、糜を一扼して地に投下て亦之を殺す、江東の民皆策の凶勇を怖れ、稱して小霸王といふ

呂布驍勇を以て名あり、騎する所の馬赤兔と名く、時人皆「人中に呂布あり、馬中に赤兔あり」と稱す、袁術紀靈を遣はして劉備を攻むるや、備援を布に請ふ、布馳至て靈等を招きて飲宴し、依て謂て曰く「玄德劉は布が弟呼んで弟といふ備なり、弟諸君に困めらるゝが故に來て救ふ、布が性戦ひを好まずして戦ひを解くを喜ぶ」と、門候に命じて一隻戟を舉げしめて曰く「諸君布が戟の小支を射るを觀よ、一發して中らは諸君營に解去るべし、中らずんば留て戦ふべし」と、弓を擧て戟を射、小支に中つ、諸將驚嘆して曰く「將軍は天威なり」と、竟に兵を解く

張遼長社に屯せし時、營中に反者あり、夜に乗じて火を放つ、陣中驚駭して一軍盡く擾る、遼左右を顧みて曰く「動くこと勿れ、陣中盡く反するに非ず、必らず變を爲して以て人を動亂せんと欲するのみ」と、軍中に令して曰く「反せざるものは安座せよ」

と、親兵數十人を率ひて立つ、軍忽ちにして定まる

孫權大兵を以て合淝を攻むるや、張遼敢從の士八百人を募り、牛を椎して將士を饗し、明日遼甲を着、戟を揮つて先登して出で、數十人を殺し二將を斬り、大に其の名を呼び、敵壘を馳突して直ちに權の麾下に至る、權大に驚き、衆爲さん所を知らず、走て高丘に上る、遼望みて權を叱し戦を挑む、權應せず、遼の率ふる所少きを見、急に之を圍むこと數里、遼左右を壓して直前し、麾下數十人と圍を破て出づ、餘衆尙は圍中にあり、號呼して曰く「將軍我が輩を捨つる乎」遼また馬首を回して圍を突き、悉く餘衆を救ひ出す、權の人馬皆披靡して敢て當るものなし、平旦より戦ふて日中に至り、吳の兵盡く氣を奪はる、是より吳人遼を畏るゝこと甚だしく、江東の小兒「遼來く」といへば皆泣止むといふ、後に曹丕遼を賞して曰く「歩卒八百を以て敵の十萬を破る、古より未だ有らざる所なり」

徐晃また驍名あり、樊城を救ふて關羽の壘を破り、敵兵を沔水に擠す、曹操曰く「敵の圍斬鹿角十重、徐晃竟に之を陥れて斬獲多し、我れ用兵三十年、及び聞く所古の善

く兵を用ふる者、未だ長驅して直ちに敵國に入るものは非ず」と、晃振旋して歸るや、操之を迎ふること七里、置酒高會して杯を晃に屬す、時に諸軍皆集まり、操諸營を案行し、士卒皆陣を離れて見る、獨り晃の一軍整齊して動かす、操歎つて曰く「徐將軍謂つべし周亞夫の風あり」と

許褚身長八尺餘、腰の太さ十圍、容貌雄毅なり、賊衆萬餘人會て褚を攻む、褚が衆少くして敵せず、而して力戰疲極、兵矢盡く、乃ち壁中の男女に令して杆の如き巨石十數個を聚めしめて四隅に置き、褚自から之を飛ばして賊に擲つ、賊衆辟易して敢て進まず、壁中また糧乏し、褚詐て賊と和し、牛を賊に與へて食と易ふ、賊來て牛を取る、牛輒ち奔還す、褚出で、一手逆まに牛尾を曳き、行くと百餘歩、賊衆驚きて竟に敢て牛を取らずして走る

曹操馬超、韓遂と相持するるとき、遂一日請ふて操と馬上相語る、超は北方の強なり、依て乘じて操を刺さんとす、但だ褚の勇名を聞きて敢て發せず、乃ち操に問て曰く「公は虎侯といふものありと聞く、今安くは在る」操顧みて褚を指す、褚目を瞑らして

之を睜す、超故に果さず、蓋し褚怪力虎の如くにして而して痴なり、故に軍中號して虎痴といふ、故に超問ふて虎侯といへるなり

典韋臂力絶倫あり、曾て劉氏のために李永を殺し、其の妻を屠り、徐かに出で、車上の刀戟を取り、歩いて永が家を出づ、追者數百人、敢て近く能はず、之を以て稍々豪傑に知らる、張遼兵を擧るとき、韋之に屬す、會々司馬趙寵が牙門の旗長大にして人能く持する能はず、而して韋一手に之を立つ、後に操に従て呂布を撃つ、弓弩亂發矢飛ふと雨の如し、韋觀す、從兵に謂て曰く「敵來る十歩ならば告げよ」從兵曰く「十歩あり」韋又曰く「五歩ならば乃ち告げよ」從兵懼れて疾くいふ、敵兵至ると、韋手に十餘戟を持ち、大に呼で起つ、向ふ所手に應じて斃れざるなし、韋飲食數人を兼ね、常に好んで太饗戟を持し、日夕操の身邊を護す、張繡降れるとき、操繡及び其の將帥を引て置酒す、時に韋大斧の刃徑一尺なるを提げて操の背後に立つ、繡等仰視ると能はず

關羽、張飛は當時第一の勇者なり、羽身長九尺五寸、長髯胸を蔽ひ、威統堂々として

神の如し、飛雄烈之に亞ぐ、魏の謀臣程昱等皆曰く「羽と飛とは共に萬人の敵なり」と、勇威四隣に聞ふ、羽曾て流矢に中られて其の左臂を申ぬかる、後に創癒ゆるも陰雨毎に臂常に疼痛す、醫曰く「矢鏃に毒ありて髓骨に浸す、當るに臂を破り骨を削て毒を去るべし、乃ち此の患除かん」羽乃ち臂を伸べて醫に之を劈かしむ、時に羽會々諸將を招きて飲食相對す、臂血淋漓として盤器に充つ、然れども羽肉を啖ひ酒を飲みて談笑自若、竟に瘡を畢へしむ

劉備荆州に敗れて江南に走るとき、曹操精銳を提げて急追し、當陽の長坂に及ぶ、備妻子を捨てて走り、飛をして二十騎を率ゐて殿たらしむ、飛乃ち水に據り橋を斷ち、馬上に目を瞋らし矛を横へて曰く「我れは張翼徳飛の字なり、來て共に死を決せんや」翼悉く逆立す、操の軍恐れて敢て近くものなし、備依て免かるゝを得たり、馬超甚だ驍勇にして兵を解し、且つ戎狄の心を得たり、蓋し超か父騰の母は羌女なり、超父の性を傳へて剛烈倫なし、曹操曾て曰く「馬兒超を死せずんば我れ葬地なし」後に劉備に屬して成都に至れるに、劉璋忽ちにして出で、降り

曹操劉備と漢中に相持する時、操米を北山の下に運ふと數千萬囊なり、黃忠之を取らんと欲す、趙雲の兵雲に従て行く、期を過れども忠等歸らず、雲數十騎を率ひて圍を出で、忠等を迎ふ、會々操大兵を以て掩ひ至る、雲且つ戦ひ且つ卻く、雲の將張著創を被むるに及び、雲之を扶けて營に還る、操の兵また來る、張翼門を閉て拒守せんとす、雲勝かず、四門を開き、旗を伏せ敵を息む、操其の伏あるを疑ひ、兵を引て去る、雲乃ち大に鼓譟し、弩を發して後より射る、操の軍驚駭して相蹂躪し、漢水は陷て死するもの算なし、劉備明日自から來て雲が營に至り、昨の戰處を視て嘆じて曰く「子龍雲の字、一身總て是れ膽なり」

孫權の黃祖を討つ時、祖二蒙衝大戰艦を横へて沔口沔口を挾守し、楫闔の大繩を以て石を繋ぎ釘ていと爲し、上に千人あり、弩を以て交々射、飛矢雨の如く下り、吳軍進むを得ず、董襲、凌統各々敢死の士百人と共に兩鎧を着、大舸に乗じて蒙衝の間に突入し、襲自から刀を以て繩を兩斷す、蒙衝横流し、吳軍依て進むを得、大に祖の兵を破る、曹操歩騎四十萬を以て濡須濡須に出で、孫權七萬を率ゐて之に對し、甘寧をして三千人に

將として前鋒とし、夜密かに魏軍を襲はしめ、俄て酒肴を賜ふ、寧料て部下の健兒百餘人に分與し、畢て更に銀盃を以て自から兩盃を引き、都督に與ふ、都督伏して肯て受けず、寧酒瓶を膝上に置き、呵して曰く「卿の主公に知らるゝと寧と孰與ぞや、寧尙は死を惜まず、卿何ぞ獨り死を惜む可んや」都督畏れて飲む、二更に及んで寧一百餘人を従へ、杖を啣んで出で、探の軍に入り、自から數十人を斬る、魏軍驚駭紛す、讒謀して火を擧ると星の如し、寧已に還て營に入り、鼓吹して萬歳と稱す、權喜んで曰く「以て曹老を驚かしむるに足れりや否や」

諸葛誕の部下フン文フン年十八、膂力あり、鐵鞭を揮ふて司馬氏の軍に入り、向ふ所皆披靡す、其の退くとき敵兵群至す、驚死して曰く「鼠輩尙は生を欲せざる乎」返擊して屢々之を斥く、司馬氏の軍竟に遁はす

蜀將傅僉勇名あり、魏將王異を馬上に生擒し、右手に鐵棒を揮ひ、李鵬リホウの追ひ至るを撃て併せて之を殺す、魏兵辟易して敗る此の他智勇辯力のこと以下三章の記傳中に散見す

第九 紀傳の一

曹操紀

支那は大國なり、故に其の人物の氣格甚だ崇高闊達にして、風度稱すべきものあり、賢才異能また代々輩出す、況んや春秋戰國時代より、諸方の胡夷なるもの多く侵入し來りて、純粹支那人種と混合し、幾多の人種合雜したるかや、然り而して其の人の多き、春秋戰國以降蓋し三國時代を以て其の冠冕とせざるを得ず

蓋し曹操、劉備の人物豈必らずしも秦皇、漢高、光武等に譲らんや、而して諸葛亮、周瑜、荀彧、荀攸、郭嘉、司馬懿、魯肅、呂蒙、關羽、典韋、張飛、趙雲の輩は、其の智勇辯力皆李斯、張良、白起、韓信、蕭何、馮異、鄧禹等に譲らざるかや、而かも竟に天下を統一するに至らざりしは何ぞや、嗚呼是れ英才彬々として輩出し、機鋒相磨し、才略相角せしが故ならずや

彼の劉備、孫權の如きは決して庸主に非ず、假令中原を争ふに足らずと雖も、尙は一

方に割據して險要を占め、兵を蓄へ武を練り、俾眼鷺目、苟くも賢の乘すべきあれば、則ち相憐かんとす、故に蜀、吳と争へは魏其の弊に乗じ、魏、蜀に向へは吳其の脇を窺ひ、蜀、魏を攻むれば吳其の後を斷せんす、此の間に立て不世出の英才あるも、將た何の策か能く施さんや、看よ、司馬氏か竟に天下を混一せるも、三國の諸豪多く、墜落し、人才殆んど滅せるに及んで始めて其の志を成せんとす。

三國時代の英雄、實に曹操を以て第一とす、其の資質頗る頼朝に似て而して機才權略は之に過ぐ、徳望と重厚の處迥かに徳川家康に及ばすと雖も、其の襟度文雅は之に過ぐ、區々の一士官より崛起して風雲を叱咤し、幾多の英才を包含して其の智勇辯力を逞ふせしめ、奇正合離の變を極めて竟に漢の天下を取り、中原を併有して蜀吳を一隅に擠せしが如き、雄略實に絶倫なり、特に陣中槊を横へて詩を賦するの豪傑と、寒夜兵書を耽讀して『孫子』を布衍し評註するの細心とあり、其の人品襟度想ふべきに非ずや

曹操一名は吉利、小字を阿瞞といふ、孟徳は其の字也、沛國譙郡に生る、其の先は西

漢の曹參に出づといふ、操の祖父曹騰は宦官なり、桓帝に仕へて中常侍大長秋と爲り、費亭侯に封せらる、宦官なるが故に子なく、嵩嵩は即ち夏侯氏の子にを養ふて嗣とす、嵩大尉となり、操を生む、少ふして機警、頗る權數あり、任俠放蕩にして行業を治めず、常に飛鷹走狗を好み、佚蕩度なし、叔父屢々嵩に告げて之を抑へしむ、操之を愛ふ、曾て途に叔父に會ひ、伴て面を傷り口を爛む、叔父怪み問ふ、操曰く「卒かに惡風に中る」と、叔父以て嵩に告ぐ、嵩驚愕して操を召す、操至れば口貌平生に異ならず、嵩曰く「叔父汝を中風といふ、何を違ふや」操曰く「初めより中風せず、但た愛を叔父に失へるが故に罔かるのみ」と、是より嵩頗る叔父を疑ひ、屢々告るも敢て信せず、操依て益々意を肆にすといふ

大尉橋玄人を知るに名あり、曹を覩て之を異なりとして曰く「吾れ天下の名士を見る、と多し、未だ君か如きものあらず、君能く自から持せよ」南陽の何顛操を見て嘆トて曰く「漢室將に亡んとす、天下を安んずるものは必らず此の人ならん」時に汝南の許都許都從兄從兄靖靖と共に高名あり、共に鄉黨の人物を駁論し、毎月其の品題を別にす、汝南

の俗に月旦の評あり、操往て郡に問て曰く、「我れは如何なる人ぞ」郡之を鄙として答へず、操乃ち之を劫かす、郡曰く、「卿は治世の能臣、亂世の英雄なり」と

二十歳の時孝廉に擧られ、洛陽の北部尉となる、禁を犯すものあれば豪強を避けず、後頓丘の令に遷り、又議郎に拜せらる

黄巾の賊起るに及び、騎都尉に拜せられ、潁川の賊を討ち、潁南の相國と爲る、姦邪を糾斷し、政教大に行はる、操また淫祠六百餘を壞つ、猛斷果決、能治と稱せらる、冀州刺史王芳、南陽の許攸、沛國の周旌等靈帝を廢して合肥侯を立てんとし、謀を操に告ぐ、操之を拒む、芳等竟に敗れたり

董卓朝權を執るや、操姓名を變じて間行して東に走り、數騎を從て故友成臯の呂伯奢に過ぎる、伯奢操を饗せんとして外に出づ、其の五子皆賓主の禮を供ふ、操食器の聲を聞て、謬て己れを殺すと爲し、夜伯奢等八人を殺して走る、既にして悟り、愴然として曰く、「我れ故友に負く」と、關を出で、中牟を過るとき、亭長に疑はれ、捕へられて縣邑の中に至る、縣の掾史其の操たるを知り、囚爲らば、天下將に亂れんとす、

雄俊を殺す可らずと、私かに之を釋す、操依て陳留に歸るを得、家財を散ち、五千人を得たり、初平元年操兵を起し、渤海太守袁紹、後將軍袁術、冀州牧韓馥、河内太守王匡、袁州刺史劉岱、豫州刺史孔伋、山陽太守袁遺、濟北の相鮪信等と兵を舉げて董卓を討ち、克たす、其の兵多く操に叛す、從ふもの僅かに五百餘人のみ、二年黒山の賊于毒、白繞、眭固等衆十餘萬を以て魏郡を畧す、勢太だ猖獗なり、東郡の本守王肱禦ぐと能はず、操乃ち兵を引て東郡に入り、白繞を濮陽に破る、袁紹由て操を表して東郡太守とし、東武陽を治せしむ、三年操頓丘に軍す、毒等東武陽を攻む、操兵を引きて西し、山に入て直ちに毒等が本營を攻む、毒等驚るる武陽を捨て、還る、操眭固を要撃し、又匈奴於夫羅の子を内黄に擊ち、皆大に之を破る

袁州刺史劉岱黄巾の餘賊と戦ふて敗死するや、陳宮操に説て曰く、「今速かに袁州を收めば、是れ霸王の業なり」と、州吏萬潛等鮪信と共に操を迎へて袁州の牧を領せしむ、操賊を討て之を降し、降卒三十餘萬、男女百餘萬口を得、其の精銳なるものを収め、號して「青州の兵」と爲す、袁術助けを公孫瓚に求め、劉備、單經、陶謙等と共に袁

紹を攻むるや、操紹と合擊して皆之を破れり、四年春操また袁術と匡亭、封丘、太壽に戰ふて之を破り、追ふて九江に至り、還て定陶下邳に軍し、徐州牧陶謙を撃て十餘城を降す、初め操の父嵩難を避けて瑯琊ロウヤに至り、陶謙に害せらる、故に操必らず父の仇を復せんとするなり、興平元年荀彧、程昱をして鄆城を守らしめ、復た謙を討て五城を拔き、地を略して東海に至り、還て郟を過ぎ、謙が將曹豹及び劉備を破り、竟に攻て襄賁を拔く、荀彧は荀淑の孫なり、才名あり、何願見て之を異とし、「王佐の才」と稱す、後に難を避けて宗族を率ひ去り、操が才略あるを聞て之に従ふ、操與に語て大に喜で曰く「是れ我が張子房あり」と

時に陳留の太守張邈、陳宮と叛して呂布を迎ふ、郡縣皆應ト、止た荀彧、程昱鄆城、東阿の二縣固守す、昱また范に抵り、其の令斬允に説て曰く「呂布今君が母弟妻子を捕へしと聞く、孝子豈傷まざらんや、然れども曹使君曹操を智略天授なり、君必らず范を固め、我れ東阿を守らば則ち田單が功立つべし、忠に違ひ惡に従て母子共に亡ぶるに孰與ぞや」と、允流涕して之を許し、竟に兵を勦して守り布に抗す、布鄆城を攻

めて拔くと能はず、西濮陽に屯す、操乃ち兵を引て還り、曰く「布已に一州を得しも、東平に據り、亢父、泰山の道を斷つとを知らず、我れ其の能く爲すとなきを知る」と、進んで濮陽を圍む、田氏なるもの反間を爲し、操を引きて城に入れ、俄かに其の門を焚く、布依て掩撃し、大に之を破る、布が將張遼操を得て其の操なるを知らず、問て曰く「曹賊何くにかある」操曰く「彼の黃馬に騎して走るもの是れなり」と、張遼乃ち操を捨て黃騎を退ふ、操依て纒かに免るゝを得たり、諸將皆恐怖の色あり、而して操談笑自若、促して攻具を造らしめ、また進んで布を攻むると百餘日、會々蝗蟲あり、乃ち各々引て去り、操は鄆城に入り、布は山陽に屯す、袁紹人をして操に説かしめ、由て連和せんとす、時に操新たに袁州を失ひ、軍食殆んど盡くると以て將キョウに之に従はんとす、程昱の諫めを聽きて之を止む、二年春鉅野キョウに戰ふて布の將薛蘭セツランを斬り、布を敗る、時に操陶謙の死せるを聞き、先づ徐州を取り、而して後還て布を亡ぼさんとす、荀彧諫めて曰く「昔し高祖關中を保ち、光武河内に據る、皆根本を固ふして以て天下を制し、進んでは以て敵に勝つに足り、退きては堅く守るに足る、故に假令困敗

あるも、竟に大業を成せり、將軍固と袁州を以て事を首めて山東の難を平ぐ、百姓悦服せざるなし、且つ河濟は天下の要地なり、今殘壞せるも猶ほ以て自から保つに足る、是れ豈將軍の關中、河内に非ずや、先づ定めざる可らず」と、操乃ち止む、既にして布また陳宮と兵萬餘人を將て來り戦ふ、時に操の兵出で麥を取り、城に在るもの千人に過ぎず、操乃ち婦人をして陣を守らしめ、兵を悉して布を拒ぐ、屯西に大堤あり、樹木幽深あり、布伏兵あるかと疑ひ、相語て曰く「曹操は詭計多きもの也、伏に陥るを勿れ」と、軍を引きて南十餘里に屯し、明日復た來り攻む、操兵を堤裏に隠し、其の半を外に出す、布益々進む、乃ち輕兵をして挑戰せしめ、既にして伏を發し、合擊して大に之を破る、布夜走り竟に劉備に依る、此の年十二月雍丘を攻めて張逸の三族を誅し、悉く袁州を定む

建安元年操出で、臨武平に陳す、袁術が置く所の丞相袁嗣降る、操將さに天子を迎へんとす、諸將或は疑ふものあり、山東未だ平定せざるを以て不可とす、荀彧曰く「昔晉の文公周の襄王を納て諸侯の盟主となり、漢高は義帝のために喪服して天下心を歸

せり、天子禁壓してより、將軍義兵を倡ふと雖も、但だ山東擾亂するがために未だ遠く赴くに違わらず、今や變興軫を施して東都榛蕪せり、義士本を存するの思ありて、兆民舊を感ずるの哀を懷く、此の時に乘じて天子を奉じて以て人望に従はば、是れ大願なり、至公を秉て以て天下を服せば、是れ大略なり、弘義を扶けて以て英俊を致さば、是れ大徳なり、四方逆節あるも何ぞ能く爲さんや」と、程昱も亦之を勸む、操乃ち曹洪をして兵を率ひて西天子を迎へしむ、然れども衛將軍董承、袁術が將長奴等險を拒げるがために、洪進むを得ず、六月操鎮東將軍に拜し、費亭侯に封せらる、七月楊奉、韓暹天子を擁して洛陽に歸り、奉は別に梁に屯す、操竟に洛陽に入り、京師を衛る、暹遁走す、天子操は節鉞を假し、尙書の事を録せしむ

時に洛陽の宮室殘壞するを以て、董昭等操に勸めて都を許に移さしむ、九月操竟に天子を奉じて許に移り、大將軍となり、武平侯に封せらる、是に於て朝權一に操が手にあり、人頻りに操に自立せんとを勸め、或は漢祚既に盡く、晋魏必らず興るものあらん、能く天下を安んぜんものは必らず曹姓ならんといひ、天子に説き、操に勸むるも

のあり、操笑て曰く「天道深遠なり、卿等饒舌する勿れ」と、蓋し操は天子の虚名を尙ばずして其の實力を得んと欲するなり。

操また策謀の士を求む、荀彧其の從子荀攸、郭嘉の兩人を薦む、操乃ち攸を徵して與に語り、大に悦んでいはく「公達攸のは非常の士なり、我れ之と計る、天下何をか憂へんや」と、郭嘉初め袁紹に見ゆ、紹が謀を好みて決斷なきを惡み、之を去る、操召見して與に時事を談す、悦んで曰く「我れをして大業を成さしむる者は必らず此の人ならん」嘉また出で、喜んで曰く「真に我が主を得たり」と、操竟に彧を侍中尙書令とし、攸を軍師とし、嘉を祭酒とす。

時に諸州荒亂相續き、糧穀に乏しく、諸軍皆周歲の計あり、故に饑饉は寇掠四出す、瓦解流離、敵無きに自から破滅するもの數ふ可らず、袁紹の河北に在るや、給を桑椹ソウジンに仰ぎ、袁術の江淮に在るや、給を蒲蘆ホロに取る、民人相食み、州里荒涼たり、操曰く「國を定むるの術は兵を強くし食を足すにあり、秦人農を重するに由て竟に天下を統一し、孝武屯田を以て西域を定む、是れ先代の良式なり」と、襄祗を屯田都尉とし、任

峻を典農中郎將とし、民を募て許下に屯田し、穀百餘萬斛を得たり、是に於て州郡に令して田官を置き、所在に穀を積む、倉庫充實す、故に操四方を征伐するも運糧の勞なく、竟に能く群雄を兼併せりといふ。

劉備敗走し、來て操に依る、程昱曰く「備は雄才あつて甚だ衆心を得、竟に人の下風に立たざるもの也、今唯伏の時に及んで早く之を圖るに如かず」郭嘉曰く「或は然らん、然れども公操操を義兵を起し、暴を除き誠を推し、信に仗て以て豪傑を招く、今備英雄の名ありて窮して公に歸す、然るに之を害せば、是れ賢を害するの名を取らざり、斯の如くんば智勇の士亦各々自から疑ひ去て別に其の主を求むべし、公誰と與に天下を定めんや」操亦曰く「今は方々に英雄を收むるの時なり、一人を殺して天下の心を失ふ可らず」と、厚く備を遇し、表して豫州牧とし、以て呂布を圖らしむ。

建安二年春操宛に至る、張繡降り、復た叛して操を敗る、操流矢に傷き、長子昂、弟の子安民等を失ふ、乃ち諸將を顧みて曰く「張繡の降れるとき、吾れ認て其の質子を取らず、以て茲に至る、然れども卿等之を觀よ、今より後復た敗れず」と、此の役に

典章操を護り、奮戦して死す。操其の子甥の死を悲ますして草の死を哭す。將士皆感
激してために死せんとを希ふ

袁紹曾て書を操に與ふ、書辭驕慢あり、操荀彧、郭嘉に謂て曰く「今紹を討たんとす
れども力敵せざるを奈何せん」對て曰く「劉項の敵せざるは公の知る所なり、漢祖止
だ智關羽に勝つ、故に羽強と雖も竟に禽にせらる、今紹に十敗あり、公に十勝あり、
紹は繁禮多儀にして、公は體自然に任す、是れ道勝つ也、紹は逆を以て動き、公は順
を以て率ふ、是れ義勝つ也、桓靈以來政治寛に失す、而して紹は寛を以て濟ひ、公は
猛を以て糾す、是れ治勝つ也、紹は外寛にして内忌み、任ずる所親戚多し、公は外簡
に内明、人を用ふると止た才に由る、是れ度勝つなり、紹は謀多くして決少く、公は
策を得れば直ちに行ふ、是れ謀勝つ也、紹は専ら名譽を収め、公は至誠を以て人を待
す、是れ徳勝つ也、紹は近を恤みて遠を忽せにし、公は慮り周からざるなし、是れ仁
勝つ也、紹は讒言を聽て惑亂し、公は浸潤行はれず、是れ明勝つ也、紹は是非混淆し、
公は法度嚴明なり、是れ文勝つ也、紹は好んで虚勢を爲して兵要を知らず、公は少を

以て衆に勝ち、兵を用ふると神の如し、是れ武勝つ也、紹強しと雖も能く爲すに足ら
ざるのみ」

楊彪紹と婚す、操憎みて獄に下す、孔融操に謂ていはく「楊公は四世の清徳楊震の後海
内の瞻仰する所たり、袁氏の故を以て罪を歸す可んや」操曰く「是れ國家の意のみ」
融曰く「假に成王をして召公を殺さしめば、周公知らずといふを得べけんや」操滿寵
をして獄を接せしむ、寵曰く「楊彪を考訊するに他の語なし、此の人今海内に名あり、
若し罪狀明白ならずんは必らず大に民望を失はん」操乃ち之を赦す

建安三年操また張繡を討つ、令を出して曰く「兵馬若し侵掠し、隴圍を亂るものあら
は之を斬らん」途にして操の馬驚き逸して麥圍を蹂躪す、操答を引きて自から刎んと
す、郭嘉曰く「古春秋の義、法は貴に加へず、公笑んぞ自刎するを得ん」操曰く「然
らば則ち髮を截て其の罰を明かにせん」と依て劔を以て髮を斷つ、賞罰益々嚴命なり、
既にして諸軍渴して飲を思ふ、然れども山林に水なく、兵士皆進むに懶し、操鞭を以
て指して曰く「前林に梅多し、早く其の子を取て啖ふべし」兵士等急に唇口液を發し

て渴を覺えず、其の機智斯の如し

五月劉表兵を遣して繡を助け、操の後を斷つ、操引て歸らんとす、繡の兵之に迫る、操進むと能はず、書と荀彧に與へて曰く「敵來て我れを追ふ、日に行くと數里と雖も、計るに安象に至て必らず繡を破らん」既にして退きて安象に到る、繡、袁の兵と合して險を扼し、操の前後を挟む、操乃ち夜險を鑿て地道を作り、悉く輜重を過ぎしめ、又奇兵を設く、天明に及んで敵衆を悉して來り追ふ、依て奇兵を發して大に之を破り、七月許に還る、或問て曰く「先きに敵の必らず破るゝを察せしは何ぞや」操曰く「敵我れを死地に陥れて戦ふ、之を以て勝つべきを知れるのみ」と、九月操進んで呂布を征し、十月彭城を屠り、進んで下邳を攻め、布と戦て大に之を破る、布乃ち固く守て出でず、時に操久しく兵を用ひて疲弊せるを以て、軍を收めて遠らんとす、荀攸、郭嘉曰く「呂布勇にして謀なく、陳宮智あつて通し、今布の氣未だ復せず、宮が謀未だ定まらざるに及んで急に之を拔くべし」と、依て沂泗の水を決して城に灌ぐ、宋憲、魏續等布と宮とを縛して降る、布操に見えて曰く「公の患ふる所は布に過ぎず、今已

に服す、若し布をして騎に將たらしめ、而して公歩に將たらしめ、天下定むるに足らざる也」操命じて布が縛を緩ふせしめんとす、劉備曰く「不可なり、公布が丁建陽布が最なり布之を殺して蓋卓に降る董太師卓に見すや」操領す、陳宮死せんと請ふ、操曰く「卿が老母を奈何せん」宮曰く「宮聞く、孝を以て天下を治むるものは人の親を害せず、仁政を天下に施すものは人の祀を絶たずと、老母妻子の存否は公に在て宮に非ず」と、操由て涙を揮て宮を斬り、又布及び張順を殺し、宮の母を召して終身之を養ひ、宮が女を嫁せしめ、其の家を撫視すると極めて厚し

張遼、臧覇は布の勇將なり、此の時皆操に降る、初め遼を擒にし至るとき、操見て呼で曰く「好漢惜むべし」遼切齒して曰く「惜むらくは濮陽の火を以て汝を焚殺せざりしとを」操自から其の縛を解きて曰く「遼曾て我れを害め、又我が一族を殺す、然れども、善惡は介するに足らざるのみ」と、之を關内侯に封ず、遼感激して是より屢々戰功を立つ

畢離曾て袁州別駕たり、張遼叛するるとき、離が母弟妻子を劫かす、操離にいはしめて

曰く「卿が老母彼に在り、宜しく去るべし」諸頓首して「一心なきを誓ふ、既にして逃
亡す、布破るゝ時、誰また生擒せらる、操曰く「人其の親に孝あり、豈亦君に忠なら
ざらんや」と、以て魯の相と爲す

建安四年春操射犬を圍みて洪尙を降し、還て敖倉に軍し、魏種を以て河内太守とし、
屬するに河北の事を以てす、初め操種を孝廉に擧ぐ、張逸叛するとき、操曰く「魏種
必らず我に負かト」と、種走ると聞くに及んで怒て曰く「種南越に走り、北胡に走る
に非ずんば我れ必らず許さず」と、射犬を降すに及んで種を擒にす、諸將皆種の殺さ
るゝを思ふ、而して操曰く「此の才惜むべし」と、許して之を用ふ、操の能く人才を用
ふると斯の如し

此の年袁紹兵を擧げて操を討つ、時に紹已に公孫瓚を亡ぼし、四州の地を兼併して悉
く黄河以北の地を領有し、勢ひ旺に、兵衆十餘萬を率ゐて出づ、諸將多くは敵す可ら
ずとす、操曰く「吾れ紹が人物を知悉す、其の志大にして智少く、色勵ふして膽薄し、
克れるを忌んで威少く、兵多くして分畫明かならず、將驕て政令一ならず、土地廣く、

糧食豊かなりと雖も、適を以て我が奉に供ふるに過さず」と、兵を分て之を拒ぐ

賈詡甚だ智謀あり、張繡を助けて屢々操の軍を破る、是に至て詡繡に勸めて操に降ら
しむ、繡以爲らく、今や曹弱く袁強し、且つ先きに操と仇ありと、詡曰く「曹公天子を
奉じて天下に令す、宜しく従ふべき一也、曹公衆弱し、我れを得ば必らず喜ばん、宜
しく従ふべき二也、夫れ霸王の志あらば、固より私怨を釋て、以て徳を四海に明かに
すべし、宜しく従ふべき三也」と、十一月繡竟に降る、十二月操官渡に軍す、袁術自
立すると能はずして青州に走らんとすと聞き、操劉備を遣はして術を要せしむ、程昱、
郭嘉曰く「劉備縦すべからず」操悔て備を追へども及ばず

初め董承天子の血詔を受け、劉備等と謀て操を滅さんとす、一日操備を招き、青梅を
以て宴を開き、從容として備にいふて曰く「今天下の英雄は止た使君しやくん備ひんと操とのみ、
袁本初しやくか徒は碌々數ふるに足らず」と、備食するに方て箸を落す、會々雷鳴あり、

操天を睨す、備耳を蔽ふて曰く「聖人いふ、迅雷風烈必らず變す、誠に故あり」と、
操の命を受けて袁術を要するに及び、竟に徐州刺史車胄を殺し、袁紹と連和す、操の

長史劉岱之を攻めて勝たす、備曰く「汝が數百人來るも何をか爲さん、但た曹公自から來らば知る可らざるのみ」

衛覬書を荀彧に贈て曰く「關中の流民來歸するもの生業なく、諸將競ひ招きて部曲とす、後必らず愛ひを貽さん、夫れ鹽は國の大寶なり、舊の如く使者を置きて其の賣買を監せしめ、其の値を以て益々犂牛を買ふべし、若し歸民わらは以て之に供給せん、乃ち民争ふて還らん、又司隸を留めて關中を治め、以て之が主たらしむべし、乃ち諸將の勢日に削られ、官民日に盛ならん、是れ本を強ふし敵を弱くするの利なり」と、或以て操に勧め、覬をして關中を鎮撫せしむ、關中是より服従すといふ

建安五年一月操董承等が謀を鞠知し、其の三族を夷す、更に兵を進めて劉備を撃んとす、諸將皆曰く「公と天下を争ふものは袁紹也、今紹の來り攻むるを捨て、東す、紹若し公の後に乘せば如何」、操曰く「劉備は人傑なり、今撃たずんば必らず後患を爲さん、郭嘉曰く「紹性通くして疑ひ多し、來ると必らず速かからず、備今新たに起て衆心未だ附かず、急に之を撃つべし」と、竟に兵を東に進む、田豐之を聞きて紹に勧め

て曰く「今や曹劉と兵を結ぶ、公乗じて其後を襲はし、一戰して事を定むべし」紹辭するに子の病あるを以てす、豐杖を以て地を叩て曰く「嗟乎嬰兒の病のために得がたさ、好機會を失す、已ぬる哉」

操竟に備を破り、進んで下邳を抜き備の妻子及び羽を擒にす、備青州に奔て紹に投ず、二月に至て紹郭圖、淳于瓊、顔良を遣はし、東郡太守劉延を白馬に攻め、紹亦た兵を引て黎陽に至る、四月操北延を救ふ、荀攸曰く「今兵少くして敵せず、其の兵を分たば則ち可也、公若し延津に到て將に兵を渡して其の後に向ふが如くにせば、紹必らず西して之に應せん、此の時に乘じて輕騎白馬を襲ひ、其の備へざるを掩撃せば、顔良擒にすべきのみ」と、操之に従ふ、紹果して兵を分て西す、操乃ち兼行して白馬に赴き、張遼、關羽を先鋒として大に顔良の兵を破る、羽進んで良を斬り、竟に白馬の圍を解き、其の民を徙して西す、是に於て紹河を渡りて操を追ふ、祖授嘆つて曰く「上は其の志を盈て、下は其の功を務む、悠悠たる黄河、我れ其れ渡らん乎」紹が軍延津の南に至るとき、操止つて南阪の下に陣し、壘に登て之を望ましむ、曰く「敵五六百は

かり也」暫くして曰く「騎稍々多し、歩兵は擧て數ふ可らず」操は曰く「復たいふを要せず」と、騎をして鞍を解き馬を放たしむ、此の時白馬の輜重途にあり、諸將以爲らく、敵騎多し、還て營を保つに如かずと、荀攸曰く「是れ止た敵に餌しむる所以のみ、何ぞ去るべけんや」紹が將文醜劉備が將五六千騎と踏襲して至る、諸將また馬に上らんとす、操曰く「未だし」暫くして敵騎多く至り、或は分れて輜重を追ふ、操曰く「可なり」と、乃ち馬に上る、時に騎六百に満たず、竟に馳突して大に敵を破り、醜を斬る、良と醜とは紹が勇將なり、是に仍て操の軍威大に振ふ、關羽奔りて備に投ず、八月紹營を武陽に作る、東西數十里、操と相持す、時に操糧少きを以て許に還らんとす、荀彧書を贈て諫めて曰く「是れ天下の大機、斷じて勝敗を決せざる可らず」と、乃ち止む、時に紹が運穀の車數千乘至る、操荀攸が計を用ひて盡く之を焚く、操また配下の送糧者を慰して曰く「今より十五日以内に汝がために袁紹を破り、また汝等を勞せしめず」と、十月紹の將淳于瓊等五人糧を運して至る、操また兵を發して之を撃ち、于瓊を斬る、初め許攸紹の謀臣たり、財を貪はりて飽くことを知らず、竟に來りて操に

投ず、操跣足出で迎へ、掌を撫して笑て曰く「卿遠く來る、我が事ならん」已に入て坐するに及び、攸問て曰く「袁氏の軍燦んなり、何を以て之を待たん、抑も公今幾何の糧食かある」操曰く「尙は歳を支ふべし」攸曰く「否、更に實を告げよ」操曰く「半歳を支ふるに足る」攸色然として曰く「公袁を破るを欲せざる乎、何を胸襟を開きて相計らざる」操哄然として曰く「姑らく藏るのみ、其の實は二月を支ふるに足らず、知らず今何の計にか出でん」攸曰く「公孤軍獨り守りて外援なし、而して糧食盡んとす、是れ危急の日なり、今袁氏の輜重二萬餘乘、故市烏巢の屯にありて備へなし、今輕兵を以て不意に襲ふて之を燔かば、三日を出でずして紹破れん」操大に喜び精兵を簡拔し、袁が軍の旗幟を用ひ、夜密かに間道より向はしむ、沿道にて問ふものあれば「袁公曹操が後軍を抄掠せんことを恐れて備へしむるのみ」と答へしむ、これを以て聞くもの恠ます、已に至るや直ちに屯を圍みて火を放ち、大に敗りて悉く其の糧穀寶貨を焚き、督將を斬り、又士卒千餘人を屠りて其の鼻を取り、牛馬の唇舌を割て以て紹の軍に示す、紹が軍大に恐る、初め紹操の兵瓊を撃つと聞き、長子譚に謂て曰く「彼瓊

等を攻めば、我れは乃ち操が營を抜かん、彼れ歸する所なけん」と、張郃、高覽をして曹洪を攻めしむ、郃等瓊が破る、を聞て操に降る、是に於て紹が衆大に潰へ、紹僅かに八百騎を以て逃る、操河を渡て之を追ひ、悉く其の輜重、圖書、珍寶を收じ、初め孫堅操が紹と相持するを聞き、謀て許を襲はんとす、俄かに死して事果さず、時に汝南の降賊劉辟等叛して紹に應ず、許下を略して曹仁に破らる、諸將また私かに紹に内應せんとするものあり、操是に至て紹が書を收め、中に許下及び軍人中の書を得れば盡く之を焚く、曰く「紹が盛なるに當ては我れ猶は自から保ち得ざらんとす、況んや衆人かや」と、軍情爲めに安し

夫れ操が官渡に於て袁紹を破るや、猶は織田信長桶狭間に於て今川義元を獲たるが如き也、意外の奇捷、皆天下の耳目を聳動するに足れり、操此の勢に乗じて進み、喩へば一萬千里ならんのみ

袁紹敗るや、人あり、田豐に謂て曰く「君の前言果して中る、君是より重用せられん」豐慷慨として曰く「袁公寬に似て實は忍む、我が忠を亮せず、若し勝たば喜んで、

猶は赦さん、今戰敗れて心恚る、我れ其れ免れざらん乎」逢紀また曉して「豐敗聞を

聞きて手を拍て笑ふ」といふ、紹竟に豐を殺す、紹先きには顔良、文醜の二將を斬られ、張郃等も失ひ、大敗の後また智士を殺す、敗滅豈腫を廻すに及ばんや

建安六年四月操兵を河上に出し、紹が倉定の軍を討て之を破る、九月許に歸り、更に劉備を汝南に討て之を走らす、備竟に逃れて劉表に依る、初め操孫策の死を聞き、喪に乗して之を討んとす、張勳諫めて曰く「人の喪に乗する既に非義なり、若し戰ふて勝たずんば永く怨を結び仇を爲さん、如かず依て之を厚せんには」と、操乃ち策が弟孫權を表して討虜將軍と爲す

建安七年一月操譙に軍す、令して曰く「我れ天下のために暴亂を除く、舊士人死民亡殆んど盡き、國中終日行けども譙れる所を見ず、愴惻に堪んや、夫れ兵を起して以來、將士の絶て後なきものは、其の親戚をして繼がしめ、田土を授け、官より耕牛を給し、學師を置て以て之を教へん、存するもの、ためには廟を立て、其の先人を視せしめん」と、竟に凌儀に至て睢陽の渠を治し、進んで官渡に陣す、蓋し大舉して紹を擊ん

とする也

夫れ紹は始め操と共に大將軍何進の門下たりしもの也、而して紹は其の祖漢に仕へて四世五公たり、操は乃ち賤むべき宦者の孫のみ、紹が門閥の高き遙かに操が上にありといふべし、紹が志豈操を侮蔑せざらんや、況んや紹河北を掩有して領土の廣きと當時に冠たりしかや、紹又曾て操と共に兵を起せしとき、從容として操に問て曰く「若し諸將と連合して功あらずんば則ち何の方面にか據るべき」操曰く「足下の意如何」紹曰く「我れ南河北に據り、北燕代を阻し、戎狄の衆を兼て南下して天下を争はば、庶くは以て志を成さん」操曰く「我れは天下の智力に任ず、道を以て之を禦せば、可ならざるぞなし」と、紹河北を兼有し、燕代を収めしと前官の如し、而して南下して以て操と争ふ、其の心豈往昔を顧みて自から相較する所なからんや、然り而して官渡の戦に大敗し、殆んど操をして前首に誇らしめんとす、紹たるもの何を心中自から煩悶せざらんや、紹慚憤して病を得、吐血すといふは固より其の所のみ

此の年五月紹竟に死す、其の三子譚、熙、尚といふ、衆譚が長せるを以て之を立てん

とす、審配獨り紹が命を矯めて尚を立て、是に於て譚、尚と相争ふ、嗚呼、敗餘に斯の如き失態あり、操が漁夫となつて鱗蚌を獲んと知るべき也

建安八年四月操進んで鄴に入り、五月許に歸る、八月劉表を征して西平に軍す、操の鄴を去るや、譚と尚と互ひに冀州を争ふ、譚破れ、走て平原を保つ、尚之を攻むると急あり、譚乃ち辛毗を遣はして操に降り、救を求む、諸將皆曰く「劉表強し、先づ之を討て荆州を定むべし、譚尚の如きは憂ふるに足らざるのみ」荀攸曰く「天下有事の日、劉表坐ながら江漢の間を保つのみ、其の四方の志なきや知るべし、袁氏四州の地に據て帶甲數十萬を有す、若し兄弟和睦せば、是れ天下の大患なり、今其の亂に乗つて之を取らば、天下定まらん、好機失す可からず」操も亦曰く「我れ呂布を攻むる時劉表寇せず、官渡の役にも袁紹を救はず、是れ自から守る人物のみ、宜しく後に圖るべし、譚尚狡猾なり、亂に乗じて之を謀らん、假令譚詐を挟みて永く手を束ねざるも、我れ尚を破らば其の地を收むべし、利も亦多し」と、竟に譚の請を許し、軍を引て歸り、十月更に北黎陽に抵り、子整のために譚と婚を結ぶ、尚之を聞て平原を捨て、鄴

に還る

建安九年一月操河を渡り、淇水を遏めて白溝に入れ、以て糧運を便にす、二月尙また譚を攻め、蘇由、審配をして鄴を守らしむ、操進んで淇水に至るとき、由降る、依て鄴を圍み、土山地道を作る、五月土山地道を毀ち、漳水を決して鄴城に灌ぐ、城中餓死するもの過半、七月尙還て鄴を救ふ、諸將避けて之を城に入らしめんとす、操以爲らく、尙若し大道より來らば之を避くべし、若し西山より來らば之を擒にすべしと、候兵をして之を見せしむ、尙西山より來り、已に邯鄲にあり、操大に悦び、諸將を會して曰く「我れ已に冀州を得たり、卿等之を知るや」皆曰く「知らず」操笑て曰く「卿等方々に之を見るべし」と、尙夜來り襲ふに及んで逆戦して之を敗り、竟に其の營を圍む、尙夜逃れて祁山を保ち、また中山に走る、八月鄴城竟に破れ、審配生擒せらる、操鄴に入り紹が墓を祀て之を哭し、流涕して其の妻を慰勞し、其の家人資物を還し、物を與ふ、九月令して河北今年の租を免じ、又豪強兼併の法を重くす、百姓悦服す、此の時に方て譚甘陵、安平、渤海等を略取し、又尙を中山に攻めて故安に走らし、竟

に其の衆を併す、操書を譚に與へて其の約に違ふを責め、婚を絶ち、女を還して後に軍を進む、譚走りて南皮を保す

建安十年一月操譚を南皮に攻めて之を破り、譚を斬り、其の妻子を誅す、是に至て冀州悉く平定す

此の月袁熙が將焦觸、張南等叛して熙尙を攻め、熙と尙と共に三郡烏丸に走る、觸等操に降る、操潞河を渡りて烏丸を討つ、烏丸走りて塞を出づ、初め烏丸亂に乗じて幽州を破り、漢民を略有して十餘萬戸を合す、袁紹皆其の酋長を立て、單于とし、家人の子を己れが女として、以て之に妻はす、遼西の單于蹋頓尤も強し、故に熙、尙等之に歸し、數を塞に入て害を爲す、操將士に之を征んとし、渠を堀て噉陀より派水に入れ、平虜渠と名け、又洵河口より堀て潞河に入れ、泉州渠と名けて以て海に通す、時に建安十一年なり

建安十二年二月操鄴に還り、諸將の戦功を録す、既にして北三郡烏丸を征せんとす、諸將皆曰く「袁尙は一亡虜のみ、夷虜は貪て親あし、何ぞ能く尙が用を爲さんや、若

し深く入て之を征せば、劉備必らず劉表に説て以て許を襲はん、變測る可らざるなり」
 獨り郭嘉曰く「表必らず備を用ふる能はず」と、操を勸めて往かしむ、蓋し操は北夷
 に向て其の兵威を示し、永く後顧の憂を絶ち、また益々河北を威服するの意なるべし、
 五月進んで無終に至る、七月大水あり、傍海の道通せず、田疇を嚮導とし盧龍塞に出
 づ、塞外道絶て通せず、乃ち山を墮り谷を填むると五百餘里、白檀、平岡を經、鮮卑
 庭を涉り、東柳城に向ふ、未だ至らざると二百里、尙、熙、陽、遼西單于樓班、右
 北平王能臣挺之等數萬騎を率ひて遊戰ふ、八月操白狼山に登る、虜勢頗ふる盛にし
 て而して操の車重後にあり、甲を破るもの甚だ少し、左右懼色あり、操高きの上で虜
 陣の整はざるを見、兵を縱て之を撃つ、張遼を先鋒とす、虜衆大に破れ、陽、陽、陽及び名
 王以下斬らるゝもの多し、胡漢降るもの二十餘萬口、遼東單于速僕丸及び遼西北平の
 諸豪、其の人種を捨て、尙熙等と遼東に走る、衆尙は數千騎あり、初め遼東太守孫康
 遣さる待みて服せず、操烏丸を破るに及んで、或る人操に説きて之を征せしむ、曰く
 「以て尙兄弟を擒にすべしなり」操笑て曰く「我れ當るに康をして尙熙が首を送らしむ

べし、兵を動かすを要せず」と、九月軍を引て柳城より還る、康果して尙、熙及び速
 僕丸等を斬て首を操に贈る、諸將問て曰く「公還て而して康今尙熙等の首を送るは尙
 ぞや」操曰く「彼れ固より尙等を恐る、我れ急にせば則ち尙等と力を合せん、之を緩
 にせば則ち自から相圖らん、其の勢然るのみ」と、十一月易水に至る、代郡烏丸行單
 于普富盧、土郡烏丸行單于那樓其の名王を將て來賓す、操の威單于に振へるや知るべ
 し、是に至て殆ど河北一帶悉く操の有に歸し、操の勢ひ天下を壓す、

此の年郭嘉卒す、操に仕へて計を爲すと十一年、卒するに臨み、書を操に贈て孫康
 を緩ふせしめ、以て尙熙を殺すといふ

建安十三年一月操鄴に還り、玄武池を造て以て舟師を習練せしむ、六月丞相に任せら
 る、七月南劉表を撃つ、八月表卒し、其の子琮代て襄陽に屯し、劉備樊に屯す、九月
 操新野に到るに及んで琮竟に降り、備夏口に走る、操進んで江陵に至り、竟に荊州を
 定め、表が將文聘を以て江夏の太守とし、又荊州の名士韓嵩、鄧義等を擧用す、
 操勢ひに乗じ、江陵より下つて孫權を討んとし、軍八十萬、聲言して百萬と號し、權

に書と與へて曰く「當るに子と共に江東に會獵せん」と、江東の諸將震動す、操竟に
 進んで赤壁に戰ひ、大に破れ、軍を引きて華容道より歩して歸る、泥濘途通せず、適
 々大風あり、操乃ち羸兵を悉し、艸を負ふて之を填めしめ、依て過ぐるを得たり、然
 れども羸兵人馬に踏籍せられ、泥中に陥て死するもの甚だ多し、軍已に出づるに及び、
 操大に喜ぶ、諸將其の故を問ふ、操曰く「劉備は我が儔なり、但だ討少しく、晚し、先
 きに早く火を放たしめば、我徒殆んを雙類なけん」と、既にして備火を放てども及ば
 ず、然れども備大に勝て荆州江南の諸郡を有せり

操の丞相に任せらるゝや、崔琰を西曹掾とし、毛玠を東曹掾とし、司馬朗を主簿とし、
 朗の弟懿を文學掾とす、琰と玠と並びに選舉官吏選用を典る、舉ぐる所皆清正の士なり、
 故に士廉節を以て相勵まし、吏上は潔く、俗下に移る、操嘆して曰く「人を用ゆる斯
 の如く、人々自から治めしめば、我れ復た何をか爲さんや」と、司馬懿聰達にして夫
 略あり、人物最も高大なり、琰曾て朗にいふて曰く「子が弟懿を、聰亮明允、剛斷英特、
 子が及ぶ所に非ず」と、操聞て之を辟す、懿辭するに風痹を以てす、操怒て之を収め

んとす、懿懼れて職に就く、後に荀攸等死するに及び、懿専ら規畫參謀し、最も殊功
 あり

建安十四年二月操譙に至り、輕舟を作て水軍を治し、七月滬より淮に出で、合淝に軍
 す、又揚州の郡縣に令じて芍陂の長田を開き、十二月譙に還る

建安十五年操令を下して人才を求む、此の年冬銅雀臺を作る

建安十六年二月操其の子丕を以て丞相の副とす、太原の南陽等大陵を以て叛す、操乃
 ち夏侯淵、徐晃をして之を破らしむ、時に張魯漢中に據る、三月操鍾繇を遣して之を
 討しめ、淵等に河東に出で、繇を會せしむ、關中の諸將繇を疑ふて之を襲はんとす、
 馬超、竟に韓遂等十部と皆叛して潼關に據る、曹仁を遣はして之に當らしめ、令して
 曰く「關西の兵精悍なり、諸將堅守して敢て戰ふ勿れ」と、七月丕を留めて鄴を守ら
 しめ、自から西征し、超等と關を夾んで陣す、操潛かに徐晃、朱靈をして夜蒲阪津を
 渡り河西に據らしめ、自から鄴關より渡る、未だ渡らざるに超驍騎を發して掩ひ至る、
 操尙ほ胡牀に踞して動かず、張郃等事急なるを見て操を引て舟に上す、河水急に舟流

る、と四五里、敵騎追て之を射る、矢下ると雨の如し、校尉丁斐因て牛馬を放ち、以て敵に餌す、敵兵争ふて之を奪ふ、操依て渡るとを得たり、諸將操の所在を知らずして皆惶懼す、既にして操至るに及び、悲喜して或は泣くものあり、操大笑して曰く、「今日殆んど小兒に困じめらる」と、河に沿ふて甬道を造る、敵退て渭日は退くに及び、操浮橋を築き、渭南に營す、敵夜襲するとき、伏を設けて之を破り、九月進んで渭を渡る、超等數々戰を挑めども應せず、乃ち和を求め、河西の地を割き、且つ質子を送らんと請ふ、操買詔が謀を用ひ、偽て之を許す、韓遂操と相見んと請ふ、蓋し舊交のれはなかり、操馬を交へて遂と語り時を移す、然れども談軍事に及はず、止た京師の故舊を説くのみ、手を拍て觀笑して相別る、超等遂に問ふて曰く、「語る所何事ぞや」遂曰く、「他事なし」と、然れども超等はより心疑ふ、時に敵衆操を見んとし、操再び遂と相會するとき、秦胡の兵超等が衆なり前後重沓して操を見る、操馬上に笑て曰く、「曹公亦人なり、四眼兩口あるに非ず、止た智多きのみ」と、既にして操又遂に書と與へ、故らに點置する所多く、恰かも遂が故らに改定せるもの、如くす、超等見て彌々遂を疑ふ、衆心是より一致せず、是に於て操日を刻して會戰し、大に之を破る、超等涼州に走り、楊秋安定に奔る、十月操長安より楊秋を征して安定を定む、是に於て關中悉く平く、

諸將操に問て曰く、「初め超等潼關を守り、渭北の道斷絶する時、河東より馮翊を討たず、反て潼關を守り、後に北に渡れるは何ぞや」操曰く、「敵潼關を守るに方て我れ河東に入らば、敵必らず引きて諸津を守らん、乃ち西河未だ渡るべからず、我れ故に潼關に向へり、敵果して衆を悉して南を守り、西河の備虛なり、故に二將徐晃朱靈容易に河西を取るを得たり、既に河西を得て而して後我れ河を渡る、敵我れと河西を争ふ能はざる所以は、二將の兵蒲阪津にあるを以てのみ、我れ亦軍を聯ね柵を樹て甬道とし、以て弱さを示し、敵挑戰すれども應せず、是れ敵を驕らしめんためのみ、故に敵肯て營壘を築かず、竟に地を割んとを求むるに至る、我れ之を許せるは敵をして安んじて備へざらしめんがためのみ、而して我れ士卒の力を蓄へ、一旦之を撃てり、所謂疾雷耳を蔽ふに及ばざるもの、兵の變化一道に非ざる也」と、始め敵の一部到る毎に操喜

色あり、後に諸將また其の故を問ふ、操曰く「關中は途遠し、敵若し險阻に據らば、之を征するも一二年を費さん、今超等皆自から來集す、其の兵多しと雖も衆心一致せず、軍に主なし、一舉して滅すべし、是れ豈功を成じ易きものあらすや、我れ之を以て喜べるのみ」と、十二月安定より還り、夏侯淵を留めて長安に屯せしむ

建安十七年一月操鄴に遷る、夏侯淵に命じて馬超等の餘衆樂興等を討平せしむ、十月操自から軍を率ひて孫權を撃つ、此年荀彧卒す十五年

建安十八年一月操進んで濡須口に軍す、兵四十萬と號す、孫權兵七萬を提げて之を禦ぎ、相持すると月餘、操吳の舟楫器械の森嚴にして、軍伍陣營の整肅なるを見、歎上て曰く「子を生まば當さに孫仲謀字の如くなるべし、劉景升字が兒子の如きは豚犬のみ」と、兵を率ひて歸る、此の年五月操立て魏公と爲り、九錫を加ふ、七月始め魏の宗廟社稷を立て、其の第三女を納れて貴人とす、九月金虎臺を造り、渠を堀り潼水を引きて白溝に入れ、以て河に通す

建安十九年一月馬超夏侯淵に攻められて漢中に奔り、後に劉備に從ふ韓遂金城に徙り、氏王千萬

が部に入る、三月操位を諸侯王の上に進め、九月また孫權を撃つ、功なし、十二月漢の皇后伏氏及び二皇子を殺し、十二月孟津に至る、此の年涼州を討平す、荀攸卒す十八年、攸智謀に富み、常に荀彧と共に操の帷幄に參す、操常に曰く「荀文若字の如きが善を進むるや進めざれば休まず、公達字の如きが惡を去るや去らずんば止まず」又曰く「二荀が人を論する、久ふして益を信あり、我れ世を終るまで忘れず」

建安二十年一月操の第三女皇后と爲る、三月操漢中の張魯を征して陳倉に據り、氏王寶茂等を破り、韓遂を獲、七月陽平に入り、魯の兵と陽平關に戰ふ、敵城を築くとす里、堅く守て屈せず、操乃ち軍を返し、更に敵兵の守備解散するを俟て返撃して大に之を敗る、魯竟に潰て巴中に奔り、操南鄭に入て悉く魯の府庫珍寶を收む、時に軍武都山より行くと千里、險阻を升降して將士皆疲る、操乃ち大に饗す、故に將士皆其の勞を忘るといふ、茲に至て巴漢皆降り、操殆んど天下を掩有し、止た孫權江東に據り、劉備荊州益州に據るのみ漢中に據り、劉備に歸す

此の年十一月張魯巴中より來り降る、時に劉備新たに劉璋を襲ふて益州を取れり、益

州は即ち漢中の隣にあり、操若し勢に乗じて備を撃たば、備或は擒にすべし、然れども操の才略茲に出でざりしは何ぞや、愚軍已に疲勞して用ふ可らざる手、「劉備諸葛亮と抗争せば、孫權に其の背を蹙まるゝの恐ありし乎、然りと雖も當時の傑物たりし同馬懿の如きは、此の際備を討て益州を取り、又荊州を復せんとを勸めたるが如し、現に懿は操に言て曰く「劉備昨力を以て劉璋を虜にす、蜀人未だ附かずして而して遠く江陵を争ふ孫權と荊州を争へる也此の機失ふ可らざるなり、今漢中に勝つて益州震動す、兵を進めて之に臨まば敵勢必らず瓦解せん、聖人は時に違はず、亦時を失ふ可らざるなり」操曰く「人は足るとなきに苦む、我れ已に瀧を得て復た蜀を望まんや」劉曄も亦曰く「劉備は人傑なれども度あつて遲し、蜀を得ると日淺くして蜀人未だ附かざる也、今漢中を破て蜀人震悚す、其の勢自から傾かん、之を壓すれば必らず勝らん、若し之を緩にせば、諸葛亮國を治むるに長上、關羽、張飛、勇三軍に冠たり、蜀の民既に定まり、險要を扼守せば、之を犯すも得べけんや」と、操從はず、居ると七日、蜀の降人いふ、蜀中一日驚くこと十數度、守將之を斬るも安んずる能はずと、操曄に問て曰く「今蜀擊つべきや否や」曄曰く「今日に少し定まる、擊つ可らざる也」と、操依て夏侯淵、張郃を留めて漢中を守らしめて還る、嗚呼此の間必らず事情あるべし

此の年八月孫權兵十萬を以て合淝を圍む、張遼、李典等擊て之を破る、始め操の張魯を征するや、孫權其の隙に乗せんとを慮かり、書を函中に封じて合淝の護軍薛蘭に與へ、函上に題して曰く「敵兵至らば之を開き視よ」と、操の大兵至るに及ひて佛之を視るに、書して曰く「孫權若し至らば、張李二將軍は出戰すべし、樂將軍樂進は城を守て與に戰ふと勿れ」と、諸將或は乘寡敵せざるを以て疑懼す、張遼夜敢從の士を募り、味爽敵壘を衝き、直ちに孫權の麾下に突入して大に之を破る

建安二十一年二月操鄴に還り、五月魯を進めて魏王と爲る、時に匈奴王來朝す、十一月孫權を討て譙に至る

建安二十二年一月操居巢に陣し、二月江西カクシ縣に屯す、時に孫權濡須口にあり、三月操兵を引きて還り、曹仁、張遼等之居巢に屯せしむ

建安二十三年七月操西劉備を討んとし、九月長安に抵る、十月操其の子丕を立て、王

嗣とす、初め操太子植の文才あるを愛して之を立てんとす、崔琰曰く、「春秋の義、子
 を立つるに長を以てず、今五官將正の仁孝聰明なり、宜しく正統を嗣ぐべし、琰死を
 以て之を守らん」と、丕或は廢せられんことを恐れ、賈詡に問ふに自から固ふするの計
 を以てず、詡曰く、「願くは徳を養ふを以て子道に違ふと勿れ」と、他日操人を屏けて
 詡に問ふ、詡黙して答へず、操其の故を問ふ、詡曰く、「頃者思ふ所あり、故に答へざ
 るのみ」操曰く、「何をか思ふ」詡曰く、「袁本初紹劉景升喪父子を思ふのみ」操大に笑
 ひ、竟に丕を立てり

建安二十四年劉備兵を出して漢中に入り、陽平に戦ふて夏侯淵を斬る、三月操長安よ
 り斜谷に出で、以て漢中に臨み、竟に陽平に至る、備曰く、「曹公來るも何をか爲さんと
 我れ必ず漢川を有つべし」と、乘を飲めて險に拒ぎ、竟に鋒を交へず、操軍を遠へさ
 んと欲し、令を出して曰く「雜助」と、將士其の意を知らず、主簿楊修乃ち自から嚴
 裝す、人々驚きて故を問ふ、修曰く「雜助惜ひべしと雖も之を食ふに味ひなし、以て
 漢中に比するのみ、以て王の遷るを知れり」と、五月操兵を引て長安に遷る、是に於

て漢中竟に蜀に屬す、七月夫人卞氏を王后とす、關羽自から衆を率ひて曹仁を樊に攻
 む、操子禁、龐徳を遣じ之を救はしむ、二人樊の北に屯す、八月大に霖雨して漢水溢
 れ禁等七軍皆水中に立つ、龐徳擒にせられ、卞せすして羽に殺され、禁等窮迫して竟
 に降る、許より以南往々羽に應じ、羽の威華夏に震ふ、操徳が死を聞き、流涕して曰
 く「我れ子禁を知ると卅年、何を思はん危に臨んで反て龐徳に及はざらんとは」と、
 操竟に許の都を徙して以て羽の銳鋒を避けんとす、司馬懿、蔣濟曰く「劉備と孫權と
 外親みて内疎なり、關羽が志を得るは必らず權の願はざる所なり、人を遣はし權を勤
 めて其の後を躡せしめ、江南を割て以て權を封せんことを許すべし、乃ち樊の圍み自か
 ら解けん」操之に従ふ、十月軍を引きて洛陽に歸り、又南羽を征す、未だ至らざるに
 徐晃羽を破て樊の圍みを解く、羽竟に破れて吳に獲らる

建安二十五年一月操洛陽に歸る、孫權果して羽を斬て其の首を送る、操乃ち權を表し
 て驃騎將軍とし、荊州牧を領せしむ、權使を遣して入貢し、操に臣と稱す、操之を外
 に示して曰く「此の兒孫權我れを爐火の上に躡せしめんとする乎」陳群等皆曰く「漢

祚已に盡く、公宜しく帝位に上るべし、操曰く「若し天命我れにあらば我れ當るに周の文王と爲るべきのみ」と、一月庚子操終に薨す、年六十六、
 黄巾の賊起てより茲に至て三十七年、操兵を起してより三十一年、南戰北伐、竟に一官官の子より起て海内の大半を討平す、
 操度量快濶にして最も能く人を用ゐ、必らずしも其の閥閥を問はず、私怨を省みず、又其の短を論せず、各々智を盡し力を効さしむ、故に智謀の將には、荀彧、荀攸、賈詡、毛玠、郭嘉、程昱、司馬懿等あり、勇士には許褚、典韋、夏侯淵、張郃、李典、臧霸、張遼、樂進、于禁、徐晃、龐德等あり、文武の人才多きと實に當時に冠たり、而かも支那の本土を掩有し、國大に兵強し、蜀、吳鼎峙すといふと雖も其の實力到底相較せざるなり、

操最も兵法を善くす、其の軍を行るや皆孫吳の兵法に基き、奇を設け正を出し、敵をして測ると能はざらしむ、其の變化最も妙を極む、敵と對陣するに意思安固にして戦ひを好まざるが如し、然れども機を決し勝に乗するに方つては、氣勢充盈し、英風爽

颯たり、故に戦ふ毎に多く勝つ、曾て自から兵書十餘萬言を作り、孫子を註す、其の説皆見るべし、

操また文雅あり、軍に在ると三十餘年、未だ曾て手に書を捨てしことなし、晝は則ち武策を講ず、夜は則ち經傳を思ふ、高に登り、好景に逢へば必らず賦す、曾て赤壁の役に船頭戈を横へて古詩を作る、其の態度思ふべし、新詩を得れば之を管絃に和し、皆樂章を成すといふ、又書を善くす、當時安平の崔瑗、瑗の子寔、弘農の張芝、芝の弟昶、並びに艸書に善し、操實に之に亞ぐ、桓譚、蔡邕音樂に善く、馮翊、山子道、王九眞、郭凱等圍碁に巧なり、而して操皆之を能を同ふす、又養性の法を好み、方藥を解き、方術の士を招く、故に廬江の左慈、譙郡の華陀、甘陵の甘始、陽城の郝倫等皆至る、操また才力人に絶し、手から飛禽を射、猛獸を擒にす、曾て南皮に狩し、一日に雉を射ると六十三頭、また宮城を造營し、器械を繕制するに皆法則を爲り、其の意を盡す、其の多藝想ふべし、
 操資性儉素にして華麗を好まず、漢の末王公多くは王服を着し、幅巾を以て雅とし、

袁紹、崔豹が徒將師たるも亦皆練帛を着く、獨り操古皮弁に擬し、練帛を裁て以て帽とし、簡易に合し、止た色を以て貴賤を別つのみ、後宮の衣錦縫せず、侍御の履二采ならず、帷張屏風破るれば則ち補綴し、茵褥は止た温を取るのみ、縁飾あるとなじ、其の女を嫁するに皆早帳を用ゐ、從婢十人に過ぎず、城を攻め邑を拔きて靡麗の物を得れば皆之を有功の將士に與ふ、勳勞の賞すべきには千金を吝まずと雖も、功無くして漫りに施すには分毫も與へず、四方より獻するものは皆群下と分つ、常に葬具の繁者にして益なきを以て、豫め自から終亡の衣服四篋を製するのみ

操の質性頗ふる徳川家康に似たるあり、然れども人と爲り稍々秀吉に類するあり、快濶の間に猜忌を存し、權詐百出一定の情狀を以て測る可からざるが如き是れなり、『曹瞞傳』に曰く「太祖操爲人、佻易無威重、好音樂、倡優在側、常以日達夕、被服輕絹、身自佩小盤盞、以盛手巾細物、時或冠格帽、以見賓客、每與人談論、戲弄言詞盡無所隱、及歡悅大笑、至以頭沒杯案中、肴膳皆沾汚巾幘、其輕易如此、然持法峻刻、諸將有計畫勝出已者、隨以法誅之、及故人舊怨、亦皆無餘、其所刑殺、輒對之垂涕墜痛、終無所活、初袁忠爲沛相、曾欲以法治太祖、沛國桓那亦輕之、及在袁州、陳留邊讓、言議頗侵太祖、太祖殺讓族其家、忠、那俱避難交州、太祖遣使、就太守士燮、盡族之、桓那得自首、拜謝庭中、太祖謂曰、跪可解死邪、遂殺之、中又有幸姬、常從、晝寢枕之臥、告之曰、須臾覺我、姬見太祖臥安、未即寤、及自覺、一棒殺之、常討賊殺寡不足、私謂主者曰、如何、主者曰、可以小斛以足之、太祖曰善、後軍中官、太祖歎衆、太祖謂主者曰、特當借君死以厭衆、不然事不解、乃斬之、取首題徇曰、行小斛、盜官穀、斬之軍門、其酷虐變詐皆此類也」

操死するに及び子丕次ぎ立ち、十月自から皇帝と稱し、獻帝を廢して山陽公とし、改元して延康元年とし、操を追尊して武帝と稱す、次で延康を更めて黃初と號す、黃初二年劉備また皇帝の位に則く、七年丕崩す、年四十、文帝と諡す、太子劉禪立つ、明帝是なり、明帝文武の材あり、操深く之を奇とし愛す、劉曄之を評して曰く「秦皇漢武か儔にして、但た才少しく足らざるのみ」と、在位十三年にして、青龍三年二月崩す、年三十六

文帝、明帝の時は、臣下能く服せりと雖も、英才の士漸く銷亡し、而して司馬懿頗ぶる登用せられ、特に明帝の時に至つては懿等父子三人重職にあり、但だ明帝の才略之を御せりと雖も、帝已に崩じ、皇太子齊王立つに及んでは、幼冲にして且つ明帝の實子に非ざるのみならず、曹爽等また懿に殺されしを以て、政權一に司馬氏の一門に歸し、魏帝は虛器を擁するのみ

齊王在位十五年にして嘉平六年司馬昭に廢せらる、時に年二十三、昭また文帝の子霖の子髦を立て、帝位に即かしめ、改元して正元といふ、髦は即ち高貴卿公也、高貴卿公在位六年、嘉平五年五月崩す、年二十、實は司馬昭懿の子にして懿の弟なりに弒せられし也、高貴卿公の弒せらるゝや、司馬昭操の孫陳留王奐魏王子なりを迎へ立て、景元と改元す、景元四年鍾會、鄧艾等蜀を攻めて其の主劉禪を降し、蜀亡ぶ、此の年昭晉公と爲り、越て三年、咸熙二年二月陳留王を廢し、自から皇帝の位に即き、國を晉と號し、改元して泰始といふ、魏亡ぶ陳留王は此の年即して崩す年二十文帝即位してより茲に至て僅かに四十六年のみ

第十 紀傳の二

劉備 紀 附諸葛亮傳

東漢の世は、皆氣節を尙び、諫力を負ひ、游侠相銜ふの風熾にして、布衣葛巾の徒、諸州を横行して公卿を折くが如きは、世上の皆榮とする所なりしが故に、滔々風を爲して自然に吏權を輕ふせしは論を俟たず、而かも況んや紀綱怠廢して盜賊縱横するの時に於ておや、斯の如き時に方て民間より豪傑の起るは勢ひなり、三國時代、智勇辨力の士盡出せるも亦宜ならずや

劉備の如き、當時傑人中の最たるものなり、始めは民間より崛起し、關羽、張飛の如き猛士と交結し、一隊の民兵を編して黃巾の賊と戦ひ、爾後諸豪傑の間に上下して屢々戦ひ屢々敗れ、而かも常に英傑を以て諸豪雄に重んぜられ、又士民の心を得たるか如き、皆其の人となりを窺ふに至れり、特に曹操に敗らるゝに及んでは、竟に一介の

土地にも有せざりしに、忽ち巴蜀を經略して漢中王と稱し、曹丕漢祚を滅するに及んでは、自から漢の族裔なりと稱して皇帝となれるが如きに至ては、最も其の才識の非常なるを見るなり。

吳は地形を得て能く固し、蜀は一方に徧安し、地狹く兵少きも尙ほ動もすれば魏を攻伐せり、蓋し劉備の大度と、諸葛亮の才俊とに由ると雖も、抑もまた多とせざる可んや、假令其の功を成さず、却てために滅亡を早くしたりと雖も、徒らに自から守りて能く成すなきに比すれば、遙かに優さるしといはざるを得ず。

蓋し劉備は名分主義に由れり、魏を以て賊とし、自から漢の賊を討平すべしと宣言せり、所謂『漢賊不兩立』の主義にして、之がために力めて魏を攻伐せるなり、名分のためには利害得失を問はず、人事を盡して以て天命を俟つといふ、乃ち亦一見識なり、夫れ天下を取る必らず一定の準なかる可らず、或は智勇により、或は地勢に依り、或は名分による、劉備は實に名分によれるものなり、而して魏の智勇と吳の地勢と相較せんとす、固より人世の一奇觀ならずや。

劉備字は玄德、涿郡涿縣の人なり、其の先は漢の景帝の子中山靖王の後なりといふ、或は曰く「臨邑侯の枝屬なり」と、備の祖父雄東郡范令たり、雄の子弘、弘備を生む、備幼にして、母と屢を販き席を織て業とす、其の家の籬邊に桑樹の高さ五丈餘なるあり、遙かに望めは幢々として、小車蓋の如し、往來のもの皆往む、涿人李定いふ「此の下必らず貴人を出さん」と、備幼時郷中の少兒と樹下に戯れ、常に曰く「我れ當に此の羽葆蓋車に乗るべし」叔父子敬誠めて曰く「爾と妄語せば我か一門を滅せん」と、年十五に及んで母行て學ばしむ、同宗劉德然、遼西の公孫瓚と共に前九江太守盧植を師とす、德然の父元起常に備に資給すると其の子と同じ、元起の妻之を諫む、起曰く「我か宗中に此の兒あり、常人に非ざれば也」と、瓚深く備と友たり、備甚だ讀書を樂まず、狗馬音樂を喜び、衣服の美を好み、身長七尺五寸、手を垂るれば膝を過ぎ、顧みて自ら其の耳を視る、沈黙寡言にして善く人に下る、喜怒色に顯はれず、而して交結を好み、豪俠年少争ふて附き、河東の關羽字は雲長、涿郡の張飛字は益德等皆結んで兄弟となり、備に兄事す、中山の巨商張世平、蘇雙等馬を賣て涿郡に往來し、備を見

て之を異とし、多く金財を興ふ蓋し備によりて盜賊の備是に由て徒衆を合す、黃巾の賊起るに及んで徒衆を率ひ、校尉離靖リョウセイに従て賊を討じ、功を以て中山安喜尉と爲る、督郵公事を以て縣に抵り、備の賄賂を納れざるを怒て之を見ず、備吏卒と共に門を破て入り、督郵を縛して境上に至り、其の綬を解て督郵の頸に繫け、笞つと一百餘、飄然官を捨て去る。

大將軍何進丹陽に兵を募らしむるや、備之に應て下邳に抵り、賊を討て功あり、下密丞に除せられ、また官を去る、後に高唐尉となり、令に遷り、賊に破られて公孫瓚に投ず、瓚表して別部司馬と爲し、青州刺史田楷のために往て袁紹を拒がしむ、後に平原の相を領す、郡民劉平なるもの備の下たるを恥ち、客をして之を刺さしむ、備外は賊を防ぎ、内は士卒を恵み、貴賤共に同席して食す、客備を刺すに忍びず、之に語て去る、備の人心を得たると斯の如し。

曹操の徐州を攻むるや、陶謙急を田楷に告ぐ、楷乃ち備と共に之を救ふ、時に備の兵千餘人及び幽州烏丸の雜胡兵あり、又饑民を收めて數千人を得たり、謙丹陽の兵四千

を備に益す、備依て楷を去て謙に歸す、謙表して豫州刺史と爲し、小沛に屯せしむ、時に興平元年あり、此の年謙病篤し、別駕糜竺ヒシに謂て曰く「劉備は非ずんば徐州を安んずると能はず」と、國を擧げて備に與へしむ、謙死するに及び、竺州民と共に備を迎ふ、備固辭す、下邳の陳登備を諫めて曰く「今漢室衰微し、海内傾覆す、事功を立つる實に今日にあり、徐州は殷富にして、戶口百萬あり、宜しく州事を撫臨すべし、」備曰く「袁公路備が近く壽春にあり、四世五公、海内に重んぜらる、州を以て之に與ふるに如かず」登曰く「公路は驕豪にして、亂を治むるの主に非ず、今使君のためは步騎十萬を合せんとす、上は以て主を匡し、民を濟ふて五霸の業を成すべく、下は以て地を割き境を守て功を竹帛に書すべし、使君若し聽かずんば登また敢て使君に聽かず、」北海相孔融亦備に謂て曰く「袁公路は豈國を愛ひ家を忘るゝ者ならんや、家中の枯骨何ぞ意に介するに足らん、今日の事百姓能に與みず、若し天の興ふるを取らずんば悔ゆとも及ぶべからず」備竟に徐州を領す、

建安元年袁術來て備を攻め、徐州を争ふ、備張飛をして下邳を守らしめ、自から術を

拒ぐ、淮陰右亭に戦ひ、互ひに勝敗あり、呂布隙に乗じて下邳を襲ひ、曹豹の内應に由て張飛を走らし、竟に下邳を取り、備の妻子を收む、備布に降る、布大に喜び、自から徐州牧と稱し、備を豫州の刺史とす、備關羽をして下邳を守らしめ、自から小沛に在り、また兵を合して萬餘人を得たり、布之を憎み、自から兵を出して備を攻む、備依て走て曹操に依る、操厚く之を遇し、表して豫州牧と爲し、沛に屯して布を圍らしむ、初め備袁煥を茂才に擧ぐ、煥後布に抑留せらる、布書を作て備を罵辱せしめんとす、煥肯せず、布大に怒り、刀を抜て之を脅す、煥自若として晒つて曰く、「惟だ徳以て人を辱むべし、未だ罵言を以て辱むるを聞かず、彼れ賊に君子ならば將軍の言を耻ぢず、若し小人ならば復た將軍の意に復せんぞとす、乃ち辱は此に在て彼に在らず、且つ換他日劉將軍に事ふる猶ほ今日將軍に事ふるが如けん、若し一旦茲を去て復た將軍を罵らは可ならんか」布慚て止むといふ

建安三年九月布また備を攻む、曹操備を助けて布を撃ち、竟に布を擒にして之を斬る、操表して備を左將軍とし、之を禮すると愈々重く、出づるときは車を同ふし、坐する

ときは席を同ふす、然れども備は決して操の下風に立のものに非ず、時に獻帝の舅董卓の勢力強大なるを惡み、帝と共に之を謀らんとす、帝指を咬みて詔を書し、承に賜ふ、承依て密に備と謀り、兵を擧げて操を討んとす、操一日從容として備に謂て曰く、「今天下の英雄は誰ぞ」備依て之を擧ぐ、操曰く「袁紹は色勵ふして膽薄く、奸謀決するなく、大事に當て死を惜み、小利を見て生を輕んず、固と癡病の輩のみ、袁術は家中の枯骨、劉表は酒食に溺れ、孫策は父の名を籍る黃口の兒なり、劉璋は門を守る犬の如し、張魯、韓遂が輩に至ては、固より徑々の小人何ぞいふに足らんや」と竟に曰く「天下の英雄止だ使君と我とのみ」備依て操に忌まれんとを虞れ、退きて後園に耕す、既にして袁術自立すると能はず、走りて袁譚に投せんとす、操依て備をして之を邀へ撃たしむ、備往く、郭嘉諫て曰く「備は人傑なり、今往かしむるは虎を野に放つが如し」操悔て之を追はしむれども及はず、備竟に徐州刺史車胄を殺し、關羽を留めて下邳を守らしめ、自から小沛に還る、州中多く操に叛きて備に屬す、備の兵數萬人、孫乾を遣

はして袁紹と連和す、操の長史劉岱及び王忠等備を討つ、備之を敗る、時に建安四年なり

建安五年春董承等の謀漏れ、操に殺さる、操竟に備を討つ、備以爲らく、操紹と相持す、今卒かに來る能はずと、已にして操來る、備大に驚きて敗走す、操進んで下邳を拔き、張遼をして關羽に説き降らしむ、羽曰く「我れ三約あり、皇叔備と漢室を扶けんことを誓ふ、故に今漢に降て操に下らず、是れ一也、二嫂備の夫人彼れに在て給養すべし、門に到ることを得ず、是れ二也、我が主備の所在を知らば、我れ直ちに辭し去るべし、是れ三也、此の三約聽かれは乃ち降らん」と、操之を許し、羽を封して漢壽亭侯とす、備青州に走る、青州刺史袁譚紹は備の前の茂才なり、歩騎を率以來つて備を迎ふ、備共に平原に抵る、紹將を遣はして迎へ、鄴を距ると二百里にして備と相見ゆ、父子心を傾けて備を敬重す、既にして敗卒稍々來り集まる、時に紹操と官渡に相持し、汝南黃巾の劉辟等操に叛きて紹に應ず、備即ち辟等と許下を畧せんとす、會々關羽逃れて來歸す、備曹仁と戰ふて利あらず、紹の軍に還る、既にして紹を去るの志あり、

依て紹に説で南荆州牧劉表と連和せしむ、紹乃ち備をして汝南に至らしむ、備鄧都等と衆數千人を合す、操蔡陽を遣はして之を攻めしむ、備戰ふて陽を殺す、建安六年操自から汝南に抵り、備を討て之を敗る、備荆州に逃れ、糜竺、孫乾を劉表に遣はす、表自から備を郊迎し、上賓の禮を以て之を待し、兵を益して新野に屯せしむ、荆州の豪傑備に歸するものは益々多し、備荆州に在ると數年、會て表が坐に於て起て圃に上り、反て慨然流涕す、表怪で問ふ、備曰く「我れ平生鞍馬を離れず、肉皆消す、今久しく騎せざるかために神裏肉生ず、日月流るゝが如く、老將は至らんとし、而して功業立たず、是を以て悲むのみ」

『世語』に記して曰く「備屯樊城、劉表禮焉、憚其爲人、不甚信用、會請備宴會、劉越蔡瑁欲因會取備、備覺之、僞如圃、潛遁出、所乘馬名曰的盧、騎的盧走渡襄陽城西檀溪水中、溺不得出、備急曰、的盧今日厄矣、可努力、的盧乃一躍三丈、遂得過、乘槎渡河、中流而返者至、以表意謝之曰、何去之速乎」

備は荆州に於て初めて自立の地歩を作れり、何となれば謀將智臣多く此の時に來屬し

たればなり、始め關羽、張飛、備に兄事し、其の袁紹に依れるとき、故の公孫瓚の部將趙雲來り屬し、各々非常の勇士なりしと雖も、未だ智謀の臣を得ず、然るに荆州に來るに及んでは、徐庶の如き智臣を得、其の謀を以て曹仁、夏侯惇、李典、于禁等と戰ふて之を敗り、樊城を取れり、始め徐庶人の托を受けて仇を殺し、自から單福と稱して亡命し、備を助けて操の兵を敗る、操聞きて曰く「單福とは何人ぞや」程昱其の實を告ぐ、操曰く「卿と徐庶と才の優劣如何」昱曰く「我れは徐庶の十中二三を得しのみ」操大に歎すといふ、徐庶更に諸葛亮を備に薦めて曰く「諸葛孔明は臥龍なり、將軍之を見るを願はんか」始め備名士を襄陽の司馬徽に問ふ、徽曰く「時勢を識る者は俊傑なり、此の間自から伏龍鳳雛あらん」備問ふ「誰ぞや」徽曰く「諸葛孔明、龐士元なり」と、徽清雅にして人を見るの鑑識あり、同郡の龐徳公固より重名あるを以て之に兄事す、徳公常に孔明を稱して臥龍といひ、士元統をいふ、徳公の從子也を鳳雛といひ、徳操司馬徽の字と氷鑑といふ、是に於て備庶に謂て曰く「孔明卿と俱に來るへんや」庶曰く「此の人就て見るへし、屈し致す可らず、將軍宜しく駕を在て之を見るへし」と、備由て三

び亮を隆中に訪ひ、聘して軍師とす、次でまた龐統を得、是より備始めて基業を啓くを得たり

建安十二年曹操北烏丸を伐つ、備劉表に説て許を襲はしむ、表用ゐず、操竟に烏丸を征服するに及び、表憮然として備に謂て曰く「君が言に従はざりしがため此の大會を失ふ」備曰く「今天下分裂して干戈日に相尋ぐ、時會の來る豈終極あらんや、若し能く之に後に應せば、未だ恨とするに足らず」と、翌年表病篤し、依て國を備に托して曰く「我が兒不才にして諸將亦零落す、我が死後卿ために荆州を攝せよ」、備曰く「諸子賢なり、君夫れ自愛せよ」と、或る人備に勸めて表の言に従はしむ、備曰く「此の人我を待たると厚し、今其の言に従はば人必らず我を以て薄とせん、敢てせざる所なり」と、既にして表死す、始め表に二子あり、長を琦といひ、次を琮といふ、表會て琮のために其の後妻蔡氏の姪を娶る、蔡氏はより琮を愛して琦を憎み、蔡瑁と謀て琦を除かんとす、琦自ら安んぜず、諸葛亮に禍を免るゝの計を問ふ、亮答へず、後に亮と樓に上り梯を去る、琦曰く「今日上は天に至らず、下は地に至らず、卿の口より田で、我が耳に入る、

以て告ぐべきや」亮曰く「君申生内に在て危く、重耳外に居て安かりしを知らずや」琦感悟し、黃祖死するに及んで自から其の任に代り、江夏の太守となる、曹操來て表を伐つに及び、會々表卒し、蔡氏等遺命を矯めて琮を立つ、琮竟に操に降る、時に備樊にあり、琮の降れるを聞き、人を遣はして其の實を問はしむ、琮乃ち宋忠をして意を備に傳へしむ、而して操進んで宛に至る、備駭然として忠に謂て曰く「卿等諸人事を爲す斯の如し、早く相告げずして禍今至て始めて我に告ぐるも又太しからずや」依て刀を引て曰く「今卿が頭を斷つも以て忿を解くに足らず、又大丈夫別に臨んで卿が鞏を殺すを恥づ」と、忠を遣はし去らしめ、部下を呼て計を議す、諸葛亮曰く「今直ちに琮を攻めは荆州保つべし」備曰く「劉荆州表を終に臨んで我に托するに遺孤を以てす、信に背きて自から利するは我がせざる所なり、若し之を爲さば、死して何の面目か能く劉荆州に見えんや」と、衆を率ひて襄陽を過ぎ、馬を駐めて琮を呼ぶ、琮懼れて起つと能はず、琮が左右及び荆州の人多く備に歸す、備表の墓に辭し、涕泣して去る、當陽に至るに及んで衆十餘萬、輜重數千輛、日に行くと十餘里に過ぎず、別に關羽を遣は

し、舟を以て江陵に會せしむ、或る人曰く「宜しく速かに行て江陵を保つべし、今大衆を擁すと雖も甲を帶するもの極めて少し、若し操追至らば何を以て拒ん」備曰く「大事を濟すは必らず人を以て本とす、今人我に歸す、我れ何を捨去るに忍びんや」と、操江陵に軍實多きを以て備の之に據るを恐れ、輜重を捨て、急馳襄陽に至り、備既に走れりと聞き、更に精騎五千を以て急に之を追ひ、一晝夜に行くと三百里、當陽の長阪に及ぶ、備妻子を捨て、諸葛亮、張飛、趙雲等數十騎と走る、徐庶が母操に獲らる、庶固と孝心に深し、依て其の心を拊て備に謂て曰く「固と將軍と共に玉璽の璽を謀らんとするは止だ此の方寸を以てのみ、今老母を失ふて方寸亂れ、事に益なし、請ふ之より辭せん」と、涙を揮て操に投ず、然れども肯て操がために一計を策せずといふ此の時備は張飛、趙雲の勇を以て幸ひに免れ、斜めに漢津に赴き關羽の船と會じて鴻に渡り、劉琦に逢ふて共に夏江に至る

此の時に方て備は實に一介の土地をも有せざる浮浪人たりしなり、然れども巧みに孫權と結び、大に操を赤壁に破りて荆州を取り、次で巴蜀漢中を略し、竟に三國鼎峙の

勢ひを成せり、非常の英略に非ずして何ぞや、
 初め劉表の死するや、魯肅孫權に謂て曰く「荆州は與國にして隣接し、江山險固、沃野萬里、士民殷富也、若し據て之を有せば是れ帝王の資なり」と、自から請ふて往き、表の二子を吊ひ、兼て劉備に結んで共に操を討んとす、而して肅未だ至らざるに操既に漢津を渡り、備南走す、肅依て當陽に於て備に遇ひ、權の旨を述べ、天下の事を談じ、且つ問て曰く「君今何くに往んとする」備曰く「曾て蒼梧の太守吳臣と相識る、由て往て之に投せんとす」肅曰く「孫討虜^備を聰明仁惠、賢を敬ひ士を禮す、江表の英豪悉く歸附す、已に六郡に據有して兵強糧多し、以て事を立つるに足れり、今君のため計るに、先づ腹心の士を遣して自から東に結び、連和の好を堅よして以て世業を成すに如かず、吳臣の輩は平庸にして且つ遠郡に僻在す、將に人に亡ぼさるべきのみ、何ぞ相托するに足らんや」備乃ち進んで鄂縣の樊口に往き、諸葛亮をして肅と共に孫權に見へ、同盟の誓を爲さしむ、是に於て赤壁の役あり

此の年^{建安十三年}十月備吳の舟師と共に大に操の軍を破り、水陸並進んで南郡に至る、操竟

に引きて歸る、周瑜依て南郡の太守となり、南岸の地を割て備に給す、備別に營を油江に立て、改めて公安と名く、劉表の將士操に従へるもの多く叛き來て備に投ず、備瑜の給する所の地狭きを以て更に權に請ふて數郡の地を借り、十二月瑜を表して荆州刺史とし、又南四郡を征す、武陵太守金旋、長沙太守韓玄、桂陽太守趙範、零陵太守劉度皆降り、廬江太守雷緒部曲數萬口を率ひて來附す、既にして瑜病死す、群下竟に備を推して荆州牧とす、備公安に治す、孫權稍々之を恐れ、建安十四年十二月表して備を荆州牧とし、又其の妹を納れて備に娶はす、妹才捷剛猛にして諸兄の風あり、侍婢百餘人、皆刀を執て侍立す、備入る毎に心常に懾々たりといふ、權の臣下方備を殺さんとす、周瑜權に勸めて曰く「劉備烏雄の姿を以て而して關羽張飛等熊虎の將あり、必らず久しく屈して人の用たらし、恐らくは蛟龍雲雨を得て竟に池中の物に非ざらんとす」備聞きて歎して曰く「天下智謀の士見る所略々同ト、孔明曾て我れをして行くと莫らしめんとせるは、蓋し之がためなり」と、然れども當時備が禍を免かれし其の策も亦甚だ奇なり、蓋し備は巧みに孫夫人^{孫權の妹にして備に嫁せる者}を籠絡せるが如く、權の群下

等已れを殺さんと謀り、危害正に急なるや、入て夫人を見る、夫人其の愛色あるを見
 て怪んで故を問ふ、備曰く「荆州危を告ると急なり、回て救はざる可らず、今夫人に
 別るゝに忍びざるのみ」夫人曰く「已に君が妻たり、水火相従ふべし」備益々愆然とし
 て曰く「夫人の賊悦ぶべしと雖も乃兄孫登之を許さんや、我れ一び去て屍を何處の沙
 場孫に曝すを期せず、一別竟に永訣たらん、夫人若し憐まは幸ひに他年地下に於て相會
 せん」と、夫人益々固く共に去らんと請ひ、相携へて江上に祖先を祭ると稱し、依て
 俄かに備と共に趙雲等を従へて逃る、權の臣下等兵を率して之を追へば、夫人悉く叱
 して之を逐ふ、備ために免かるゝを得たりといふ

既にして孫權備と共に蜀を取らんと欲し、使をして備に説かしめて曰く「張魯巴漢に
 在て曹操の耳目となり、以て益州を窺ふ、而して劉璋勇なく自から益州を守ると能は
 ず、萬一蜀折れて操に歸せば、荆州必らず危からん、先づ璋を攻て次で魯を討つべし、
 首尾相連つて呉楚を一統せば、十百の操あるも憂ふるに足らず」或る人また備に勸め
 て曰く「呉の請ひに従ふべし、呉は到底荆州を越へて蜀を保つと能はず、蜀亦必らず

我が有たらん」主簿殷觀進んで曰く「若し呉の先驅たらば、進んで蜀に勝つ能はず、退
 いて呉に乗せられん、如かず暫らく其の計を贊し、而して諸郡新附未だ俄かに兵を用
 ゐがたきを以て之を拒まんには、呉必らず我れを越て獨り蜀を取らト、乃ち進退の計
 一に我れに在て呉蜀の利以て収むべし」と、備また自から巴蜀を擧るの志あり、依て
 殷觀の言を納れ、呉の使に答て曰く「劉璋弱しと雖も自から守るに足り、張魯虚偽、必
 らずしも操に心服せず、今師を蜀漢に曝し、萬里に轉運して全勝を得るが如きは、是
 れ孫武、呉起と雖も善くせざる所なり、或は操赤壁に大敗せるを以て、力屈して復た
 遠圖なしとする乎、是れも亦違へり、夫れ操今は天下を三分して其の二を保つ、將さ
 に馬を滄海に飲ひ、兵を吳會に觀さんとするべし、何ぞ晏坐して老を待たんや、今之れ
 をして其の隙に乗せしむるは長計に非ず」と、權聽かず、水軍を發して夏口に至らし
 む、備其の過るを許さず、曰く「若し強ひて蜀を取らんと欲せば、我れ當に被髮して
 山に入るべし、信を天下に失はず」と、關羽をして江陵に屯し、張飛をして秭歸に屯し、
 諸葛亮をして南郡に屯せしめ、自から涪陵にあり、權備の志を察して竟に軍を呼び還

是より先き操荆州を下し、軍を江陵に進むるや、劉璋其の別駕張松をして操に至らしめ、松自から其の才辯を恃み、璋の謀るに足らざるを以て操に勤めて益州を取らしめんとし、操に見えて稍々嬌語を發す、松人ど爲り短小、容貌頗ぶる醜卑にして且つ放蕩なり、操已に荆州を定め、備を走らしめしを以て意氣四方を呑み、また松を顧みず、操の主簿楊修深く松を器とし、操作る所の兵書を示す、松宴飲の間一ひ見て乃ち暗誦す、修益を奇として之を操に薦む、操また用ゐず、是に於て松大に怨みて、去て備を訪ふ、備厚く之を禮遇し、懇懇を盡し、依て蜀中の地理及び人馬の實狀を問ふ、松地に畫して山川を圖し、具さに其の虛實を語り、備を勤めて益州を圖らしめ、遽て璋に勤て操と絶ち備に結はしむ、建安十六年操大軍を發して張魯を討しむ、璋聞て大に懼る、松説て曰く「曹操兵強くして天下に敵なし、若し漢中を擧げて更に蜀に向はば、誰か能く之を禦んや」璋曰く「我れ亦之を憂ふ、未だ計を得ざるのみ」、松曰く「劉豫州備は君の宗室にして操の深仇なり、而して善く兵を用ふ、若し之をして魯を討たしめ

ば魯必らず破れん、魯破れば則ち益州強く、操來ると雖も能く爲すとなけん」璋可とし、法正をして四千人を將ひて備を迎へしむ、前後路遺巨億を以て數ふといふ、正は松の友にして亦詭計の士なり、備の雄畧あるを知て奉戴し、松と謀つて益州を經營せんとす、是に至て備に見へて益州取るべきの策を勸む、備未だ決せず、龐統曰く「益州土肥へ財富ひ、誠に以て資と爲すを得ば大業成るべし」備曰く「今現に我れと水火を爲すものは曹操なり、彼れ急を以てせば我れ寛を以てし、彼れ暴を以てせば我れ仁を以てし、彼れ謙を以てせば我れ忠を以てし、毎事彼れと反せば乃ち成るべきのみ、今小利のために信義を天下に失はば奈何せん」統曰く「逆に取て順に守るは古人の貴ぶ所、若し事定まるの後、封するに大國を以てせば何を信に負かんや、今日取らずんば竟に人の利と爲らんのみ」備以て然りとし、乃ち諸葛亮、關羽等を留めて荆州を守らしめ、步卒數萬人を率て益州に入り、巴郡に至る、太守嚴顏心を拊て歎じて曰く「是れ所謂獨り窮山に坐して、虎を放て自から衝るものなり」と、備涪に至る、璋出で、自から迎ひ、相見て甚だ歡ぶ、松正をして備及び統に説き、會に依て璋を襲はしむ、

備曰く「是れ大事、倉卒にす可らず」と、璋備に兵を増じて張魯を討たしめ、又白水の軍を督せしむ、備軍を并する三萬餘人、車甲器戎資貨甚だ盛なり、既にして璋成都に還る、備葭萌關に至り、未だ魯を討たずして厚く恩徳を以て衆心を収む。

建安十七年操吳を伐つや、權備を呼で相救はしむ、備使を遣はし璋に請ふて曰く「操吳に向ふ、吳は我れと唇齒たり、且つ樂進青泥に在て關羽と相持す、今往て救はずんば進大に克て轉た州界を侵さん、其の憂魯より甚しきものあり、魯は自ら守るの賊慮るに足らざるなり」と、依て璋に萬兵及び資貨を求めて以て東行せんとす、璋止た兵四千を與へ、他は皆請ふ所の半を給す、備因て其の衆を激怒せしめて曰く「我れ益州のために強敵を征し、未だ寧居に違わらず、而して璋斯の如し、功を賞せんとするも其れ得んや」と、松書廣漢太守を備及び正に與へて曰く「大事成るに垂んとす、何を釋て去るべけんや」會々松の兄肅廣漢太守の其の謀を知りて璋に告ぐ、璋怒て松を斬り、始めて備と絶ち、關成の諸將に命じて文書また備に通ずるとなからしむ、備大に怒る、統備説にて曰く「今陰かに精兵を擇び、晝夜兼行して徑路より急に成都を襲はば、一舉して事

定まらん、是れ上計なり、楊懷、高沛は璋が名將にして各々兵を伏せて關頭に據守す、聞く屢々璋に勸めて將軍を荊州に還しむと、將軍人を遣はして荊州急あり還て之を救はんと聞説せしめば、二人喜で必らず來見えん、依て之を執へ、進んで其の兵を取て成都に向はん、是れ中計なり、還て白帝に退き、荊州を連引して徐かに還て之を圖るは是れ下計なり、若し沈吟して決せずんば大難の至る遠からず」と、備其の中計に従ひ、白水軍の都督楊懷及び高沛を召し、責むるに無禮を以てして之を斬り、直ちに關中に入て諸將士の妻子を質とし、進んで涪城に據る、一夜置酒高會し、顧みて統に謂て曰く「今日の會樂しといふべし」統曰く「人の國を伐て樂むは仁者に非ず」備醉ふて怒て曰く「武王紂を伐つ、前歌後舞す、而かも仁者に非ずや、卿が言非なり、宜しく速かに去るべし」統逡巡して退く、備尋で大に悔ひ、請ふて統を故位に復す、統始めより願謝せず、飲食自若たり、備曰く「前の論孰れか失する」統曰く「君臣共に失ふ」と、依て大に笑ひ、宴樂初めの如し、璋其の將劉瓚、冷苞、張任、鄧賢等を遣はして之を拒ぐ、皆敗走し、退て綿竹を保つ、璋更に李嚴を遣はし、綿竹の諸軍を督せ

しむ、嚴衆を率ゐて備に降る、備が兵威益々強し
 建安十九年諸葛亮關羽を留めて荊州を守らしめ、張飛、趙雲と兵を將ひて流れに遇り、
 巴東、巴郡、巴西、德陽及び江陽、犍爲を定む、備兵を進めて洛城を圍む、龐統流矢
 に中て死す^{年三}、竟備に城を陥れ、進んで成都を圍む、會々馬超來て降る、超は猛將にし
 て始め操に破られ、走て張魯に頼り、魯が爲すに足らざるを見て竟に備に歸せるなり、
 時に成都に精兵三萬と一年の糧穀あり、吏民皆死戦せんとす、璋曰く「父子州に在る
 と二十餘年、恩徳の百姓に加ふるなし、何の心か能く安んせん」と、竟に出で、降る、備
 之を公安に移し、自から益州牧を領す、蜀中殷富豐樂なり、備大に將士を饗し、城中
 の金銀を頒賜し、其の鞞帛を還し、諸葛亮を股肱とし、法正を謀主とし、關羽、張飛、
 馬超、趙雲、黃忠を五虎將軍とし、許靖、糜竺、簡雍を賓友とす、又董和、黃權、李
 嚴等は璋の任用する所、吳懿、費觀等は璋の婚親なり、彭羸は璋の排せる所、劉巴は
 宿昔忌恨する所なり、而して備皆之を顯任に置きて以て其の才能を盡さしむ、是に於
 て名士競ひ進み、益州の人心大に和す

始め備の新野より江南に走るや、荆楚の群士之に従ふと雲の如し、而して劉巴獨り操
 に歸す、諸葛亮書を以て之を招く、巴從はず、備深く恨む、巴後に蜀に入り璋に依る、
 璋備を迎ふるに及んで巴諫めて曰く「若し備をして漢中を討たしめば、是れ虎を山林
 に放つが如きのみ」と、備成都を圍むに及んで令して曰く「巴を害するものは三族を
 誅せん」と、巴を得るに及び大に喜んで、西曹掾と爲す、既にして軍用足らず、備大
 に愛ふ、巴曰く「是れ救ひ易きのみ、止た當さに直百錢なるを鑄て物價を平にし、吏
 をして官市を爲さしむべし」備之に従ふ、數月の後府庫充實す

蜀郡太守許靖始め璋に背きて備に降らんとす、備之を以て靖を誦んじて用ゐず、法正
 曰く「天下虚譽を得て其の實なきものあり、靖の如き是也、然れども今主公^備を始め
 て大業を創す、天下の人戸毎に説く可らず、靖が虚名四海に播流す、若し禮せずんば
 天下の人皆以て賢を賤むとせん、宜しく先づ敬重を加へて燕王の郭隗を待するが如く
 すべし」備之に従ふ、正蜀郡太守楊武將軍に任せられ、言聽かれ謀行はる、依て得
 意に乗じて一飯の恩、睚眦の怨必らせ報わさるなく、恣に人を殺す、人或は諸葛亮に

謂て之を鞠治せしむ、亮曰く「主公の公安に在るや、北曹操を恐れ、東孫權を憚かり、内は則ち孫夫人變を肘腋に生せんとを恐る、法孝直正之が輔翼となり、翻然翺翔また制す可らざらしむ、今如何ぞ孝直を禁止して少く其の意を行ふを得ざらしめんや」諸葛亮相とあつて蜀を治むるや、頗ぶる嚴峻なり、人多く怨歎す、法正曰く「昔者高祖關に入て法三章を約し、秦民徳に歸す、願くは刑禁を寛にして民望を慰せよ」亮曰く「卿は其の一を知て未だ其の二を知らず、夫れ秦無道を以て苛政民怨を招き、匹夫大に呼んで天下竟に土崩す、高祖之に由て弘を以て濟ふべし、劉璋は闇弱にして徳政修まらず、威刑行はれず、蜀人專權自恣し、君臣の道漸く陵替す、之を寵するに位を以てし、位極まれは則ち殘む、之に順ふに恩を以てし、恩竭れば則ち慢る、弊の在所なり、我れ今之を威すに法を以てす、法行はれば則ち恩を知る、之を限るに爵を以てせん、爵加はれば則ち榮を知る、榮恩併ひ用ゐて上下節あらは、治の要著はれん」と、法正歎服し、蜀竟に能く治まる

建安二十年孫權諸葛瑾をして荆州の諸郡を求めしむ、始め備蜀を討つや、權曰く「猾

虜詐を挾むと斯の如し」と、茲に至て備既に益州を得たるを以て、荆州を返さんとを促せしなり、備曰く「須からく涼州を得て而して後に荆州を返すべし」、權長沙、零陵、桂陽三郡の長吏を置く、關羽悉く之を殺す、權大に怒り、呂蒙をして襲ふて三郡を取らしむ、備兵五萬を引て公安に下り關羽をして益陽に入らしむ、權魯肅をして之を拒かしむ、時に操張魯を攻めて漢中を取る、備益州を失はんとを恐れ、和を權に求めむ、權諸葛瑾をして報命せしめ、更に盟好を尋ぎ、竟に荆州を分て湘水を界とし、長沙、江夏、桂陽より東は權に屬し、南部、零陵、武陵より東は備に屬す、備依て西江州に歸り、黃權を遣はして魯を迎へしむ、魯既に操に降り、操夏侯淵、張郃をして漢中に屯せしむ、淵等屢々境を犯す、備張飛をして之を拒ぎ、張郃を瓦口に破らしむ、建安二十二年法正備に勸めて曰く「操一舉して漢中を降せるも、勢に乗じて巴蜀を圖らず、却て夏侯淵等を止めて俄かに北歸せるは、其の智及はず力足らざるが故に非ず、必らず内憂の迫れるを以てのみ、今計るに淵及び張郃等は將帥の才畧なし、之を討たば漢中必らず得べし、已に漢中を得て兵食を貯へ、以て臨を窺はば、上は以て天下を